

---

# あしたの君と

蒲公英

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あしたの君と

### 【Nコード】

N4750R

### 【作者名】

蒲公英

### 【あらすじ】

「フツの恋ってヤツ」「あたしの座る場所」に続いて、社内恋愛のシリーズです。場所と登場人物は同じです。

力一杯努力なんてしたことのない俺・萩原慎。なんでも適当にこなせる器用者。新しく派遣社員として入社した坂本葉月は、どうも薄暗い女だ。だけど薄暗い理由は、自分からは想像もできないことらしい。そこから抜け出そうとする彼女に、手を貸すことはできるのだろうか。

## 器用貧乏(前書き)

デートDVについて扱います。トラウマのある方は、ご覧にならない  
いでください。

## 器用貧乏

山口さんが新しい部署に移ってから、ものすごい短期間で津田さんは「山口化」した。そう言ってもツメの甘さは相変わらずで、細かいミスは多いけど。もともと直系で山口流を受け継いだ人だから、仕事の進め方は覚えていたらしい。つまり、指示する人がいなくなっただけで、自主的に動くようになったってことなんだな。

野口さんは相変わらず開発営業部の島の向かい側に座っている。キレイで女っぽいけど、ちょっと怖い。もうじき結婚はするらしいけど、辞めないって話。

ってことは開発営業部では俺が一番下なのは、変わらないってことだ。

津田さんから引き継いだ「フォレストハウス」の担当は、やたら小柄な美形だった。引き継ぐ前に「驚くなよ」と釘を刺されていたけど、上から下まで見てしまって、特に胸と喉仏をしっかりと確認して、がっかりした。

惜しいと思ったところで打ち合わせに入ったら、図面と同時に工程を押さえているような人で、ついでにきっちり値引き交渉までしていった、見た目で舐めた自分を呪った。

津田さんのツメの甘さなんて問題じゃないくらい、俺の方が不慣れだ。

「萩原君、これの排気口動かさないと、ショートサーキットする。見直して」

野口さんからメールが送られてくる。売り掛け管理・物件管理だけじゃなくて、図面のラフまでチェックしちゃう野口さんは、商品についても俺より詳しい。

若くてカワイイ女の子、入んないかな。頭下げっぱなしじゃなく

て、目に優しい潤いのある、楽しい職場。願わくば脚が綺麗で、髪にゆるやかなウェーブがあつて、笑窪なんかも出るといいな。それで、「図面読めないんですう」なんてね。

隣の席で津田さんがそくさと帰り仕度をはじめ。子供が顔を忘れてしまうから、とマジな顔で言う。マイホーム・パパってヤツかな。決まった女の顔を毎日見て、それで幸せなんだと実感する・  
・なんだか、理解できない。

もつとも津田さんの奥さんは、かなり可愛いつて話だけど。社内恋愛なんてお手軽だし、逃げ場所がないじゃないか。社内に可愛い女の子がいれば、それは観賞用にしておかなくちゃ。

・・・つてわけで、今週の金曜日は合コンだもーん。がんばろ。

「えー？女の子なんて、若くて純情な方がいいに決まってるじゃないっすか。合コンで持ち帰れちゃうような女とは付き合いたくないですよ」

「喰い散らかした拳句に喰った相手を気に食わないっつてか。いつペん死んどいた方が世のためだぞ」

「いや、軽い気持ちでそういうことできちゃう女はカンベンって言うかー」

「軽い気持ちでそういうことしてんだろ、おまえが」

津田さんとの女の子談義は、なんか食い違うんだよな。津田さんは一本気だし、融通が利かない。その上、心にもないことが言えない。よく営業なんてやってられるよな、でも成績は悪くない。

「津田君はいいのよ。ミスしても自分が悪いって認めて、誠心誠意で謝れる人だから。顔作れない分作為が持てないのを、客先が知ってるしね」

野口さんはけろりと言う。

「萩原君みたいに小手先のプライドなんて通用するのは、小商いのうちだよ。もうちょっと修行すんのね」

小手先のプライド・・・意味わかんないけど、褒められてるんじゃないことは確か。俺は失注も少ないし、他の部署との連携もそれなりに上手くこなしてると思うんだけど。

確かに「器用貧乏」っていうのは言われ続けてる気がする。子供の頃から、大した努力もしてなかった。運動神経はそこそこあったし、必死で受験勉強しないで入れる高校に行って、指定校推薦で入った大学を出て、いくつかの就職活動で就職が決まったのはラッキーだっただけかも知れない。家賃は会社が半分出してくれるから、大学時代ほど経済的には苦しくない。女の子に嫌われるほど、容姿も悪くない。女の子が喋りやすいのは、重いところがないからだと言われたことはある。

いやいや、それは違うでしょう。

俺は可愛い女の子と仲良くしたいし、仲良くするためならつまらない話だって聞けるし。向こうだってそのつもりなんですよ？需要と供給で世の中回ってんだから。

山口さんなんかしれっと職場恋愛して、多分秘密がスパイスってやつだったんだよな。俺は毎日顔見てる女となんて、刺激がなくてごめんだね。漏れ聞いた津田さんの純愛騒動の詳細は誰も教えてくれないし、やっぱり社内恋愛だったらしいってことだけ。会社の女の子とは当然仲良くしたいけど、ドツボにはまっちゃう危険は回避したい。うっかり結婚とかって騒がれてみる、別れた時にワルモノにされちゃうじゃないか。

そういうことにならないように、上手く立ち回らなくちゃね。

経理に新しく入った派遣の坂本は、暗くてつきあいが悪い。顔立

ちは悪くないが、いつも濃い色の長袖シャツに黒っぽいパンツだ。話しかけてもこっちの顔を見ないし、無表情な上目遣いで用件だけを単語で喋る。無敵の山口さんが誘っても、飲み会には参加しない女の子たちに言わせれば、それなりにノリも悪くないらしいし、頭も良いらしい。

はじめは気が弱くて何も言えない子なのかと思ってたけど、そうじゃない。他人の顔色を窺いながらも、仕事上の不備についての指摘は的確だ。だから、純粹に男が嫌いなんだと思う。

「坂本さん？彼氏、いる筈だよ。たまに駅で待ち合わせしてる。学生かなんかかな。オットメ人の格好じゃないけど」

野口さんがそんなことを言うのを聞いて、びっくりした。表情に乏しくて瘦せぎすの彼女が、男と会話しているなんて想像もできない。

「萩原君にイメージが似てるよ。優男風で調子良さそうで」

「俺、硬派ですよ」

「ご謙遜」

ま、モノズキはいるもんだし、俺には御免被る坂本だけど、その男には良い顔ができるのかも知れない。しかし、男がいてあれだけ薄暗いヤツも珍しいよな。知ったこっちゃないけど。

もつとこつ、見るだけで嬉しくなるような女の子、派遣で来ないかなあ。最近合コンもパツとしないし誘う手順も面倒だしで、どんどんお手軽な女の子ばかりが相手になってるし。仕事を陰で支えてくれて、しかも優しい笑顔・・・なんてね。営業先の受付の女の子のチェックも怠ってないつもりなんだけど、どうもこれって感じじゃないんだよな。まあ、出されたものを美味しくいただくのはモットーにしてるから。

「合意だから、敵とは言わないけどね。女の子甘く見てると碌な死に方しないよ」

野口さんがにこりともしないで言う。女の子だって俺のこと甘く見てるじゃん。

深く考えずに行こうよ、軽くたつて重くたつて、なるようになるもんなんだから。努力と根性、一生懸命、そんなウザい言葉が大層な価値を持つものなんて、学生さんだけだし。受験勉強で半狂乱になつてたヤツが、蓋開けてみたら同じ大学だったこともあつたっけ。どうせ同じ道を歩くんなら、苦労する分損見る気がする。

俺は俺のペースで充分満足できるんだから、無理も無茶もする気なんかない。



## 怯えの表情

「萩原君、経理から顧客マスタの不備が戻ってる」

野口さんからまわってきたファイルには、坂本の記名があった。

不備部分を改めていたら、ちょうどパーティーシヨンの隙間に坂本の細い影が通ったので、呼び留める。

「悪いけど資産状況とか公開してない会社だから、興信所に問い合わせさせてくれないかな」

それだけのことなのに、坂本は表情を強張らせた。何も言わずにファイルを受け取り、パーティーシヨンの外に消える。

「なんか怒らせたわけ？坂本さん、変だったね」

「え？いつもああですよ」

「それ、おかしいね。堅いけど、腰が低くてちゃんとしたいい子だよ」

野口さんと津田さんが頷きあっているのを見て、俺だけに対する態度なのだと知った。

「なんかしたんじゃないの？帰りに待ち伏せして口説いたとか、入社する前に合コンで持ち帰ったとか」

「俺って、それだけのキャラクターですか？」

向かい側の席で、野口さんが大きく頷くのが見えた。はあ、左様でございますか。でも俺は、坂本と個人的に話したことはないです。年齢さえ知らないです。興味ないからね。

朝、給湯室の前で聞き慣れない笑い声を聞いた。綺麗な笑い声だな、新しい女の子かな、なんて思わず覗き込むと、野口さんと一緒にいる坂本だった。

「あ、女の子がいると顔出す人が来た」

野口さんが人聞きの悪いことを言う。

「坂本さん、近付くと妊娠するかも知れないよ、気をつけてね」

野口さんのベタなオヤジジョークは、坂本の前で滑って転んだ。急に顔に無表情を張り付けた坂本が、サーバーから自分のカップにコーヒーを注ぎ始めたから。

「失礼します」

そう言っただけで足早に給湯室から出て行く後ろ姿の、ひとつに結んだ髪を呆然と見送る。野口さんも呆然としていたが、しばらくしてから俺に紙コップを差し出して、口を開いた。

「やっぱり記憶にもないところで、萩原君が何かしたとしか思えない。思い出せ」

「何もしてませんって!」

理由なんて、坂本に聞いてくれ。

坂本が不備のあった顧客マスタのデータを持って、パーティーションの内側に入ってきた時、俺は最高潮に不機嫌だった。生産が遅れた商品が現場の工程と折り合わず、フォレストハウスの担当との意見のすりあわせが上手く行かずに、メーカー変更による赤字が発生したからだ。俺の客先だとわかっていながらもかわらず、坂本は野口さんに興信所のデータを渡そうとした。

「なんで直接俺に渡さないんだよ。俺があんたに何かしたのか」  
思わず荒い口調で文句を言った。

俺、とんでもなくひどいことなんて言っていないよな？別に殴りかかりそうでもなかったよな？思わず、自分に確認する。

デスク越しに血の気の引いた坂本の顔がある。そして浮かんでいるのは、理解しがたい表情だった。瞳が光を失って口角が下がり、頬の辺りが引き攣れた顔だ。そう、怯えの表情。目の早い野口さんがすぐに気がつき、俺に目配せを寄越した後、何気ない仕草で坂本の視線を遮った。

なんだ、あれ。あの表情は俺に向けられたものか。坂本がパーティーションの外側に去っていくのを、野口さんと一緒に目で追った。

「なんかあるね、あれ。萩原君、本当に身に覚えない？」

「あるわけないじゃないですか！マトモに声聞いたこともないのに」  
そこへ、津田さんが帰還した。新しい物件で山口さんと連動しているらしく、山口さんも一緒。野口さんが要領良く山口さんに話しているのを、横で聞いていた津田さんが何か思い当たったらしい。

「それ、何かフラバってんじゃないか。たとえば、萩原の声とかで何か怖いもの思いつくとか」

一斉に津田さんの顔に視線をあてる。

「らしくない分析。何事？」

「知恵熱出るんじゃないか？」

うわ、山口夫妻（入籍前）口揃えてる。

「ああ、ちよつと勉強したから・・・って、俺ってその程度なんですか、まだ？」

申し訳ないけど、俺にも意外だった。津田さんは一本気で裏表なくて融通が利かない人っただけで、そんなことを調べるタイプには見えなかったから。ただ山口さんと野口さんは頷いただけで、そういう一面のある人だと知らないのは、俺だけだったらしい。

髪を下ろした坂本を見るのは、はじめてだった。普段は後ろで無造作に束ねている髪を、顔の横に垂らしている。まあ、女の子だし髪型くらい不思議には思わない。その顔に大きくガーゼを貼り付けていなければ。

顔の左半分、目尻横から頬にかけて貼られたガーゼから、覗く肌の色が不自然だ。朝に顔をあわせた瞬間、通常挨拶もしないことを忘れて、つい声を出した。

「なんだ、その顔？」  
驚いた分、声は大きかった。

ひい、喉が引き攣れる声が漏れた。そして、小さく顔を庇うような仕草。俺が今にも殴りかかる気配を持ってでもいるかのようだ。

そして、そのあと気がついたように表情を立て直し、下を向いたまま自分の肩を抱き、足早に去っていった。まるで、俺が坂本に悪意を持って怖がらせたみたいだ。

悪意や嫌悪感を持つほど、坂本を知らない。坂本だって、俺のことを知っている筈はない。萩原の声で何かを思い出すとか、と津田さんは言っていたけど、その予想は外れていないかも知れない。

「なーんか坂本さん、自転車で顔から転んだって言ってたけど。どんな運動神経なんだろうね、それ」

隣の部署の女の子が笑いながら言うけど、俺はそれに納得しない。坂本は俺に向かって、顔を庇う仕草をしたんだ。もしも津田さんの予想が当たっているのだとしたら、あれは誰かに危害を加えられた形だ。

殴られたか何か。ガーゼの下から覗いた肌の色は、黄色味がかっていた。多分、内出血してるんだ。

女の子が内出血するほど殴られる？誰に？

おお、怖い怖い。こんなこと考えたって仕方ない、俺には無関係のヤツなんだから。俺を見て怖がるんなら、顔を合わせなければ、お互い不愉快でなく万事解決。変に気にしちゃって、頭突っ込んだらトラブルの元。

関係のない女の子に気を取られるほど暇じゃないし、不自由もしてない。ただし身に覚えがないことで嫌われるのは、面白い筈がない。

## 疑念勃発

朝の満員電車の中で、新聞を読む迷惑なオヤジを肘で押しやりながら、オヤジの手元にある記事が目に入った。

急増するデートDV・声を上げられない中高生

DVって言葉は、知ってる。家庭内暴力のことだ。夫が妻を殴るとか、子が親を蹴るとか。そんな家見たことないけど。一時的に腹を立てて殴っちゃうってのはあるだろうけど、一方的に殴られ続けてそれでも離れられないなんて、すでにそういうプレイだろ。いい大人が、自分で逃げられない訳がない。で、推測するに、デートDVってのはデート相手からの暴力ってことだ。

別れりゃいいじゃん！会わなきゃいいじゃん！

好きな相手のことなんて殴れるわけないし、殴られるのがわかってて会いに行くんなら、大したことはないってことだ。

「坂本さん、彼氏と仲良いんだよね。毎日駅まで迎えに来てるみたい。残業しないでまっすぐ帰るし、この間なんて新しい指輪買ってもらったって言ってたよ。いいなあ」

坂本と同じ経理にいる女の子がそう言った時、何か引つかかるものがあつた。毎日迎えに来るって相当ヒマなんじゃないかってのが一つと、派遣だから基本的に残業はないけど、残業の時も待ってるのかつてのが一つ。そんなに入れこむような女にも見えないし、大体ちつとも華やかさが無い。

「彼氏が、どことなく萩原君と似ててね。背格好と目のあたりかな、ちよつとチャラ系で」

「俺、硬派だつて」

「閻魔様に舌抜かれるよ」

「二枚あるからいーもん」

だから萩原君は調子良いって言うのよーなんて言われながら、席

に戻る。何か考えついた気になったけど、そのまま日常の中に忘れ  
た。忘れたってことはつまり、俺にとってどうでも良いことだから  
だ。

どうでも良い筈のことが気にかかったのは、閉店間際のパチンコ  
屋の前に立っている坂本を見たからだ。堅そうなビジネスバツ  
グの坂本は、きらびやかなネオンの前でとても浮いていた。学生時  
代の友人と会うためだけに行った街で、俺の普段のテリトリーとは  
まったく違う場所なので、まさかそんなところで知っている顔があ  
ると思わず、まじまじと見て目が合った。知らんぷりするのもお  
かしな話なので、大人らしくちゃんと挨拶をした。

「坂本さんがパチンコなんかするの？ちよつとイメージ違うね」  
驚いたことに坂本は、薄く笑って返事を返した。

「ううん、彼氏がね、中にいて。終わるの、待ってるの」  
ふうん、やっぱり仲が良いわけだ。パチンコ屋の外で待たせとく  
つてのもナンだけど。

「葉月」

後ろから声がした。坂本がぱつと振り向く。じゃあな、と手を振  
ると、後ろで確認するやりとりが聞こえた。振り返ると確かにチャ  
ラ系学生風、あれが俺に似てるって言われると、とてつもなくへこ  
むんだけど。彼女待たせてたのに、なんかすっぱー不機嫌フェイス  
の俺様男、そんな感じ。趣味が悪い同士がくつついているように見  
えるんだけど、破れ鍋に綴じ蓋ってヤツかな。そんなことを思いな  
がら、俺は帰途についた。

翌日、坂本は会社を休んだようだった。経理が内線に出るのが遅  
い、と野口さんがブツクサ言ったので知った程度だ。昨日彼氏と遅  
くまでウロウロしてたからなー、気楽でいいなーなんて聞いていた  
のだが、野口さんの顔はもっと不満げだ。

「坂本さん、仕事は丁寧だし良い子なんだけど、突発で休むんだよね。派遣さんだから、有休じゃなくて本人の給料が減るだけだけど。そのところ、惜しいんだよなあ」

事務の仕事っていうのは俺にはよくわからないから、ふうんと受け流した。月末月初に経理が休むと大変なことになるのを知っているだけだ。坂本が彼氏と居たことは言わなくても良いことだし、俺にはやっぱり関係はないのだ。

その翌日出社した坂本は、相変わらず長袖のシャツにパンツ姿で、ただ足元は履き潰したスニーカーだった。

「コケて捻挫したんだって。見かけによらないドジだよな」

他の部署の女の子からそれを聞いたとき、脳裏に浮かんだのは電車の中で見た新聞記事のタイトルだ。何故それが結びついたのか・  
・ああ、そうか。俺に向かって顔を庇って見せたからだ。俺に似てるって言われる彼氏の不機嫌フェイス、坂本の仕草、そして怪我。

おい、冗談じゃないぞ。

誰かに筋道を整理して欲しかった。言いふらして良いことと悪いことの区別くらいはつく。山口さんが仕事を終えるのを横目で待っている、野口さんが帰り支度を始めている。披露パーティーの打ち合わせがある、なんて言ってる人に声は掛けられない。

裏表なし、全部顔に出る津田さんに若干不安はあるんだけど、自分の混乱を解決するのが先だ。朝から頭の中に出てくるのは「殴られる女のイメージ」だけだった。珍しく俺から声をかけたからか、津田さんは奥さんに電話を入れていた。

「うん、暁くんのお迎えも頼む。ごめん」

あ、そうか。共稼ぎだと保育園の迎えもあるのか。気がつかなかった。

居酒屋のカウンターに並んで座って、感じていることをポツポツ

と話す。津田さんは途中から身を乗り出すように聞き、デートDV  
ってやつだと思つと俺が結論付けるとしばらく黙りこんだ。

「誰にも、言つてないよな？」

「言えるわけじゃないですか」

「言つなよ？」

ふう、と津田さんは溜息をついた。

「ああいうのつてな、基本的には周りはどうこうできないんだ。本  
人がどうにかしたいと思つた時に、助けるのがせいぜいで」

津田さんらしくないセリフに、思わず顔を見る。

「逃げたくなつたら助けるよつて意思表示をしとくのは必要だけど  
な。本人が隠したがつてるんなら、気がつかないフリしてろよ」

「気がつかないフリで助けるよつて・・・何ですか？」

「自分は悪意持つてないつて見せるだけでいいんじゃない？知らない  
けれど」

なんかいろいろ動揺して、更に落ち込む日だった。女を殴る男が  
いるつてことだけでも驚きなのに、それにくつついてる女が身近に  
いるつて憶測が憂鬱で、わけがわからない。顔も作れない単純で一  
本気な筈の津田さんは、重たい話を淡々と受け止めてアドバイスを  
くれる程度に大人だった。世間様は思っているよりも狭い範囲で、  
俺の知らない生活があるらしい。

深く考えないと解決できない事件は、深く考えることができる人  
にだけ起こるわけでもないのかも。

たまたま早上がりした日に、駅で彼氏と待ち合わせた坂本を見た。  
彼氏は機嫌の良さそうな顔で、坂本も嬉しそうにしている、殴られ  
てるんじゃないかっていうのは勘違いだったかと胸を撫で下ろした。  
「お疲れー」と手を振ると、坂本の彼氏は愛想の良い顔で、ぺこり  
と頭を下げた。表情ひとつで俺様から気の良い青年に変わるんだか  
ら、俺も見る目ないな、なんて少しばかり反省もした。



穿った見方をして俺が勘違いしてただけで、俺が坂本の好きじゃないタイプだってだけだろう。そう思うと気楽になった。そう言えば、指輪がどうか言ってたもんな。

あーあ、どっとお疲れ。

却って、気にしていたのは津田さんだった。津田さんは視線のコントロールが全然効かないから、何を考えてるのかすぐにわかっちゃう。

「なーんか、ご執心じゃない？他の女に目が行ってるって、沢城に言いつけてやる」

野口さんにそう突っ込まれるのは当然の成り行きで、そこでしどろもどろになるのが、後輩として情けない。会議室に引っ張って行かれた津田さんからバトンを渡されたのは、三十分も経っていなかった。

「野口さん、すっげー怖いんだもん」

「知らんふりしとけて言ったの、誰でした？」

相談相手を心底間違えたと思ったが、先日の嬉しそうにしていた坂本を思い出し、間違いでしたと訂正すれば良いことだと、野口さんの待つ会議室に向かった。

「津田君の話じゃ、要領を得ないのよね。他人事だから放っておけばいいんだけど、寝覚めの悪そうな話だから」

「あ、俺の勘違いだったみたいです。ふたりに嬉しそうに歩いているの見たし」

「バカね。それ以外は普通の人だから、発覚しないんじゃないの。ちよっと思ひ当たる節もあるし」

野口さんの顔は案外とマジで、笑い飛ばそうとした気分が止まった。

「ま、あんたたち子供に何かさせようと思ってないから、気にしないでいいわ。とりあえず気がつかないふりしてて」

お局って立場じゃなくても、頭が良くて仕事の早い野口さんは、女子社員の中では取りまとめ役的な存在だ。

「お節介したいわけじゃないけどね、何かありそうなとき対処してあげられればいいと思って」

ふうん、別れたほうがいいとかって言ってやるわけでもないのか。いくつかの質問を受けた後、他言無用の念押しをされて、解放された。持っていた疑念を、自分の手から他人の手に渡してしまった開放感で、幾分ほっとしたのも確かだ。

坂本の声は綺麗だ。気がつかなかったのは、のびやかな声を聞いたことがなかったからだ。給湯室で女の子同士の話の最中に入ってしまった時、ちょっとした衝撃でもあった。

「坂本さんの声、いいなあ。俺好み」

「さすが萩原君、褒めるところが違う」

一緒にいた女の子が笑う。

「いや、マジで」

坂本は驚いたように俺の顔を見て、小さな声で礼を言った。ああ、なんだ、普通じゃん。すつごく普通だ。

## パニック

駅のベンチに野口さんと坂本が並んで座っていたのは、二時間の残業を終えた俺が帰る時間だった。

「どうしたんすか？」

「ん、坂本さんが彼氏と待ち合わせだって言うから、山口君も遅そうだし、時間潰し」

あ？坂本って毎日定時帰りじゃなかったか？口を開こうとしたところで、野口さんの目配せに気がつく。一緒に電車を見送って、十分も待っていたところで男が来た。

「あ、どうも、いつも葉月がお世話になっております。こいつ、とろいから迷惑かけてますでしよう？」

さくさくと挨拶する男は、チャラくても気の良さそうな男に見える。ふたりが去って行ったあと、野口さんは大きく溜息をついた。

「あれ、ちよつと大変かもね。見たでしょ？」

シアワセソーなカップルなら見ましたけど、何か？

「定時から今まで待たせて、ごめんの一言もなし。普通なら待つてないでしょ。あたしが一緒に座つてたのは一時間かそこらだけど、その間連絡もなかったよ。何回か、帰らないの？って聞いたわけ。勝手に帰ると怒られるからって言うてたけど」

「そこまでラブラブなんじゃないっすか？」

「ラブラブな男が、彼女にそんなことさせるか」

閉店間際のパチンコ屋の前に立つ坂本を思い出した。彼氏が遊んでいる間中、そこに立っていたのか？

「待つてないで、帰りゃいいのに」

「帰ったら怖ろしいことが起こるって、刷り込まれてたら？」

「怖ろしいことって？」

「殴られるとか、別れると言われるとかね。それとの大きなギャップになるけど、それ以外はベタベタに甘い」

野口さんはもう一度、溜息をついた。

「まあ、結構ある話なわけよ。深刻になる前に気がつく人が大半だけだね、そういう友達も見たし。さて、確認できたところで帰るわけ。次の電車に、一緒に乗る。」

「やっぱり似てたね」

「へ？ああ、坂本さんの彼氏ですか？似てないでしょう」

「背格好と雰囲気似てるのよ。萩原君にだけ過剰反応するの、理解できる」

「うわー、迷惑。女殴る（疑いがある）ヤツと似てるなんて言われたって。大体、野口さんってそこまで他人事に首突っ込む性質だっけ？」

「姉が昔、男に煙草押し付けられたことがあるのよ。黙ってる人じゃなくて良かったけど」

ああ、納得。

「野口さんのお姉さんじゃ、黙ってなんかいないでしょうね」

「そうね、あたしなら三倍返ししてやるけど、姉は別れただけだったわ」

野口さんなら、三倍どころか社会的に抹殺されそうな気がする。

この人を制御する山口さんって、一体何者・・・と思っっているうちに、乗り換え駅に着いた。

「どうやって手懐けたんだか、坂本が給湯室で野口さんといることが増えた。野口さんさえ一緒なら、坂本の俺に対する態度は普通だ。ある朝、給湯室にコーヒーをもらいに行くと、坂本と隣の部署の営業事務が入っていた。」

「おはよう、萩原君。コーヒーでいいの？」

営業事務の女の子に差し出された紙コップを受け取り、野口さん

と一緒にやなくても大丈夫かな」と坂本にも声を掛けてみた。

「坂本さんも、おはよ」

振り向いた坂本は少し驚いた顔をした後、俺が始めて見る顔をした。まるで梅の花がゆっくりとほころんだような、やわらかい顔。

「おはようございます」

これが坂本の笑顔か、と気がつくのに時間がかかった。つまり、それまで正面からその表情を、見たことがなかったってことだけ。不覚にも坂本に対してときめいてしまったというのは、記憶すべきことだろうか？その気分は午前中いっぱい、自分の中に持ち越していた。

駅のベンチに座る坂本をまた見掛けたのは、そのすぐ後だった。

「今日も彼氏待ち？毎日、仲いいね」

坂本は曖昧な笑みを顔に張り付かせて、小さな声で「お疲れ様でした」と言った。電車が入ってきて人が吐き出されると、坂本は途端にそわそわして俺に目も向けなくなった。

ああ、そうですね。彼氏がそんなに待ち遠しいですか。

彼氏が電車から降りてこなかったのを確認してから、急に居心地の悪そうな顔になった坂本は、また小さな声で「お疲れ様でした」と呟いた。

「葉月」

俺の後ろから聞こえた声に、坂本はびくんと飛び上った。振り向くと、坂本の彼氏がおそろしく機嫌の良い顔で立っており、俺にぺこりと頭を下げた。

「モト君、えつと、会社の人。今、そこで会って」

坂本は彼氏の顔を見ながら、必死の言い訳口調になった。浮気現場を押さえられたわけじゃあるまいし。なんだか白けた気分です。また明日」とその場を離れた。

振り向くと、不機嫌な顔になった坂本の彼氏と、蒼白な顔で彼氏に話しかける坂本がいた。

なんだ、あれ。

ざくざくと不揃いに切られた髪。首の横一直線についた傷。美容院で切られたものではなく、自分の意思で切ったものでもないことは、一目瞭然だった。女の子たちまで遠巻きにしている。普段より遅くなって出社した野口さんが、息を飲み込んで口を塞いだ。

どう考えても、間違いない。あいつが切った。多分束ねた髪を引っ張って、裁ち鋏か何かで。その光景を考えようとするだけで、身震いがした。

気丈なのか感覚が麻痺していたのか、坂本はデスクでPCを打っていた。俺は経理の島に用事のあることは少ないので、どんな表情で仕事していたのかは知らない。経理の横にある流通管理部のブースに行こうとしていただけだ。

パーションの出入口から、坂本の薄い肩が見えた。そして書類を横の席に回そうとして、身体を傾けた坂本がふと目を上げた。

瞬間、凍りついた表情。小さく唇が動いた。

「・・・やだ」

俺に対して何か言ったんだという認識で、俺は聞き返した。

「・・・やだ。ごめんなさい・・・ごめんなさい！」

声が少しずつはつきりしてくる。周りにいる人間すべての視線が、俺と坂本を往復する。

「何言ってるの？」

一歩踏み出すと、坂本は更に怯えた表情になった。

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！やだ　　！」  
頭を抱えて椅子の横にしゃがみこんだ坂本に、經理の女の子が走り寄る。

經理から応援を頼まれた野口さんが、すぐに走ってきた。

「萩原君、とりあえず顔見せないで！誰か、車出してください。混乱してるから、帰させます」

しゃがんだまま音のしそうな震え方をしている坂本は、野口さんと經理の女の子に挟まれて頭を抱えたままだ。顔見せないで、と言われた俺は、仕方なく席に戻る。

あんな怯え方があるか。

何かに激昂して、大きい鉄を取り出した男と、侘びの言葉を叫びながら怯える女。具合悪くなりそう。何をしたら、そんなに腹を立てるんだ。しかも、俺の顔を見てそれを思い出すなんて、あんまりだ。

俺は何もしてない。何もしてないってば！

騒ぎを見ていた人の視線が、やけに痛かった。

## 無駄な責任感

午前中いっぱい留守した野口さんは、しばらく経理部長と会議室に籠った後に席に戻った、らしい。俺は営業に出っていたので、隣の部署の女の子に聞いただけだ。

「萩原君、坂本さんに何かしたんじゃないの？」

「してませんって。マトモに口利いたこともありませんって」

「なんか朝から真つ青な顔してたし、視線飛んでたし。危ない感じはしてたんだよねえ。で、あの髪でしよう？」

さすがにそれ以上何かを聞きたくなかった。頭の中にまわるイメージ。

営業先から戻ると定時は過ぎていて、野口さんが机に突っ伏していた。

「だらしなくて、ごめん。山口君が仕事終わるまで、こうさせてたえ」

野口さんにしては珍しい口調だ。

「なんつか、すつごいディーブな話で。仕事自体は問題あるわけじゃないから、派遣解除はしないらしいけど」

そのディーブな話、俺は要りません、野口さん。

「男と喋ってたから怒ったんだって。それで長い髪は男の目に留まるからってキツチン缺で」

「止めてください、俺は関係ないんですから」

「だって頭からこぼれそうなんだもん。なのに優しいって言うのよ。怒った後に泣きながら謝るって」

ちよっと待て。喋ってた相手って。

「俺だ」

野口さんに目だけで聞き返される。



「坂本さんの彼氏が見た、喋ってた相手の男、俺だ」

「何？どこで？」

「駅で、帰りに会って」

「それだけ？それだけなの？」

野口さんの頭の中にも、何かのイメージが駆け回っているのを感じる。

「怖い」

蒼白になった野口さんは、助けを求めるように営業推進室の方に目をやった。

「そんな人につきあってたら、いつか殺されちゃう」

それについては、至極同感だ。狂気が凶器を持っているようなものだ。

髪を切られたのは、俺のせいか？坂本は俺から離れようとしていた。一緒にいるところを見られたくなかったのだと、今なら理解できる仕事だ。でも、そんな予測がどこでできる？俺の責任じゃない。俺の責任じゃないのに、俺と一緒にいたことで坂本はあんな目にあつた。ああ、駄目だ。イメージするな。俺には何の責任もない。

坂本は髪をショートに切り揃え、居心地の悪そうな顔で出社して来た。消え入りそうな声で「ご迷惑をお掛けしました」と頭を下げ、下を向いて歩く。傷害事件ならば被害者の坂本が、会社でパニックを起こしたただけだ。それが恋愛絡みになると、途端に胡散臭い話が湧き出てくる。

碌でもない男に入れあげてる頭の悪い女。

さらに尾鰭ひらひら、見たような噂が囁かれているのは、自分が聞かなくてもわかる。ああ、もうこの会社にはいられないだろうな。

二週間も経つただろうか。もともと痩せぎすの坂本がますます瘦

せ、目ばかりが大きく見えるようになって、男と別れたらしいと聞いた。なんだか、髪を切られるよりもひどいことがあったらしい。野口さんは知っているらしいが、口を開かない。

「今度こそ殺されると思ったって言ってたわ。ストーカーにならないければいいけど」

実家は危ないと言って、会社の帰りは駅まで誰かと一緒に帰り、月契約のアパートを借りたということだ。これで俺も、無意味な責任感から逃れられる。

坂本がどんな目にあつたのか俺は本当に知らないし、想像もしたくない。

「萩原君、なるべく坂本さんと接触しないようにしてて。やっぱりイメージがダブるのよ」

野口さんの言葉は、具体的にイメージができてしまっている俺にとって、有難い。そして坂本の契約満了日まで経理にあまり顔を出さずに、俺はそのまま忘れちゃえば良いのだ。

良い、善だった。会社を出て駅に向かう道、ひとつ目の角に立っている学生風の男を見るまでは。推定身長173センチ、推定体重65キロ、硬い髪をワックスで寝ぐせ風に・・・つまり、それは俺だ。別に珍しい体格で珍しい髪型じゃない。現に、こことあそこにいるじゃないか。

忘れ物をしたフリをして、ぐるっとまわって会社に向かって歩いた。これ以上、無駄な責任感を引きずるのはゴメンだ。

振り向いて3メートル先に坂本の顔を見つけて、心臓が止まりそうになった。今日は営業推進室の女の子が一緒だ。(こいつは色気がまったくない) 痩せぎすでショートカットのパンツ姿が二人並んで歩いてくる。

目の前に立った時、俺はかなり慌てた顔をしていたんだろう。坂

本がもう一人の背に隠れるようにしたのが見えた。

「こつち、来んな。他の道で帰った方がいい」

不思議そうに見返す顔に、逆方向を指差した。

「なんでもいいから、虎ノ門の駅、使うな。溜池山王でも国会議事堂前でもいいから、逆側に行つて」

そう言っているそばから、坂本の顔が蒼ざめる。肩越しに振り返ると、俺とよく似た（認めたくないけど）髪型が見えた。俺の影になって、向こうからは見えならしい。坂本が死角になるように気をつけながら、後ろを向かせる。

細かく震える坂本の背中をガードしながら、普段使わない溜池山王の駅まで歩いた。どんな怖い目にあつたんだか知らないが、これじゃゆっくり眠れもしないだろう。三枝（新事業の女の子だ）に抱きかかえられるように、階段を降りて行くのを確認してほつと息を吐く。

俺、髪型変えよう。気に入ってたけど。後ろを向かせるために触れた時、それでなくても薄い坂本の肩は、可哀想なくらい震えていた。そんなに怖いものを俺の中に見るなら、髪型くらい変える。体つきは変わらないけど。

「昨日は、ありがとうございました」

坂本がぺこりと頭を下げた。表情は固くて、声も固くて、ずっと下を向いたまま。

梅の花みために笑うのに、のびやかな綺麗な声なのに、そんな風に縮こまる坂本は痛々しい。

その週の合コンで、俺は妙にノリが悪かった。ありえない話だけれど、もしも俺が女の子を暴力で支配してしまったら

本当に、ありえない話だけれど。

怖くて羨ましい

「普段はすごく優しいって言うのよー」

「また、坂本の話ですか？」

「お料理してもヤケドしたりすると保冷材で冷やしてくれたり、好きなケーキ買いに電車でわざわざ出かけていたり。でも、他の男と一対一で話すのは絶対ダメ。仕事の話もダメ。女友達とでも、自分の知らない相手と連絡取っちゃダメ。他の人を褒めるのもダメ。自分の知らない音楽や本の話もダメ」

「話題ないじゃん。学生？」

「なんだか、フリーの工業デザイナーとかって言うってた」

野口さんは普段、会社の女の子たちの噂話をする人じゃない。こんな話を延々とするってだけで、ここ二・三週間の衝撃が理解できる。人伝てに聞いた話と、実際に様子を見た事っていうのは、まるで違う。

坂本をガードしてるのは、野口さんが「信頼できる」と踏んだ一部の人間だ。社内で大っぴらに話題になったら、満了を待たずに派遣社員を変更すると、上は判断するだろうと予測がつく。その後それが事件に発展したら、会社側には関係ないが、事情を知っているものたちにはひどく後味の悪いことになる。

そして野口さんが言うところによると、坂本は「人に気配りのできる優しい子」なのだそうだ。

「出逢った相手が悪いって見極めが遅かったからって、社会的に切り捨てられるのは許せない」

この辺、山口さんというよりも、津田さんっぽい意見だね。俺なら多分、見ないフリして派遣社員の交代に賛成する。

駅まで一緒に帰るのは、状態が悪い時は見ただけでフラバする俺

は、当然のように対象外。津田さんと山口さんも、余程誰もいないときしか駅まで送ったりはしない。そして心外なことに「萩原君と似た男がいたら、避けて通れ」とお触れが出ている。

俺ですか！俺、サラリーマンの制服着てます、あいつみたいにかジュアルじゃないです。髪型も変えました。

そして梅雨に入る頃、坂本は笑顔を見せることが増えて、帰宅時のガードは少し甘くなった。坂本の笑顔はやっぱり梅の花みたいに控えめで、痩せた薄い肩はいかにも薄幸そうだけれど、欠勤も飛躍的に少なくなった。もう大丈夫かも知れない、多分誰もがそう思っていた。

残業中の野口さんの携帯が鳴った時、俺はPCの電源を落としたところだった。メールじゃなくて電話なんだ、珍しいな、なんて思いながら、文房具をしまい始める。

「だめっ！引きとめて！すぐ行くから！」

顔色が変わった野口さんは、まわりをキョロキョロと見回してから俺に目を留めた。

「一緒に来て」

断られるヤツなんていないド迫力。

階段を駆け下りる野口さんの後について走った。時間と方向で、坂本絡みだと理解はできる。向かう先はJTBビルの緑地帯、暗いけれど人通りは少くない。小降りの雨が降っていて、まだ会社用サングラス履きの野口さんと俺は、当然のように傘を持たずに走った。

見えてきたのは困惑した顔の経理部の女の子と、土下座した男と、その横に膝をつく女、つまり坂本。

人前で土下座するか！しかも雨の中！

土下座から顔をあげた男は、心底反省しているように見える。少

しでも好きな要素があれば、期待半分で反省してる筈だと思っちらうだろ顔。なるほど、そうやって人の気持ちにつけ込んで、期待を拳で裏切るわけだ。

「坂本さんっ！」

野口さんの声に、坂本がこちらに視線をめぐらせた。

「ゴルフクラブっ！」

坂本は野口さんと男を見比べたあとに、辛そうに頷いた。

「モト君、もう戻れないよ。私はモト君の言うこと、実行できないもの。その度にモト君に怯えてるんだもの」

そこまで言った坂本は、気丈だった。

「もう、殴らないから。葉月がいないと、生きてる気がしない。頼むから」

男は、坂本しか見ていなかった。坂本の後ろに俺を含めて三人もいるのに。そんなになりふり構わず謝るのなら、はじめからしなけりゃいいじゃん。なんか自分に酔ってるんじゃないか。俺がそんなことを考えている間に、野口さんは坂本の肩を抱えていた。

「モト君、私は一緒にはいられない」

「葉月がいなかったら、俺は死ぬ」

あーあ、臆面もなく言うなあ。

「じゃ、ひとりで死になさい」

耐え切れなくなった野口さんが、口を開いたらしい。

「なんだ、アンタ。他人の話に口出すなよ」

男がやっと気がついたように、野口さんに目を向けた。

「口を出したくなるようなこと、あなたがしてるのよ。気に食わなかったら、あたしもゴルフクラブで殴る？喜んで傷害罪で訴えて差し上げるわ」

強い、そして怖い。

野口さん、大丈夫ですか。

「坂本さんの痣と傷、全部写真に納めたから。二度と近寄らないで」

俺に合図した野口さんは、坂本の肩を抱いたまま、会社への道を戻り始めた。経理の女の子も、とりあえずそれに倣う。俺は背中をガードしながらそれに続いた。なるほど、このために呼ばれたのかと納得しながら。

会社に戻ると、野口さんは一直線に営業推進室に進んだ。そして迷いもなく山口さんを「肇君」と呼び、事情を説明し始めた。残っていた三枝さんが、坂本と同じ方向だと営業車で帰宅することになり、経理部の女の子は駅まで他の男のガード付きで帰される。残された俺も、しまい終えなかった机の上を片付けた。

会議室に入っていた野口さんと山口さんに帰りの挨拶をしようと、前に立つたら中から声が聞こえてきた。

子供みたいな手放しの泣き声と、宿めるような低い声。

野口さん、すっごく怖かったんだ。そりゃ怖いよな、あそこで逆切れされたら、力じゃとても敵わないんだから。会社に入って一直線に営業推進室に行ったことだって、そうだ。坂本は経理部所属なのに経理の上司じゃなくて、山口さんに助けを求めた。

あの野口さんが、子供みたいにわんわん泣いてる。

俺は怖がっていたことにすら、気がつかなかった。

会議室をノックすることはやめて、そのまま帰宅することにする。会社のまわりをキョロキョロして、坂本の彼氏がないことを確認しながら帰る。女の子と楽しく遊んでるだけじゃ、女の子は俺をあやつて頼りにしたりしない。可愛い女の子と仲良くなるためだけの会話で、翌朝になればすっからかんの俺は、どの子がどんな性格だったのか、はつきり覚えていない。それは、相手も同じことだ。俺が何考えてるかなんて、多分興味はない。情けないかも知れない

が、坂本の状態を心配するより、俺にはその考えの方が大きい。  
それは気持ちも良くても、継続して楽しいわけじゃないってこと  
ですか。

坂本は、楽しかったのだろうか？暴力に支配されたような人間関係でも、相手を信頼していたんだろうか？野口さんが山口さんだけに助けを求めたように。はじめは多分、そういう関係が築けると思っ  
ていたんだろうな。殴るようなヤツからは、逃げりゃいい。

だけど「二度としません」なんて、涙を流しながら嘘を吐かれたら？そして「おまえが悪いから」と殴られながら言い聞かされていたら？冷静な判断力を失った状態で受け入れていたら、それが当り前だと自分に刷り込んでしまう。逃げるとか別れるとかよりも先に  
壊れちゃう。

女の子は楽しくて気持ち良いだけの存在じゃない。心底、信頼関係ってのは怖い。それと同じだけ羨ましい。俺に剥き出しの感情を見せる女の子はいない。俺がこんな風にへこんだ時、それを和ら  
げてくれる存在なんて、どこにもないのだ。



## 怯えていない顔

友達と飲みに行っても、隣の席の女の子に気軽に声を掛けられなくなってしまうた。

どうしたことだ、俺が。頭の中にずっとあるのは、坂本の震える薄い肩と、野口さんの泣き声だ。その時だけ楽しく遊んで、後のことは後で考えればいいやって思えない。慣れていた考えを捨てるのは、しんどい。

坂本はガードしてもらっている面子に恐縮しながらも、話す相手が徐々に増えて入社する時の顔が明るい。アパートは、彼氏にまだ知られていないらしい。何度か会社の近所で彼氏を目撃したという情報があつて、みんなそれなりに構えている。坂本は、野口さんの勧めでカウンセリングに通い始めたということだ。時々揺り戻しがあるらしく、辛そうな顔をしている。

朝の給湯室で、坂本がパーコレーターをセットしていた。

「おはよ。俺にもコーヒー入れてくれる？」

声をかけたのは、ちよつと勝負っぽかった。俺だって、俺の顔を見るたびに怯えた表情をされ続けるのは辛い。

「おはようございます。もう少しでコーヒー落ちますから、ちよつと待っていてくださいね」

俺好みの伸びやかな声で返事があつた。

「坂本さんって、何歳？」

「二十三ですよ、萩原さんと一緒」

俺の年齢を知っているのは驚きだった。そして、坂本が怯えない表情で俺の顔を直視したのもはじめてだ。何か言いたそうにしたところで、野口さんが来た。

「おはようございます。コーヒー、もう少しですから」  
坂本が何を言おうとしたのかずいぶん気になってしまい、ちょっと尻の落ち着かない気分、俺はコーヒーを受け取った。

野口さんが席に座り、普通の顔で仕事を始める。普段の生活の中で、他人は見えないことだらけだ。

俺がしんどいと思っていても、誰も気がつかない。津田さんみたいに「わかりやすい人」にも、見えない部分はある。足がつくと思っ  
ているプールで楽々と泳いでいると、足元は奈落だったりして。  
・・怖。

もしかして、俺ってプールの深さも考えないで泳いでるのかも知れない。

帰り際の坂本が腕を引つ張られる、という事件があったのは、もう別れたと聞いてから、二ヶ月も経った頃だ。季節は夏のさなかになっていた。その日は坂本は三枝さんと一緒に、そのずいぶん後ろに津田さんと俺が歩いていて、途中で立ち竦んだ三枝さんの前に、引き摺られるように歩く坂本の姿を見た瞬間、走り出したのは津田さんだ。

「うちの女の子をどうするんだよ！」  
上背のある津田さんに大きい声を出され、男は怯んだように見えた。

三枝さんを庇いながら追いついた俺は、坂本とその男の後ろにいた。

「俺たち、つきあってるんですよ。ちょっとケンカしてて、仲直りしようと思って」

へらつと答えた男に津田さんが殴りかかるかと思っただが、そんなことにはならない。

「坂本さんは一緒に行きたいの？」

腰を屈めた津田さんは、坂本に直接話しかけた。

「行くよな、葉月」

坂本の言葉を先取りした男に津田さんはひどく冷たい声を出した。「あなたには聞いてない」

普段まったく屈託のない津田さんから、そんな声が出ると思わなくて、俺も少し怖い。

腕を掴まれたまま顔色と表情が消えた坂本が、俺たちの方に顔をめぐらす。三枝さんまで辛そうな顔で坂本を見返している。

「行きたくない」

唇の動きだけみたいなお小さな声で、坂本は津田さんに返事した。

「行きたくないの・・・ごめんなさい・・・ごめんなさい、ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

頭を抱えるように座り込んだ坂本に三枝さんが駆け寄り、津田さんは唇を噛んだ。

「あなたのつきあうつてのは、こうやって人間を壊すことか？三枝さん、悪いけどタクシーで送って行って。萩原、タクシー捕まえて回して来い」

男に掴みかかることもなく、冷静に坂本の状態を見た津田さんは、俺の知っている津田さんよりもずいぶん大人だ。タクシーを捕まえることしかできなかつた俺は、津田さんよりも全然役立たずで、情けなかつた。

梅の花みたいなお坂本の笑顔は、またしばらくの間、誰も見る事ができなくなる。男と対峙していた筈の津田さんの元に戻ると、男は去った後で、津田さんは「ああ、やだやだ」と吐き捨てるように呟いた。

営業途中のひどい夕立で、ぐしゃぐしゃになって会社に帰った。

ひどい有様になってしまつて、とりあえず作業着に着替えて現場用スリッパで社内をペタペタ歩いていると、新聞紙とペーパータオルを差し出す手があった。

「靴の中、気持ち悪くなつてないですか？とりあえず水を吸わせたほうが良いかと思つて」

そんな気の利いたことをしてもらつたことはなくて、びっくりすると坂本だった。坂本から俺に声をかけてきたことと、そんな気遣いをしてもらったことにダブルで驚いて、やけにドギマギしてしまつた。ああ、野口さんが「気配りのできる優しい子」だつて言つたことあるな。ありがとう、と受け取つた。どういたしまして、と坂本が小さく微笑む。

坂本つて綺麗じゃん。怯えたり警戒してたりしない坂本つて、すごく綺麗じゃないか。なんで今まで気がつかかなかつたんだろう。

当然だ。俺の見た坂本は、怯えたりパニック起こしたり、無表情に単語だけで喋つてたんだから。

あいつにイメージが似てるつてだけで。超、迷惑。

俺、女の子のこと殴つたりしないのになあ。だから、そうやって綺麗な顔して欲しいなあ。

坂本は気がつくくと長袖のシャツではなく、半袖のカットソーを着るようになっていた。

「痣がずいぶん良くなつてきたわね。表情も明るくなつたし」

仕事上の問題はなく、欠勤も問題にならなくなつた坂本は、派遣期間が継続になると、野口さん情報だ。そうか、色の濃いシャツとパンツは、痣を隠していたのか。あの細い坂本が、そんなに長い期間痣になるほど殴られていた。殴ることで、何かしたかつたんだろうか。

白い小さな花が枝でほころぶみたいな笑い方とか、アルトの綺麗

な声とか、そんなものは大切じゃなかったのか。俺なら殴って言うことを聞かせるよりも、そっちの方がいい。つまらない話でも、一生懸命に喋る女の子は可愛い。そして可愛いから何かしたいと思うんだし、一緒にいて楽しいんだ。

ああ、理解できねえ！

とりあえず、怯えていない坂本は綺麗だ。

## 視線の行方

綺麗だと思っってしまうと、当然目が行く。目が行って綺麗だと確認すると、今度はどんな表情が一番綺麗なのか知りたくなる。気楽にお茶に誘えない相手なので、知りたくなっても観察することしかできない。

そして観察しているうちに、小さな癖（人に話しかける前に、一度俯いてから顔をあげる）や仕草（伝票類を持ち歩く時、必ず胸に抱えている）に気がつく。気がつく、次もそうかなと確認するために、また目が行く。目が行くと、やっぱり綺麗だと思う。

何かのパターンみたいに、俺は坂本から目が離せなくなった。見たって何にもならない、と自分に言い聞かせると、俺の視線は余計に坂本に向く。ドツボじゃないか。

何かをするどころか、俺の顔を見ると思いたしたくないことを思い出しちゃうのだ。だから見ないことにしよう、と思っても、坂本は目の前を歩いている。堂々巡りだ。

「お、悩める萩原。なんかへました？」

「あ、別に悩んでるわけじゃないっす。野口さんなら、帰りましたよ」

「知ってる。坂本さんと帰った。意外と心配性なんだ、あれで」

山口さんは雑談する気満々で、空いていた津田さんの席に座った。

「なーんか、災難ですよねえ」

「ああ、坂本さんがね。女殴るヤツなんて、本当にいたんだなあ」

山口さんはふうつと溜息をついた。

「津田みたいなヤツもいるのにな」

「津田さん？」

「あー、まあ、いろいろあるわけよ。俺も詳しくは知らないけど。津田は絶対に言わないし」

意外な人の名前が、意外なところに出る。

「萩原から見るとただのバカだろうけどね、あいつはすっごく優しい」

坂本の庇い方を目の前で見ていたので、それはなんとなく理解できる。

「あんまり認めたくないけどね、俺はあいつには敵わないんだよ」  
山口さんは、何故か嬉しそうに笑った。

坂本が実家に戻ったと聞いたのは、その後一月も先になる。坂本の彼氏の目撃情報は途絶えていたし、本人もきっぱりと意志が固まっただけで、これ以上逃げ回っても負担が増えるだけだと覚悟したらしい。

「親が心配して、帰って来いって言うんだって。そろそろ大丈夫かなって。ちょっと危ない気もするんだけど」

山口さんの言うとおり、意外に心配性の野口さんが言う。いくらなんでも、三ヶ月も経てば大丈夫だろう。

カウンセリングの効果は少しずつあるらしく、坂本の表情が明るい日が増える。表情が明るいと、何故か俺まで嬉しくなる。だから見るなって言ってるんだ。余計気になるじゃないか。

靴に入れる新聞紙でわかっていたけれど、お人好しの世話焼きだ。経費精算の日に経理まで金を受け取りに行くよりも、坂本が伝票と受領票を席まで持ってくる。給湯室で置きっぱなしになっている誰かの茶碗を、必ず洗う。

残業のコピー室から、メロディが聞こえた。アルトの小さな声。  
坂本が鼻歌なんて歌うんだ。

邪魔したら悪いかと思っただけれど、俺は翌日の仕事のためにコピー

を何通か取らなくてはならない。

コピー室に入ると、坂本は困った顔をして俯いた。

「サイモン&ガーファンクル、好きなの？」

「すみません」

「謝ることないのに。俺、坂本さんの声好きだし」

女の子たちと仲良くなるための話術、役に立て！

失礼しました、とコピー室から出て行く坂本を見送る。ちょっとだけ、笑ってくれたら良かったのに。

時々、給湯室や通路で坂本が他の人間と喋っている場面を見る。相手は大抵女の子だけれど、山口さんだったりすることもある。笑い声が混ざることがある。ずいぶん慣れたんだな、と思う。尤も、その綺麗な笑い声を、俺が途切れさせる場合も多い。

俺のせいじゃないのに。

俺には何の関係もない女なんだから、俺に笑顔を向けなかつたが俺を見て固まるのが、本当は知ったこつちやない。俺が不愉快にならない程度の扱いならば、別に気にする必要なんか無い。無駄な責任感はお役御免になった筈だし、もともと俺は巻き込まれただけなのだ。痩せぎすはタイプじゃない。脚が綺麗で、髪を女の子らしくゆるく纏めて、笑窪が

なんだか、自分に言い訳してるみたいじゃないか。

例えば学校の先生に褒めて欲しくて、一生懸命漢字の書き取りをする小学生。俺はあいつらの気が知れなかった。逆に苦手教科は担当教師のせいだと、蛇蝎のように嫌う高校生。それも、俺の理解の範囲外だった。

他人に褒められなくても俺は漢字を覚えられたし、教師が嫌いでも成績とは別だったから。ああ、苦手教科だからと言って、理不尽



に嫌われた教師の気持ちなら、今は理解できるぞ。問題は、漫然と  
苦手教科なんじゃなくて、理由ある苦手教科だったことだけだ。

坂本の笑い声は本当に綺麗で、坂本の笑顔は小さな花がほころん  
だようで、ただそれが俺に向けられない。気に病むのは、他の人間  
が手に入れているものだからだ。何故、俺だけに向かないのか。知  
っているけれど、それは俺のせいじゃなくて悔しい。

俺にも、他の人に向ける顔を向けて欲しい。もしも俺が何かした  
だけで、変わるのであれば。

## 駅までの道

「んー、事務職の正社員、会議なんだよね。坂本さん、帰りが一人になっちゃう」

「一人でも大丈夫ですよ、いつまでも申し訳ありません」

坂本と野口さんの会話に口を出したのは、へこんでいたからかも知れない。

「いいよ、俺が後ろからついてくから。もしも坂本さんが危害加えられそうになったら、止めればいいんでしょ？」

「なんか萩原君だとさ、じーっと後ろ姿観察してそんな気がするんだよね」

「勿論です。特にお尻の形」

野口さんとの軽口に、坂本がくすつと笑い声を洩らした。

あ、笑った。愛想笑いじゃなくて、おかしそくに笑った。ものすごく悔しいことに、俺はそれがとんでもなく嬉しい。こんなことで何の抵抗もなく笑うんなら、もっとバカな話してもいいなーなんて、ちらつとガキみたいに思う。そしてその後、自分に向かって全力で否定して、仏頂面になった。

「みんな都合悪くて、だけど危険は回避させたいってことでしょ？俺はこれから帰るところだし、その前を坂本さんが歩いてても問題はないわけだ」

「申し訳ありません」

深々と頭を下げる坂本に、やっぱり距離を感じる。

「坂本さん、俺、同い年。敬語は止めようよ。面倒なことをするわけじゃないし」

瞬間、顔をあげた坂本と目が合った。なんて言うのかな、少し意外なものを見たような表情。

「俺、何か驚かれるようなこと言った？」

「いいえ、ご迷惑だと思っていたので。ありがとうございます」

やっぱり口調は固くて、俺は坂本の後ろを歩くだけの筈なんだけど、俺が危害を与える者じゃないって思ってくれているのか。

「実はまた最近、目撃情報があるの。気をつけて」

坂本がロッカールームに荷物を取りに行った時、野口さんからそつと言われた。しつこいやローだな。そんなに執着するんなら、何故大事に扱わなかった？

「坂本さんには言っていないの。実家では妹が駅まで送り迎えしてるみたいだから、気にすると思って」

「気にしてない時に急に来たら、却ってショックじゃないですか？」  
野口さんは考える顔になった。

「検討するわ。とりあえず、気をつけて」

しつこいやロー、どころじゃなくて執念深いヤローだ。坂本が一人で歩くのを、待っていたに違いない。姿を認めた途端足が動かなくなった坂本に、後ろ１メートルから追いつく。俺は津田さんと違って、女の肩を抱くのには何の抵抗もない。触るのも嫌な女でなければ、むしろラッキーってな感じ。

坂本の肩は想像よりもさらに細くて薄くて、とても頼りない。

「無視、していいんでしょ？行くよ」

顔を見られちゃって開き直った男が、声をかけようとしたのを遮った。

「悪いけど、俺の彼女に気易く声かけないで。あんまりしつこいと訴えるよ」

坂本の肩がびくつと震える。俺の声が怖いのか、彼氏の反応が怖いのか、とりあえず引き離さなくちゃいけないのはわかってているの

で、歩き出す。追って来ませんように。俺、喧嘩は嫌いです、弱いからね。

大丈夫、坂本はパニックを起こしてはいない。

地下鉄の入口で別れるつもりだったのに、後ろが不安で改札も一緒に抜けてしまった。

「萩原さん、銀座線でした？」

「いや、丸の内・・・銀座で乗り換えるから」

坂本は深々と頭を下げた。

「本当にご迷惑をおかけしました」

それから、ちよつと顔をあげた。

「似てませんでしたね」

「え？」

「なんで似て見えただろう。萩原さんとモト君、ちつとも似てなかった」

独り言みたいに、不思議そうな声だ。似ててたまるか。俺は女殴るようなヤツとなんか、似ていたくない。

「俺の方が格段にイイオトコだったでしょ？」

パニックを起こさなかったことに安心して、女の子を守ったって（大したことしてないけどね）高揚感で、かなり気分がいい。

「何か困ったことがあれば、また協力するよ」

調子よく請け負うような言葉が、口をついて出た。

「いえ、ひとりで凌げるようにならないと」

坂本はどこかが痛むみたいな顔で、俯いた。今まで通りのガードで、男はいつか諦めるだろう。

だけど坂本は、ずっとビクビクして、わけもなく殴られた記憶だけ抱えて、カウンセリングなんかにも通わなくちゃならなくて。

「我慢しなくなっただけいいじゃん。迷惑なら、そんなこと言わないよ。」

俺、そんなに人も良くないし」

ガラにもないことを言ってしまった。ちょっと良い人に見られたい、なんて欲はある。小学生が先生に褒められたいみたいだね。

## 過剰反応

「ご迷惑じゃありませんか？」

飲み会に誘った時の坂本の返事は、それだったという。

「あんなに気ばっかり遣ってたら、カウンセリングの意味ないじゃない」

野口さんは参加メンバーを数えながら、溜息をついた。

「なんて言うのかな、他人のことばかり考えすぎるのよ、あの子。もうちよつと自己中になればいいんだけど」

突発的な飲み会で、メンバーは野口さんが集めてきた。まあ、チーム山口つてところかな。あとは女の子何人か。あ、坂本の事情がある程度知っている人間ばかりか。

何人もで賑やかな中、坂本はけしてノリは悪くない。殆ど聞き役だけど。そして、酒が強い。山口さんと津田さんは、なんだかふたりに静かに飲んでいる。俺はと言えば、何かノリきれない。

普段と変わらない面子だし、宴会での話題なんて、事欠かない。誰とだつて調子を合わせられるし、適当にヨイショして、相手をノセちやうのなんかお手のものだ。それが今日は楽しくない。なんだか空疎な気がする。

はじめて声をあげて笑う坂本を見た。笑い声だけは聞いたことあるけど、あんな顔するんだ。髪がずいぶん伸びたな。また、前みたいに後ろで束ねるのかな。ちよつと待て。それは俺と何か関係があるのか。

隣の団体さんは賑やかで、仕切りの襖越しに声が聞こえる。そのうち少しずつ不穏な声の調子になってきて、襖蹴倒されたらやだなーなんて、時々聞き耳を立てながら宴会を続ける。津田さんが「そ

ろそろ帰る」と立ち上がるうとした時だった。

「なんだと、この野郎！もう一遍言ってみろ！」

襖の向こうから、傍若無人な怒鳴り声が響いた。全員の視線が間仕切りの方を向いて、通路を店員がバタバタ走り始める。

その中で一人だけ、手で顔を覆って身体を縮こめた坂本が異様だ。

「萩原」

もう背広着ちゃってる津田さんに声を掛けられた。

「坂本さんにな、坂本さんのせいじゃないって繰り返して落ちて着かせる。それだけ」

「なんで俺なんですか？」

「見てたじゃん、ずっと。じゃ、お先」

動揺するようなセリフを残して、津田さんが靴を履く。山口さんが肩を震わせているのが見えた。「あの」津田さんですらそう見てたっことは、山口さんがどう思っていたのか想像はつく。

とりあえず、坂本だ。

どうやって声をかけようか、迷った。女の子たちも迷っていて、野口さんだけがかるうじて坂本の肩に手をかけている。そうしている間にも、間仕切りの向こうからくぐもった争いの声が聞こえてくる。

場所を移そうと思っても、坂本は小さく丸まったまま動かない。

坂本に向かい合って膝をつく、野口さんがちよつと咎めるような視線を寄越した。

「怖いのか？大丈夫だよ。坂本さんに怒ってるんじゃないから。坂本さんは誰も怒らせてない」

ゆっくり一言ずつ区切った。

「坂本さんに怒ってる人なんて、誰もいない。大丈夫」

聞こえてるかどうかわからないけど、津田さんが繰り返して言え

って言ったから。野口さんは坂本の背中に手を置いたまま、黙っている。

「坂本さんが怖いことなんて、何も起こらないからね」

似たような言葉をゆっくりと繰り返すうち、坂本のこわばりが解けていく。隣の部屋の言い争いは、いつの間にか低いざわめきに消されていた。

涙の溜まった目を上げた坂本に安心して、みんなは喋りや帰り支度に戻っていく。薄ぼんやりと周りを見る坂本は、まず野口さんと目を合わせ、次に俺と目が合った。俺を見てパニックになるなよ。頼むから。

「今、声かけてくれたのは萩原さんですか？」

まだぼんやりした口調。パニックは起こしてない、萎縮してるだけだ。

「萩原君だよ」

野口さんがまだ坂本の背に手を当てながら、頷いた。

「ごめんなさい。最近、大きい声に過剰反応なの、自分でもわかってるんです」

坂本はぼつりぼつりと詫びた。

「遠くから励ましてくれてるみたいな声で、すごくありがたかったです」

「いや、知ってる人が具合悪ければ、誰でも様子見たりするでしょう？同じじゃない」

言った後、やっぱりガラじゃないセリフだと、妙に恥ずかしい。感謝の目で俺を見る坂本が、もつと恥ずかしい。

どうにかしてくれ！そう思ったところで、野口さんがそつと立ち上がった。

振り向くと、野口さんは山口さんの隣に座り、何事か話してふた



りで肩を震わせている。

「山口夫妻！俺をネタにして笑ってます？」

「こんな面白いこと、滅多にないじゃん」

ああ、居たたまねえ！

そう見えてる？

中学生かよ、俺。女の子に朝の挨拶されて、ドギマギしてる。坂本はすっかり表情が明るくなって、もうすっかり立ち直ったのだと思えるくらいだ。野口さんも「帰りもそろそろ大丈夫かな」とか言ってるし。

突発の休みのなくなった坂本は、気が利くことと仕事が丁寧なこと、派遣は継続になっていく筈だ。

「本当に大変なのは、この先」

津田さんがぼそつと言った言葉は、あんまり意味がわからない。男と別れて、もともとの性格がわかる程度に落ち着いて、何よりもやつれた感じはなくなった。

「パニック起こすような恐怖って、根深いと思うよ」

津田さんが何を調べてどう対処したのか、聞いちゃいけない気がして、何も聞けないけど。噂に聞くしっかり者の可愛い奥さんと一歳の子供、幸せお気楽なマイホーム・パパは、違う場所を見ている。

「知らないんなら、覚えてよ！」

坂本が社内で大きな声を出したのは、はじめてだったかも知れない。相手は隣の部署の営業、坂本が伝票を掴んでいるのが見えた。

「うるせーな。経費のコードなんて覚えてらんねーんだよ」

俺より二年先輩、常に女の子よりも優位に立ちたいタイプ。

「知らない、なんて知らないことが当然みたいに！」

おいおい、どうした？なんて、まわりが注目する中、坂本は自分の感情を抑えこもうと必死になっているように見えた。

事務の女の子が「どうしたのお？」なんて声をかけてる。自分で手に負えない感情を持って余したままの顔の坂本は、動きもせずそこ

に立っていた。

「ヘンな女！これつくらいのことでムキになっちゃって。頭、おかしいんじゃない？」

「言いすぎだよ。自分の不備を棚にあげんな」

津田さんが立ったままの坂本の背を逆に回しながら、その場から引き剥がした。

「言い方はちよつと強かったけど、坂本さんは間違ってるないだろ」  
目をやると、坂本の顔色が白いことに気付いた。

「給湯室でコーヒーでも飲んでおいで、坂本さん。ちよつと落ち着こう」

津田さんに言われるがままに給湯室に進む坂本を、追ってしまったのは何故だ。

給湯室まで行くまでもなかった。坂本は、通路の脇にぺたんと正座していた。

「歩けないの？」

こくんと頷く坂本の細い腕を掴んで立たせると、よろけて壁に手をついた。ああ、足が竦んじやつてるんだ。一緒に給湯室まで歩き、パイプ椅子を持ってきて座らせた。怒っていた筈なのに、言い返された言葉が怖かったんだろうか。

サーバーから紙コップにコーヒーを注いで差し出すと、強張った両手がそれを受け取った。黙ってゆっくり口に運ぶのを確認する。こくんと飲み込むのが見えた。

「もう大丈夫？じゃ、ゆっくり落ち着いてね」

そこに居ちゃいけないような気がして、給湯室を出ようとする、小さな声で侘びの言葉が聞こえた。

大声で怒るようなことじゃなかった。坂本はあんな言い方をする

ような人間じゃない。いくら女の子鼻屑だからっていつても、あれはどう考えても坂本が圧倒的にヘンだ。何か虫の居所が悪かったとか、そんな感じなんだろうか。

白い顔に怒りの表情はなかった。腕を掴んで立たせた時も、抵抗する気配なんてなかった。津田さんは黙って仕事をしている。何も聞けない。

「萩原あ」

見積書をPDFで送付した津田さんが、横の俺に顔を向けた。

「こつちで出来ることは、あんたのせいじゃない、あんたは悪くないって言い続けてやることだけ」

「え？なんですか？」

野口さんが向かい側で吹き出すのが見えた。

「俺の時の山口さんと野口さんの気持ちだが、ようやくわかったわ、俺」

「津田君の方が更にわかりやすかったけどね」

津田さんと野口さんがげらげら笑い、俺一人で取り残される。そうか、坂本のことアドバイスくれたのか・・・って、何で俺？俺、そう見えてる？

久しぶりに学生時代の友達何人かと会って、飲んだ。女の子も何人か顔を覗かせて、大騒ぎ。

いいねえ、このノリ。何の憂いもなくただ遊べる場所。

「・・・でつさあ、その男が私のこと叩いたのよ、いきなり！あつたまに来たから、バッグで殴り返して、メアド即削除と着信拒否！」  
「叩いたって、どうやって？」

思わず、身を乗り出して聞く。

「こつ、肩の辺をどんつと。ちょっと仕事に難アリだねって言っただけなのに」

彼女は坂本と違って、細くもなければ弱そうでもない。

「叩いたくらいじゃ壊れないと思って、ふざけただけなんじゃないの？」

「いつくら丈夫だって、男に押されりゃよろけるっつーの。力なんが入ってりゃ転ぶっつーの。それがわかんない男なんて、もともとそんだけの価値！萩原、まさかそんなことしてないでしょうね？」

「俺がするわけないでしょー。女の子の味方だもん」

「味方が敵か紙一重だけだね。ま、そんなことしたらテイクアウトはできないもんね」

「じゃ、叩いたりしないから、テイクアウトされる？」

よくよく聞くと、職業を思いつきりバカにしたらしいと判明し、酔った彼女が肩を押されてよろけたことも判明し、まあバグで殴られた彼は不運だったが、それで殴り返さないのは男にとって普通の感覚だと思う。俺だって、たとえば俺より目線が上の津田さんに殴られたら、怖い。

「俺みたいに優しいヤツにしときなさい、一緒に帰ろ？」

「萩原、見境ナシ？あたしはハズミで寝た男に友情抱けるほど慣れてないんだけど」

「え？俺たちに友情なんてあったっけ？」

「大体萩原は、優しくはない。他人の話なんて、マジで聞いてないでしょ。基本的に他人のこと、どうでもいい人だもんね」

じわじわと効いてくるパンチを、腹に一発喰らったような気になった。俺って「他人のことはどうでもいい人」に見えてんのか。

俺、へこんでいい？みんなそんな風に、俺のこと見てるわけ？確かに真剣には聞いてないかも知れない。大抵のことは俺とは関係のないことだし、はつきり言うどウデモイイ。でも、その人自体をドウデモイイと思ってるわけじゃない。病気すれば心配するし、金が無くて困ってるヤツに肉を食わせたことだってある。

それとは別なこと、なのか？

やっと笑った

坂本がどこがおかしいと思ったのは、俺だけじゃなかった。

「喜怒哀楽が激しいって言うか、視界が狭いって言うか。絡み難いのよね、あんな子だっけ？」

女の子たちからは、何回か聞いた。

「うるせえんだ、派遣のクセに。やたら細かいところで感情的になつて」

男からも聞いた。坂本の評判は、著しく悪くなった。

「コピーを使った後は、リセットしてください。後の人間が気がつかないで、何枚もコピーしちゃいますから」

会議資料をコピーした後、入れ違いでコピー機の前に立った坂本に注意された。

「悪い、忘れた。でも、使う前に気がついてくれたんだからいいじゃん」

悪意のない普通の返事・・・だと思つた。

「気がついたから良かっただけでしょ！気がつかなければ三十枚もコピーしてたところだわ！」

いきなりの剣幕に、口が開いた。

「ごめん。なおしとして」

そんなに声を荒げるようなことしたかよ、と思いつながら、女の子相手に言い返す気はないので、とりあえず詫びてコピー室を出た。

なんだか腑に落ちない。他人の茶碗まで洗っちゃう坂本が、白い梅みたいな坂本が、あんな言い方はおかしい。取り返しをつかないミスをしたっていうんならともかく。

「坂本さん、最近変じゃないですか？」

野口さんに話しかけると、「まあね」と軽くあしらわれた。どう

見ても、おかしいのに。

給湯室で、紙コップを指先で小さく引きちぎっている坂本を見る。指の先が白くて、大変な力が入っていることがわかる。なんかちょっと鬼気迫る感じで、いつもなら見て見ぬフリをするところ。

基本的に他人のこと、どうでもいい人だもんね。

いや、気になることは気になってんだぞ。

「何か怒ってるの？」

言葉にすると、その後につきあわなくちゃならない気がして、声に出してなかったただけだ。声に出しちゃったけど。

「なんでもないんです、ちょっと」

「ちよつとにしては、ずいぶん細かくしたねえ」

お軽いのは俺の信条、どうでもいいような仕草で自分のコーヒーを入れる。

「腹に溜めこむと、身体に悪くない？王様の耳はロバの耳で、聞くか？」

坂本は俯いてまだ紙コップをちぎっていた。

「ごめんなさい。この頃、感情の抑制がきかないんです。怒ってる内容なんて、ないんです」

手は休まらず、ゴミ箱から違う紙コップを拾ってちぎり始める。

「落ち着いたら席に戻ります。ありがとうございます」

頭は冷静なのに感情だけが昂っている、そんな印象で、なんか痛々しい。

「いいんじゃない？普段の坂本さんは気ばかり遣ってるし。それくらいでバランスとれるって」

なるっただけ深刻にならないように、それだけ言って給湯室を出た。良かったのか悪かったのかは知らない。



坂本がひとり歩いていてのを見て、つい後ろから声をかけた。

「どうしたの？誰かと一緒に帰らないの？」

「お断りしたんです。そろそろ自分だけで大丈夫だと思って」

「ヤツは？」

「この前萩原さんが、俺の彼女なんて言ってくれたから、私もそう言おうと思って」

坂本はふふつと笑った。

「新しい彼がいれば、彼も迂闊には引き摺ったりできないでしょう？」

「じゃあ信憑性高めるために、お茶にでもつきあつて貰おうか」

「噂通りですね。私、話すのヘタですよ」

「なんの噂だか、想像はつくんだけどさ。社内の女の子を持ち帰ったことはないぞ。」

「大丈夫ダイジョーブ。俺が坂本さんの分まで喋るから」

チェーンのコーヒーショップに入り、オーダーを決めるためにメニューを眺めた。

「決まった？」

坂本は困った顔でメニューを眺めていた。

「萩原さんは何をオーダーするんですか？」

「俺？ストロング。何がいい？奢るよ」

しばらく迷った顔をした坂本は小さく、同じで、と呟いた。トレーを受け取って席まで運び、向い合せに座る。一口飲んでから、坂本は大量にミルクを入れた。

「もしかして、強いコーヒー苦手なんじゃないの？」

坂本は困った顔をして、しばらくしてからこくと頷いた。

「ごめんなさい」

「いや、謝られるようなことじゃないけど。優柔不断な方？」

あ、俯いちゃった。なんだかまずいことを言ったらしい。

「判断してから、口に出すのにタイムラグがあるんです。ごめんなさい」

あ、まずい。落ち込ませちゃった。楽しく会話するつもりだったのに。

「ゆっくり考えるのは悪いことじゃないでしょ？俺は決まったモノ頼んだだけだもん」

「ありがとうございます。気を遣わせちゃってますね、私」

「女の子に気を遣うのは、下心だもん。今日、一緒に帰る？」

坂本はふつと目をあげた。

「本当に日常的に言うんですね」  
それから、やっと笑った。

笑った。俺を見て、笑った。

やっと、俺に笑顔を向けた。自分の動悸をもてあますほど、嬉しくなった俺がいた。

本当に初デートの中学生みたいだ。坂本の興味を引きそうな話題を、次々に繰り出しては空回りしてる。坂本は口数は多くなくて、俺の話を生懸命聞いてくれるんだけど、楽しませているのかどうかわからない。

コーヒーショップに入って三十分程度だった。そろそろ、と坂本が言い、一緒に立ち上がった。

「萩原さん、丸の内線じゃないんですか？」

「銀座で乗り換えるよ」

駅まで一緒に歩いて、なんとなく別れがたい気になった。坂本の薄い肩はやっぱり頼りなくて、次に何かあったら壊れちゃうんじゃないかと心配になる。楽しく遊べる相手じゃないぞ、ものすごく厄

介なトラブルを抱えてる相手だぞと、自分に警告する。

津田さんの口ぶりだと、まだ全然解決なんてしてない、らしい。

そして、俺は不機嫌だった。フォレストハウスの女顔の担当に設計折込の不備を突かれて、急遽塗装が必要になったから。坂本が運悪く野口さんの席にいなければ、何でもなかった。

「萩原君、工事支払いの概算、出てる？」

「業者請求が来てないところが何件かあるんですよ。とりあえず、今急ぎで行くところがあつて」

「じゃあ、見積もりから額面だけ拾いたいんだけど」

「帰ってからやりますって。口頭で額面聞いているところもあるんで」

「メモにも残してないの？」

野口さんは正しい。俺は、一分一秒を争って出かける必要はなかった。だから、ただ不機嫌だっただけだ。

「急いでるんですって！経理だけの都合で動けませんよ！」

あつと思つたときには、坂本の顔は真っ白になっていた。

「すみません、ごめんなさい」

小刻みに震え始めた坂本を椅子に座らせ、野口さんは「もういいわ」と手で俺を追払った。俺か？今、坂本を怯えさせたのは、俺？

## どどこか違つ

気分が晴れないまま、トラブルの元凶を解決して会社に戻った。

夜にもう一度現場に確認に行かなくてはならず、事務処理を片付けるためだ。朝に野口さんから指示されたモノをまとめ、そのまま野口さんに渡す。

「まったく！こんな短時間で終わるんなら、経理困らせることなんて、なかったのに」

ブツブツ言われて、頭を下げた。

「坂本さんにも謝つといてよ！萩原君のせいで、午前中に仮計上できなかつたんだから！大体、デイリーの作業でしょ！」

矢継ぎ早に言われた上に、明らかに俺が悪い。野口さんが忙しくキーボードを打って、経理に「終わりました」と内線するのを見ていた。

「俺の仕事も、他の人のみたいに野口さんが管理してくれるといいのに」

「新人が何抜かすか。管理が全部自分でできるようになったら、請けたげるわ」

俺入社二年目なんですけど、まだ新人なんですか。新人なんだろうな、周り中ベテランばかりだもん。でも、いつまで？

「次の新入社員が入って来るまで、俺って新人扱い？」

「そうやって考えるあたりが、新人」

意味わかんねえ！わかるのは、俺のレベルが低いつて言われたことくらい。他の部署では野口さんより若い女の子が事務とってるし、ここにも若くて可愛い女の子・・・

「不満があるんなら、これから粗利計算まで自分ですることね。他の部署の営業は、全部自分で出してるよ」

頭、上がりません。っていうか、人の考え見透かす先輩、きらいです。

営業靴を持ってブースを出ようとしたら、坂本が歩いてくるのが見えた。

「遅れてごめん。今、概算野口さんに出してもらったから」

いいえ、と硬質で小さい声の返事があった。前に戻ったような声だった。やっちゃったか？あれだけのことで？

「申し訳ありませんでした。怒らないでください」

頭なんて下げるのはタダ、口先三寸は得意技。謝るのなんて全然平気。坂本が顔をあげるのが見えた。

「私のせいで、野口さんに叱られたんじゃないんですか？」

「なんで坂本さんのせいよ、俺が手抜きしたんだから俺のせいでしょうに」

日本語だ。俺、日本語以外は喋れません。何で意味のわからないような顔をする？しばらく無言で俺を見ていた坂本は、また俯いて小さな声で今度は「ありがとう」と言った。

ヤツアタリを詫びて礼を言われるってのもおかしい話で、なんだか腑に落ちない気分現場に向かう。とりあえずクレーム対策を終えて会社に戻ると、社内は半分以上暗かった。日報を書いて、課長の席にメールしてから帰り支度をする。経理のブースももう暗い。坂本も帰ったんだな。

あんなに不安定でビクビクしてるのは、あの男のせいなのか。あんな風になるまで、何をどうされたのか知りたいわけじゃない。ただ、俺は坂本が笑うのが嬉しかったんだ。怯えた顔なんて、もう見たくない。

だって、坂本は綺麗なんだから。綺麗な女の子に綺麗なままでい

て欲しいっていうのは、別におかしい感情じゃないだろ？

「あ、ありがとう。助かるなあ」

業者から送られてきたFAXを坂本から受け取りながら、津田さんが丁寧な礼を言う。坂本の顔がほんのりと綻ぶ。なんか悔しい。俺だって礼くらい言うし、コーヒーに誘った時は、ちゃんと笑ってたんだぞ。

「津田君には構えないよね、あの子」

野口さんが言う。

「そりゃもう、パパの包容力ってヤツに溢れてますから」

「沢城に聞いたぞお。暁君あきみの服が俺の服よりも高いつて言ったってえ？」

「言った！っていうか、瑞穂の奴、それを人に言うか！」

また、げらげら笑いあう野口さんと津田さんを見ながら、ちよつと考える。

あの男と俺は似ていなかった、と坂本は言った。じゃあ、俺にはどこことなく構えて見えるのは、何故だ。なんでもかんでもストレートな津田さんが怖くないのは、俺も同じだけど。確かに引き継いだ客先でも、津田さんは元気かと聞く人は多い。そんな人懐こい人でもないんだけど、身体が大きくて体育会系に見える津田さんは、意外に警戒心を起こさせない。

好みの問題だけ・・・か？

「萩原あ」

「隣の席で、わざわざ呼ばなくても聞こえます」

「だって呼ばないとこつち見ないじゃん」

「男の顔見たって仕方ないじゃないですか」

津田さんは用事がある時、必ず名指しで話しかけて、相手の方に身体ごと向く。

「顔見て話さないと、意思の疎通ができてるのかどうか不安なんだよ。暁君とだつて、顔見て喋るぞ？」

「いや、一歳児は言葉わかんないでしょ」

「最近俺のこと、パパじゃなくて『てんてー』って呼ぶんだよね。大人は全部保育園の先生。なのに瑞穂にはママって言うー」

「仕事の話でしょう！」

脱線しかけた話を、元に戻した。

「フォレストハウスの担当な、仕事が早い分気が短いだろ。前回の物件で、おまえが施工中に顔出さなかつたつて文句言つてた」

「工事するのは業者じゃないですか。トラブれば連絡来るし」

「丸投げするのと任せるのは違うぞ。最終的には人間対人間なんだから」

津田さんは普段、説教がましいことは言わなし、似合わない。

「今回の塗装も、現場に顔出してれば壁の色に気がついてただろう？合理的じゃなくても、どこかで関係あるんだよ」

否定できないので、とりあえず頷く。

「それでなくても不誠実に見えちゃうタイプなんだからさ、気をつけた方がいい」

不誠実に見えるつていうのは、正直心外。ミスの少なさには自信があるし、津田さんみたいに他の部署に無理をさせることもない。大体ペーパーの俺のお願い事なんて、全部後回しだ。頭の下げ損。「気にしてるつてポーズ作るだけで、人間つてのは安心するんだよ。話す時に顔見るだけで、ずいぶん違う。そこ、気にしてみるよ」

「それ、苦手」

「ま、試してみ？坂本さんに」

「坂本？」

返事をせずに机の上を片付けた津田さんは、鞆を持って立ち上がった。

「今日、暁君のお迎え当番なんだ。お先にー」  
言い捨てて撤退ですか、隊長！せめて意味合いをお聞かせください！

説教なんだかアドバイスなんだか、ただ単にからかわれたんだか。煙に巻かれたような気分で、津田さんの後ろ姿を見送った。  
顔を見て話せ、だって？



## ヨクデキマシタ

「経費精算お願いしまーす」

経理に伝票を提出した時、坂本が「預かります」と受け取った。

「あ、仮払いはありました？そしたら、それを確認してからですけど」

「今月は仮払いしてないと思うんだけど。ちょっと見てくれる？やりとりの間、津田さんが言ったことを思い出していた。」

顔を見て話せ。

坂本がモニタを確認し「マイナスなしですね」と顔を上げると、視線がモロにぶつかった。

「経費が出たら、持って行きますから」

相手の顔を見て話すつてことは、自分の表情もさらすつてことだ。ぶつかった視線の坂本の瞳に、俺の顔。これって、あんまりに無防備じゃないか？

「じゃ、よろしく」と経理のブースから出て、ドギマギする。

営業先から夕方帰社すると、伝票とりサイクル封筒を持って坂本がデスクまで来た。

「早かったね。これで今日はちょっとリッチ」

「自分のお金が戻っただけでしょう？」

ふわつと笑う坂本の顔を、正面から見た。

「サンキュー。今度何か奢る」

「期待しないで待ってます」

あ、なんか自然な会話だ。坂本が警戒してない。坂本が俺のデスクから離れた後、津田さんがぼそつと言った言葉は気に喰わなかったけど。

「ヨクデキマシタ」

「視線を合わせる」「イコール」「あんと意思疎通する気があるんだよ」なんだな。

そういえば、疚しい時は視線が斜め上を向く。（自分の脳の中を無意識に覗く仕草なんだそうだ）他人と話す時に何回か、意識的に視線を合わせたリ避けたりしてみた。相手の反応が驚くほど違う。流してしまうような話でも、相手の表情と言葉が同時にインプットされて、記憶に残りやすい。

知らなかった。気にしたこと、なかったから。

「目は口ほどにものを言うって言うだろ？あれ、赤ん坊相手だと本当なの。だから、意識したのは最近」

「おお。父としての成長」

津田さんはでっかい手で俺の頭を叩いてから、続けた。

「ワルサした時、ダメッ！て闇雲に怒ると、ぎゃーって泣くんだけどさ、屈んで同じ目線で叱ると赤ん坊なりに納得すんの。大人も同じだと思っよ」

納得できるような、できないような。確かに津田さんは一見から「話しやすそうな人」で、それは「なんでもかんでも顔に出る」せいかと思っただけだ。

「で、推測。坂本さんは、殴られないか殴られないかって、彼氏の顔色窺いながら動いてたと思う。だから『私に対して腹を立てていないか』ってのが気になるだろ。敵意のない表情見せれば、それで解決」

「あ……」

剥き出しの敵意ってのは、面と向かっては表しにくい。だから「顔を見て」なのか。

「……津田さんって、オトナだったんですね」

「俺、おまえにまで子供だと思われてたわけ？」

思っていました。作為の持てない津田さんは、子供っぽい。そうか。「子供みたい」っていう言葉は、子供には使わないね。俺って、心底何にもわかってないのかも知れない。

帰りに「メシ食ってく？」と何人かで話していた時、坂本が横を通り抜けて行った。

「坂本さんも一緒に行かない？女の子、ひとりだけになっちゃうから」

隣の部署の営業事務の女の子が、ひとりポツンと混ざっていた。

「ご一緒していいんですか？」

「いや、ご一緒してもらいたいから、誘ってんだけど」

嫌がってはいない。顔を見てるとわかるもんだな。

「待ってるから、上着持つといでよ。『桂林』で焼きそば食おう」

はい、とロッカールームに入った坂本は、一分もしないうちに戻ってきた。

女の子なら、靴履き替えたり化粧直したり、それなりに時間がかかるもんだろ。みんなそのつもりで、喫煙室で煙草に火をつけちゃったヤツまでいる。

「仕度、早いねえ」

「お待たせしたらいけないと思って」

軽く切らした息に、何か思い当たりそうになって、そのまま頭の隅に流した。

「急に声かけたんだから、坂本さんのペースでも誰も怒んないって「すみません」

坂本の侘びの言葉が本音だと思うのは、表情を見ているからだ。「謝る必要なんかないっての。さ、行こ行こ」

集団で連れ立って、会社近所の中華料理の店に向かった。

何を食べるか、なんてメニューを広げて、ついでに何本かビール

も頼む。

「坂本さんも選んで」

メニューを差し出された坂本が、表情を曇らせるのが見えた。選ぶのが苦手だったなと思い出して、坂本に聞こえるように他に声をかけた。

「大皿でいくつか頼んで、割り勘しようぜ。その方がいるんなもの食べられるし」

賛成した何人が料理と小皿を次々頼んで、ビールを注ぎ始める。  
「坂本さん、まだメニュー見てるの？何か食べたいもの、あった？」  
女の子が声をかける。

「えっと、この、蟹豆腐を、頼んでも、良い、かな」

一言ずつ区切りながら、不安そうな声の注文。

「あ、私もそれ好き！頼も頼も」

女の子の陽気な返事に安心したように、坂本はメニューを閉じた。なんだか大仕事を片付けてほっとしたような顔で。ここまで自己主張が弱いので、やっぱり変な感じだな。仕事の上での「できない」は、結構はつきりしてるんだけど。

ああ、そうか。経理ではあいまいな処理は考えられないもんな。自分で決めるのでなければ、良いのか。

一時間半かそこらだったと思う。

「紹興酒に変える人！」「はい！」

そんな声の中で、坂本は時計を見ていた。何か言いたそうだが、どう声にしているのかわからない感じ。俺も別に、どうしてもそこにいたいってわけでもなかったたので、上着を羽織った。

「俺、明日現場だから、先に帰るわ」

千円札を何枚出す。

「あ、じゃあ私も、お暇します」

坂本が立ち上がった。やっぱり帰りたかったのか。

「坂本さん、萩原に食われないように気をつけてねー」  
「どアホ！俺に食われる女は光栄じゃ！泣いて喜ぶわ！」  
「そりゃ、失望の涙だ」  
まだ残っている人間に手を振って、店を出る。坂本は店の前で待っていた。

「帰りたかったんだよね？言い出せなかったんでしょ？」  
意識して顔見て話せって言われても、こんなことは顔を見たら言えない。

「え？萩原さん、明日現場だからって。私のせいで途中で抜けたんですか？」

私のせい、っておかしいだろ。加害妄想チックというか。

「いや、現場なのは本当。坂本さんのためじゃないよ」

坂本は足を止めて、真剣な顔で俺を見た。

「ありがとう」

表情に吸い寄せられて、視線が外せなくなった。

「萩原さんのこと、怖がったり避けたりしてたのに、萩原さんには一番嫌われても仕方ないのに、何度も助けてもらった。こんな風に気も遣ってもらっちゃって、本当に感謝しなくちゃ」

止してくれ、居たたまれないから！

「だーかーらー。女の子に気を遣うのは下心。一緒に帰ろ？」

「それは、謹んでお断りしときます」

これは、迷いもなく即答だった。

## 藁くずくらい

坂本が仕事を休んだと聞いた時、なんだかへんな胸騒ぎがした。ここしばらく急な欠勤はしていなかった筈だし、別に具合が悪そうだったわけでもない。

「なんだか気持ち悪い。」

翌日坂本は出勤しては来たが、いつかみたいに履きつぶしたスニーカーを履いて、いつかみたいに表情が消えていた。朝の給湯室でパーコレーターを見つめている坂本を見て、ぞくつとする。

「おっはよー」と陽気に歩いてきた野口さんを捕まえて坂本の異変を告げると、昨日の段階で既に動いていたようだ。

「妹さんの迎えを断った途端、すぐだよ。ストーカーだね、あれでも、今回はヤツの負け」

「こっちに来いと野口さんに引つ張られてついて行く。」

野口さんが鞆から取り出したのは、ICレコーダ。

「それ、こないだ会議用に買ったヤツじゃないですか？」

「しばらく会議に使う予定なかったもーん。ひとりで帰ってみるって聞いたから、持たせといた。データ、私のPCにばっちり。診断書もしつかり」

俺、野口さんは敵にまわしたくありません。

「訴えんの？」

「とりあえず警察に被害届けは出した。多分告訴はしないけど、警察からの連絡で震えあがるでしょ、ザマミロ。これでヤツは解決だわ」

そりゃ良かったけど、坂本がまた壊れちゃってるじゃん。

「問題は、坂本さんのメンタル面だね。カウンセリングだけじゃなくて、全肯定してあげられる人がいれば良いんだけど。ま、会社じ

や無理か」

野口さんが何気ない顔で言う。微妙に操作されてる気が、しないでもない。

全肯定っていうのは、「あんたが正しい」って認めてやることだろうな。相談を持ち掛けられてでもいれば、まだ話は早い。ただ内籠もって表情まで消えちゃってる人間に、そんなことしてやる人はいないと思う。

何をしてやれって言っただ？

給湯室から出てきた坂本に、野口さんが声をかける。

「おはよ、坂本さん。コーヒー落としといてくれたの？お当番じゃないのに、ありがとう」

坂本がゆっくり顔を上げる。

「おはようございます」

無表情は顔に張り付いていて、足は少し引き摺っていたけど、返事が戻った。

「気にしてるんだよ」ってポーズだけでも、受け入れられる気になるっていうのは本当なのかも知れない。

助けて欲しいなら、藁にだって縋るじゃないか。俺だって藁くずの一本くらいは持つてる。たとえ相手が坂本じゃなかったって、顔を見て挨拶くらいはするし。

うん。声が好みだの、怯えてなければ綺麗なのって・・・別、問題。

「おはよう」「ありがとう」「お疲れ様」

坂本と普段交わす言葉は、せいぜいこんなもんだ。厄介なトラブルと不安定なイメージが先行しちゃった坂本は、社内でも敬遠されてる。

派遣社員だし、今回期間延長になっても次回はないだろうって感じ。中途解約にならないだけマシ。会社組織なら、挿げ替えの利く派遣社員に気を遣ってやる義理はないからな。

でも俺は、なんかそれが惜しいような気がしちゃってるんだ。逆を言えば、居心地は決して良くないだろう会社に出社してくる気丈さとか、細かい心配りとか、棄て鉢になっていない芯の強さがあるんじゃないかな、なんて思う。俺なら多分「めんどくせー。どうせ次は更新してもらえないんなら、テキストでいいや」って思う筈。

坂本の腰の怪我は意外にひどかったらしく、履き潰したスニーカーでの通勤は一週間以上続いたし、何日かぼんやりしてもいた。いろいろなことに対する反応が鈍くて、「聞こえてる？」なんて大きい声で言われて、竦んでいるのを見た。

「文句言いたい人から、ヤツアタリの対象になりやすくなってるんだよね。仕事はちゃんとやってるのに」

そう言いながら、野口さんも表立っては庇いだてしたりはしていない。

「派手な立ち回りなら、話を引き取れるんだけど。ちょっと上段に構えただけのヤツって、本人もエラそうにしてる自覚なくて、厄介」

「だから、なんで俺の顔見て言うんです？」

「主語のない話で、誰のことかわかってるクセに」

いや、わかってただけだね。止めてください、誘導すんの。

「気の毒だけど、あたしもこれ以上何にもできないもん。身内でもないし、精神科医でもないし」

まあ、そりゃそうだろうな。

「山口君にも怒られちゃった。あたしもちょっと引き摺られて落ち込んだから」



「野口さんでも落ち込むんですか？」  
でもってなんだ！と膨れる野口さんだって、怖い思いしたり気を遣ったりで限界だったのかも。山口さんなら「優先順位を考える」くらい言うだろう。

表立って守って欲しいなんて、坂本も思っではないと思う。だけど、普通に接することはできる。だって俺は坂本が笑う顔を知っていて、それが良いものだとも知ってる。もしもこの会社からいなくなっちゃうんなら、もう一度あの顔を見ておきたいじゃないか。

「あれ？髪切ったんだ」

一度シヨートにしてから、肩のあたりまで伸びていた坂本の髪型が軽やかに変わっていた。

「色も入れたの？いいね、似合う」

「お上手。ちよつと気分転換です。明るく見えるといいなと思って、ちよつと安定してる感じ。視線がぶれてない。ってことは、ほら、花がゆっくり綻ぶ。

「やだ、なんで笑うんですか？へん？」

「え？俺、笑ってた？」

「あつらー。萩原とうっかり口利くと、気がついた時は持ち帰られてるよ、坂本さん」

せつかくの会話の最中に、山口さんがずかずかと給湯室に踏み込んでくる。

「ごめん、うちの女の子休みだからさ、打ち合わせスペースにコーヒ―三つ頼める？紙コップでもいいや」

はい、と坂本が頷き、俺もカップにコーヒ―を入れて給湯室を出る。通路に出ると、山口さんはやりと笑った。

「お邪魔した？恨むなよ？」

はい、邪魔でしたけど・・・なんか遊ばれてる気がするんだよな。

津田さんに注意されてから、施工中の現場に何度か顔を出した。はじめ迷惑そうだった工事業者は、顔を出してるうちに話してくれるようになった。先日は、遅れそうな工事の無理を聞いてくれた。

実際に顔を合わせていないときは「工期がずれた理由」を延々と聞かされていたのに、「やってみる」と融通してくれるようになった。ちょっと驚いた。そして現場の片付けと掃除を手伝うと、休憩時間にペットボトルのお茶なんか出してくれて、「元請けさんに雑用してもらっちゃって」なんて礼まで言われてしまった。

手伝った時間なんて三十分かそこらなのに、この態度の違い。

「トラブれば連絡が来るんだから、工事業者に全部お任せ」だと思っ  
ていると、実際は後手回しになるんだ。担当が現場を大切に思っ  
ていなければ、任された業者だって会社なりの対応しかない。

「最終的には人間対人間」なのは本当だ。  
営業の合間に現場にマメに顔を出す津田さんを、要領が悪いと思  
っていた俺は大馬鹿だ。同行営業の頃、散々それを見ていた筈なの  
に。根拠のない小手先のプライドが、根元からポキリと折れた気が  
した。

坂本は、知ってる。

ちゃんと自分と向き合う気があるかどうか、無意識に測ってる。  
ないがしろにされてきた自分の感情を、見せる相手が欲しいのかも  
知れない。友達との連絡も禁じられていたなら、全部自分の中に取  
り込むしかなかったろう。多分、親や兄弟には相談できない事柄だ  
つたろうから。

## 曰く、興味津々

「コピー機に絡まった紙を外してた坂本が、小さく「もっつ」と呟く。紙片が破れて、機械に噛んでしまったらしい。

「迂闊に触ると火傷するよ。ちょっと見せてみ？」

営業鞆から軍手を出して、坂本と場所を代わって紙片を引っ張った。奥の方に小さな紙が入り込んで、取りにくい。

「これでリセットできると思う。どうぞ」

「ありがとうございます。今日、コンタクトしてなくて」

「眼鏡かければいいのに」

「いくつも割っちゃって・・・この位置だと、萩原さんの顔がやっと思えるくらい。もう割ることもないだろうから、眼鏡にしてもいいな」

言葉尻を捉えるようだけど、もう割ることもないって断言できるのは、自分で割ったんじゃないかって割られたからじゃないか？聞いちゃいけないんだろうけどさ。

「俺、メタルな赤いフレームで、レンズの小さい眼鏡かけてる女の子、好き」

「え？金縁のバタフライ形で、弦にラインストーンのチェーン垂らそうかと思ってるんですけど」

大真面目な顔で、おかしな返事が戻ってきた。しばらく考えてから、何を言われたのか気がついて、笑いがこみ上げてきた。

「教育ママ眼鏡？」

「似合いそうでしょう？」

言った本人が先に吹き出してる。冗談、言うんだな。ちゃんと冗談が言えるんだ。自分の冗談に、声出して笑えるんだ。

それがこんなに嬉しいなんて、自分が一番意外だ。

「もう定時過ぎてるでしょ、残業？」

「いえ、コピー済んだら帰ります」

コピー機から吐き出された紙を、とんとんと机の上で揃え直しながら、坂本は返事した。

「じゃ、晚饭つきあわない？俺、今晚遅くなりそうだから、先に腹に何か入れないと」

嘘だ。見積り二通作るだけ。

「私の顔見てご飯食べても・・・」

「女の子が向かいに座つてると、生きてて幸せな気になんの。応援だと思つて、つきあつて」

やや強引に承諾させて、席を片付ける坂本を待った。

残業を抜けて早目の夕食、なんて理由をつけたんだから、当然居酒屋じゃなくて喫茶店だつていうのはご愛嬌。同じもので、なんて言う坂本に、メニューを渡す。

「ゆっくり決めていいから。自分が好きなものが、わかんないんじゃないでしょ？」

先日中華料理の時に気がついたけど、ちゃんと「これ」っていうのは明確にあるんだよな。それを主張しないだけ。意を決したように顔を上げた坂本のオーダーを聞いて、店の人に伝える。

「ごめんなさい、時間がかかって」

「ん？のんびりテンポの女の子、好き。せつかな子も可愛いけど」

「つまり、全部？」

「いや、容姿と年齢の制限はアリ。坂本さんはどっちもセーフ」

ほら、笑え。坂本が派遣期間を終えたとき、辛い顔ばかりしてたなんて、思いたくない。坂本の声は澄んだアルトで、相槌を打つときは小首を傾げる。

「坂本さんって休みの日は何してるの？」

「前はね、サークルに入って、ロードバイクのツーリングなんかに参加してたんだけど」

「ロードバイク？自転車？」

あまりの意外さに口が開いた。

「もう、サークルも抜けちゃったし、バイクもメンテしてない。ぼーっとしてます」

「坂本さんって意外にアクティブな人？」

「身体を動かすのは、嫌いじゃなかったわ。思い出さなくちゃ」

もしかしたら今日の前にいる坂本って、全然違う人間なんじゃないか？俺が知っているのは「怯えたり不安定になっていたり」の坂本だけだ。自転車でツーリングするイメージなんて、全然ない。なんだかわかんないけど、今の会社の中で「本来の坂本」を知っている人間はいないわけだ。仕事上は知らなくても、不自由ない。不自由ないのに俺ってば、これが湧き上がってくるなんて・・・

曰く、興味津々。

先に夕飯を済ませてしまった手前、見積りを二通作ったからと帰ることができなくなっただけで、遅れ気味だった事務処理を片付けることにする。お先に、と部内の人間が帰って行き、開発営業部の島は、俺一人になっていた。ふうっと溜息を吐く。

次はどんな口実で話しかけようか。

派遣期間が終わるまでに、メアドくらい・・・ん？連絡したいのか？たとえば連絡して、外で会って、カラオケかなんか一緒に行つて。それで何かがある？

調子良く話を合わせてその気にさせて、ホテルに連れて行くのか？薄い肩を押さえて、組み敷く。そうしたいのか？良い気分にならせて、内容のない話だけで盛り上がって、それで気が合いそうなら何

度か会う。重くなったら、他の女の子に気を移す。坂本と、そうしたいのか。

襲い来る自己嫌悪の波を、頭の上でバタバタと払う。俺って、結構サイテー。

笑えよ、坂本。

「昨日はご馳走さまでした」

朝、すれ違いざまにびよこんと頭を下げた坂本の後ろ姿を目で追う。怪我は良くなったんだな。今日は表情も明るかった。ほっとしつつ、認めざるを得ないことをやっとな認めろ。「本来の坂本」がどんな女なんだか、見てみたい。

そして見てしまったら多分、俺の感情は引き返せない。

PCの前でぼーっとしていたら、寝てしまったらしい。

「物件情報がないや、ルート営業にでも行けバカ！」

課長から後頭部に張り手をもらった。

「遊んで遅くなったんだろ。路肩に車停めて寝るんじゃないぞ」  
「遊んでたんじゃありません。昨夜眠りそびれたんです。言い返そうとして、野口さんが向かいに座っていることに気がつく。恰好のネタになりそうなことは、口が裂けても言えない。」

## 無自覚が自覚に

女の子同士でケーキを食べに行く、なんて集団で帰って行く。その何分か後に、坂本がひとりでロッカールームから出てくるのを見た。

「あれ？坂本さんは一緒じゃなかったの？」

坂本の顔が曇って、失言だったことに気がつく。パニックを起こした頃に同情的だった面々は、長引く不安定さに飽きたのだ。

「俺もたまにはケーキ食べたい。男ひとりってのもなんだから、つきあってくれる？」

「同情しないでください。何でもありませんから」

紋切り口調の返事が戻った。

「じゃなくって、またコーヒー飲みに行こうよ。今度は甘いものあるところ」

坂本の口がへの字に結ばれた。

「そんな風に、かまわないで。みんなが私を敬遠したがつてることなんて、自分でよく知ってるんだから」

怒りに似ている口調に、つい言い返した。

「みんなじゃないだろ？野口さんも三枝さんも、他にも気にしてる人が」

「迷惑だっと思わないわけじゃないじゃない！」

強い口調の否定。また、どこかおかしい。

「いろんな人に迷惑かけて、私がバカだっただけなのに」

あ、こんなところで泣くなよ、頼むから。きよろきよろしてたら、ラッキーなことに津田さんが通りがかった。

「萩原、会社の女の子泣かせんなよ？」

人聞きの悪いことを言う。

「違いますって。坂本さん、落ち着いて。俺は迷惑じゃなかったから」

「あ、そういう話？じゃ、俺も言っとく。迷惑ってのは、気に入らない人にしかかけらんないの。好意のある相手なら、関わりたいもんでしょ？坂本さんに迷惑なんてかけられてない」

俯いた坂本に一気に言っつて、津田さんはさっさと自分の席に戻っていった。俺はまだ、その場を離れられない。

「津田さんも言っつてたでしょ？また、コーヒーツきあつてよ、ね」顔を上げてもくれないし、頷いてもくれなかったけど。

「残業がない日に誘うから」

そこまでは言っつておかなくちゃならなかった。誘っつてどうしたいんだか、自分にもわからないけど。

前フリしといた分、仕事帰りに坂本を誘うのは楽だった。ただし、営業推進室の三枝さん（色気皆無）ごとだけど。

「萩原さんがケーキ奢っつてくれるっつて聞いたから、便乗。ご馳走さまー」

それから坂本が見てない時にこっそり、「お邪魔さま」と片眉をあげて笑った。野口さんが乗り移っているかのようだ。給料前なんですけど。

ケーキ屋なんて知らないから、女の子ふたりの後ろを歩く。一駅分ならだらと歩かされて、クラシクな外観のケーキ屋に着いた。有名店だつて話で、ショーケースの前は結構な混み方してる。二階の客席に案内されてまわりを見ると、仕事帰りのOLばかり。

「あたしねー、チーズケーキと・・・」

「複数っ？三枝さん、酒だけじゃなくて甘いものもイける口？」

「基本は押さえといて、後は一口ずつ味見しようよ。イマドキ男子



はスイーツにも詳しい」

三枝さんが、真剣にメニユーに取り組む坂本に声をかける。

「ここね、どれ頼んでも失敗ないから大丈夫。どうせ自分のお財布じゃないしー」

「・・・三枝さん、何気に鬼畜。給料日まであと一週間切ってるって、わかつての所業？」

三枝さんは坂本と同じ派遣会社だったらしい。今、三枝さんは正社員になっちゃってるけど、事務所で何度か顔を合わせているそうだ。馴染みがある分、坂本は心持ちリラックスしてる。俺とふたりじゃ、また下を向いていたかも知れない。これは却ってラッキーだったな。財布には少し痛いけどさ。

喋るのは主に三枝さんと俺で、坂本は聞き役。だけど、会話にはちゃんと参加している。時折、小さく笑い声を立てる。笑った声が嬉しくて、もっとバカな話をする。

三枝さんは意外にツツコミ上手で、色気のないねーちゃんだっただけで興味がなかったことを、少し後悔した。結局ふたりがかりで坂本を笑わせ、実は俺はあんまり好きじゃないケーキを女の子ふたりが食べた。

「こんなに笑ったの久しぶり。ご馳走になって笑わせてもらうなんて」

店から出て地下鉄に向かう途中で深々と頭を下げられ、こっちが恐縮してしまった。

「他の女の子にはナイショね。大勢で来られると負けるから」

びしつと敬礼した三枝さんが「これから彼と待ち合わせ！」なんて抜けて行って、坂本とふたりで地下鉄に乗る。

「銀座線じゃありませんよね？」

「何回か訊かれたよね」

「丸の内、でしたっけ。ここから乗っちゃえば良いのに」

地下鉄の線がクロスしていて、確かにその駅からは丸の内線も銀座線も使うことができた。

「女の子と帰った方が楽しいじゃない」

答えながら、無自覚が自覚に変わったことに気がついた。女の子ならってわけでもない。坂本と電車に乗りたいたいんだ。

軽口でしか女の子を誘ったことがない。考えてみればまだ高校生の頃、はじめてつきあった女の子とすら、映画の話題で盛り上がったときに「まだ見てないんなら、俺と一緒にいこう」なんて誘ったのだ。相手が好きだと言ってくれたのを幸いに、自分がどうか考えずに寝た。寝ちゃえばそれなりに情も湧くし、そういう年頃だからそれなりに執着もしたさ。その後も、継続してつきあったっていうのは全部同じパターン。

・・・成長したのは仲良くなるテクニクだけか？

「萩原、最近合コンの話、聞かないなあ」

津田さんにいきなり話をふられる。

「行ってないっす。飽きちゃったっていうか、女の子もパツとしな  
いし」

「パツとしないのは、萩原の頭の中じゃない？不特定多数相手に飽きたんだろ？」

何か面白がってる津田さんの言葉は、無視してやることにする。

「不特定多数より、安定した特定の方が楽しいぞ」

津田さんの純愛騒動つてのがどんなもんだか知らないけど、まっすぐな津田さんはまっすぐに好きになって、まっすぐに相手のことを考えたんだらう。折れちゃうことなんて怖がりもしないで。

「いろいろ大変な相手みたいだけど、話してるうちに見えてくるんじゃない？」

「何がですか？」

「今、お前が頭に思い描いた相手」

言い捨てて、津田さんは席を立った。向かい側で野口さんが吹き出すのが見えた。俺の頭の中身、どこかにこぼれてるわけ？

「そこまで儼然とした顔しなくなつてえ」

野口さん、俺、そんな顔してるんですか。

「良いこと教えとくわ。坂本さんは最近毎朝、新橋駅から歩いて通勤」

「げ。通勤時間が三十分延びるじゃん」

「夜遅い時間のウォーキングは、まだ怖いからって言った。親元暮らしたから、朝忙しいこともないだろうしね」

うーん、朝三十分くらいなら、無理できるかも・・・なんてPCに向かつて考えて、ふと目をあげたら野口さんがチエシヤ猫笑いをして見せた。

## 言い訳に過ぎない

野口さんのチエシヤ猫笑いを満足させるのは、非常に心外だ。にもかかわらず、朝の八時に俺は新橋駅内幸町側出口に立つ。

いや、朝一でアポとってる会社が新橋にあってね、俺って真面目だから一時間前に駅に着いてるわけ・・・

前半は本当だ、後半は脚色だけだ。坂本がどれくらいのタイミン  
グで駅から出てくるのか知らないし、うまく捕まるかどうかもわからない。大体、会ってどうするっていうんだ。会社に行けばいるのに。

「どうしたんですか、こんなところで」

後ろから声をかけられて、飛び上がりそうになった。待ち伏せだ、これ。中学生みたいな待ち伏せ。今更ながら恥ずかしくなって、どう言い訳したものやら、言葉が吹っ飛んだ。

「あっ俺っ今から営業っ！坂本さんは何で新橋？」

すっげー間抜け。

「あの、驚かせてごめんなさい。私、毎朝新橋駅から歩いてるんです」

「へえ？なんで？」

「筋力アップのためと、あと」

「あと？」

坂本は少し言い淀んで、それは朝らしくない話題かも知れないけど、力強かった。

「自分を取り戻すため・・・なんちゃってね」

照れ笑いで締めただけ、多分今までで一番綺麗な表情だ。あろうことか、見惚れた。

「じゃ、行きます。萩原さんも頑張ってくださいね」

大きなストライドで歩き出した坂本の後ろ姿を見送る。細い肩に小さなリュック、仕事用のパンツスタイルだけど、新しい白いウオーキングシューズ。怯えて不安定で、だけどすごく綺麗だ。坂本は自分をどうにかしようと思ってる。

努力と根性、一生懸命なんて言葉は、本当にウザいだろうか。あんな風に自分を奮い立たせて戦おうとする人間を、ウザいと思えるほど偉いのか、俺は。自分が必死になったことなんかないクセに。

坂本が必要なものを俺も持つてるなら、俺も協力くらいできるだろう。存在をわざわざ肯定されなくちゃならないくらい、自分を否定し続けるなんて尋常じゃないことを強いられたんだ。ああ、これは言い訳に過ぎないと自分で知ってるさ。

俺は「本来の坂本」とやりに会いたい。

面倒なことは嫌いなんだよ。面倒なことなんてしなくたって、今まで充分満足してたんだ。坂本はものすごく面倒で厄介だ。そして、俺に気がない。

つまり、俺から近付こうとしない限り、近くはならない。今更「女の子にどう声をかけたら良いのか」なんて悩むとは、思わなかった。経理部の残業の日を狙ってみても、派遣の坂本は余程忙しくなければ残業にはならない。帰りに待ち合わせって感じでもない。いきなり休日に誘って断られたら、翌日気まずい気がするんだけど。

「ねえねえ、来週末ヒマ？」

野口さんにいきなり話しかけられた時、頭が留守だった俺は咄嗟に本当のことを答えた。

「予定はないですねえ」

答えてしまつてから、野口さんの趣味を思い出す。

「まさか、花がどうこうってイベント？」

「あたりーっ。アドヴェントクリスマスイベントにご招待ーっ」  
机に突っ伏す。

「カンベンしてください。花なんてわかんないし、女ばっかでしょ？」

「大丈夫、津田君も来るから。津田君は奥さんにくつついて必ず来る。それに、今回は製菓サークルと手芸サークルもコラボしてるから、独身の女の子、よりどりみどり。男が来ればみんな喜ぶ！来て！」

しらばっくれようと思ってたのに、津田さんにまで念押しされて待ち合わせしなくてはならなくなった。ま、いいか。津田さんの「可愛い奥さん」ってのも見たいし、イベント自体が面倒な場所じゃないから、ヒマ潰ししてやる。金がかかるわけでもないって言うたし、独身の女の子よりどりみどり・・・いやその。だってねえ。面倒なことへのめりこむより、明るく楽しい男女交際を望みたいじゃない。

駅で津田さんと待ち合わせて、イベント会場に向かった。身長差30センチの夫婦と、人見知りの子供。津田さんの奥さんは噂通り子供がいるようになって見えなくて、笑顔が可愛い。素直に感想を述べたら、「見た目だけね」と津田さんが返し、奥さんに叩かれていた。会社じゃわかんないけど、やっぱり生活を持っている人なんだな、と納得する。

会場に到着して、野口さんに挨拶。確かに女の子が多くて、華やか。

「沢城、体験講座受けてく？全部実費だけだよ」

「えー？全部やりたい。暁君が飽きちゃうしなあ。お花だけにしようかな」

「あ、じゃあ次の回、予約入れとく」

野口さんが出した受付用ノートを見るともなしに覗いて、知っている名前を発見した。

坂本葉月。

坂本が来てんの？

「何？萩原君も体験講座？」

「いや、俺は本当に結構ですから！」

「あー残念。フラワーデザイナーの男の人、案外と多いのよ」

野口さんが笑いながらノートを受付に戻したとき、坂本がなんだか毛糸の塊を持って登場した。

「あら、萩原さんも来てたんですか？」

「野口さんに強制されたの！枯れ木も山の賑わいだって」

坂本の後ろで、野口さんがにやりと笑う。やられたっ！

津田さんとプレイスペースに行き、赤ん坊の集団を眺める。何のために来たっていうんだ、まったく。

「津田さんの奥さんって、ウチの会社にいたんですよね？結婚したから辞めたの？」

「いや。辞めたのときあいはじめたのが、同時くらいかな。仕事ができる可愛気なくて」

「ふーん。純愛騒動って聞いたのに」

津田さんは難しい顔になって、黙った。言っではいけないことだったのか、ただ照れただけなのか、判断に迷うところだ。

「それ、瑞穂には口に出して言うなよ」

真面目な顔になった津田さんに念を押されて、思わず頷く。ちょっと怖い。津田さんが持つてるPTSDの知識って、もしかしたら奥さんと関係があるのかも知れない。聞いても津田さんは、けして答えないだろうことは、顔を見ればわかる。

「さて、そろそろ戻ろうか。展示見ないと失礼だろ？ 暁君、おいで」  
まだ遊びたそうにしている子供を腕に抱えて、津田さんはイベント会場に向かう。花なんて本当に興味はないんだけど、会場に行けば坂本がいる。楽しむためだけに動く坂本は、どんな顔をしているんだろう。

少なくとも、ここには坂本に冷たい態度をとる人間はいない。もちろん、支配しようとする人間もない。少しは、伸びやかでいるのだろうか。

何人かでテーブルを囲んで、花の首を切ったりハリガネを巻いたりしている。野口さんが先生らしく、ぐるぐるまわってはアドバイスしてるみたい。

「マーマー」

「ちょっと待ってようね。ママ、お花きれいきれいしてるからね。

ほら、暁君もお花見ようねえ」

意外と（！）パパぶりが板についている津田さんが、子供に花だの手芸品だのを見せてまわる。

坂本がド真剣な顔で、何やらしているのが見えた。小さなナイフの使い方が危なっかしい。次々と出来上がった人が野口さんに手直してもらっている中で、明らかに作品になっていない。花首を持つて、あっちに向けたりこっちに向けたりしている。

「坂本さん、手の温度で花が疲れちゃう。捌いたら、すぐオアシスに挿してあげて」

野口さんの言葉に困ったように頷く坂本は、なんだか可愛らしかった。



## 社交辞令じゃない

「ダメ、私、センスないです・・・」

ギブアップした坂本の目の前の小さな籠には、花が半分程度しか入ってない。

「んー、次の回になっちゃうしな。じゃ、私が仕上げちゃうよ?」

野口さんが無造作にナイフで花を捌くのを、坂本は申し訳なさそうに見ていた。

「坂本さん、こういうのって考えちゃダメ。自分が挿したいように挿すの。」

ああ、それは今の坂本には難題かも知れないな、なんてちらっと思った。

「あたし、これから休憩でお茶タイム。一緒に行こ?」

野口さんが有無を言わせない勢いで、俺他三人をイベントホールのテールラウンジに引っ張って行く。津田さんの奥さんと坂本は、体験講座とやらの作品つき。席に座ると、坂本が持っていた毛糸の塊を引っ張り出した。

「私、こつちも時間で終わらなかつたんですー。本当に不器用で。」

編み方、わかんなくなっちゃった・・・」

「指編み?手、広げて糸かけてみて?」

なんて津田さんの奥さんが、坂本に熱心に教えているうちに、飽きた子供がぐずぐずと泣きはじめた。

休憩時間が終わるといふ野口さんと、子供がぐずりはじめた津田夫妻がテールルームを出て行く。

「じゃ、俺ら帰るわ。坂本さん、また明日」

取り残されたのは、毛糸と格闘している坂本と、俺。

「萩原さんも、つきあってくれなくて良いですよ?私、これ仕上げ

てから」

「いや、ヒマだからいいけど。何ができるの、それ？」

「羽みたいふわふわなマフラーに・・・なりませんね、これ」

自分の手元を見た坂本が肩を落とし、諦めますと呟いた。仕草に、笑いがこみ上げる。

「坂本さん、字は綺麗なのに桁外れに不器用？」

「いえ、そんな筈は・・・はじめてだからです」

「体験講座って、はじめての人が受けるんじゃないの？」

からかいたくなつたのは、目の前の坂本の顔が、会社にいる時よりもずいぶん幼かったからだ。

「じゃあ、萩原さんが編んでみて」

拗ねた顔で、毛糸を俺の目の前に突き出したのがおかしくて、笑ってしまった。

「俺、編み物なんて一生できなくても困らないし」

「私も困りません」

意外に意地っ張りなのか？俺の笑いに引き込まれたみたいに笑顔になった坂本が嬉しくて、俺はますます笑う。多分、外側から見たら阿呆だ。

少なくとも自分が楽しく遊べる相手じゃない女を、楽しくさせようなんて思ったのは、はじめてだ。ああっ！畜生！俺が今まで阿呆だと思つてたヤツらの仲間入りだ。

イベント会場を出て駅まで歩く途中、坂本は陽気だった。クリスマス準備に入った街はどことなく賑やかで、普段よりも少しカジユアルな坂本は、確かにアクティブな性格なのかも知れないと思う程度には、ハキハキと喋る。深い秋のビル風は強くて、街路樹から落ちた枯葉の欠片が坂本の髪に絡みつく。とってやろうと頭に手を伸ばした時、坂本がびくっと身体を固めて肩を竦めた。とっさに何の

仕草か判断に迷い、顔を見てしまった。

「叩かれると思った？」

顔を取り繕おうとして失敗した坂本が、俯く。

「自分より力のない人を、叩こうなんて思わないよ。何もしてない人を、叩いたりもしない」

「私の喋り方が気に入らなかったのかと」

緊張した声に、溜息をつきそうになる。喋り方が気に入くないだけで手を振り上げたら、世界中犯罪者だらけだ。

「普通はね、そんなことで怒ったりしません。それに坂本さんの声、すっげー好み」

「本当に、調子いい」

調子いいのは否定しないけど、本音だぞ。

駅に到着しても、まだ三時にもならない。

「ねえ、映画でも見ない？」

「私と、ですか？」

心底驚いた顔をされて、こっちの言葉が出なくなった。

「萩原さんなら、これから誘っても、出てくる女の子がいるんじゃないの？」

えーっと。いや、坂本を誘ったんだけど。

「ありがとう。今、会社の中で私と普通に話してくれるのは、少しの人なのにね。萩原さんも、気を遣ってくれなくて良いですよ。私は派遣だから、三月までの契約しかありませんもん。つまらないでしょ、私？」

こんなに連続した言葉を坂本から聞いたのは、はじめてだ。しかも、間違ってる。

返す言葉を選んでいっているうちに、坂本がどんどん階段を降りてしまつたので、一緒に降りてしまった。

「萩原さん、ホームが違いますね？」

とぼけているのか、それとも本気で社交辞令に過ぎないと思っ  
ているのか。

「社交辞令じゃなかったんだけど」

「何ですか？」

「社交辞令じゃなかったって言ったの」

そんなに驚いた顔すんな！とんでもないこと言った気になるから！

「それって」

坂本が言いかけたところで、次の列車を知らせるアナウンスがあ  
る。

「映画じゃなくてもいい。坂本さんが行きたい場所」

黙り込んだ坂本の前で、電車のドアが開いた。

坂本の肩を押して電車に乗ってしまったのは、ただの勢いだ。何  
の考えもない。呆氣にとられた顔の坂本に、何を言えればいいやら、  
わからない。

「意外と衝動的？」

笑ってくれたのが、救いだ。

「本当は声をかけてもらうの、嬉しいんです。お喋りできる相手  
がないから、野口さんのサークルに入れてもらおうかなと思ったん  
ですけど」

「悪いけど、向いてないんじゃない？ナイフで指切り落としそうだ  
ったじゃない」

「私も実は、そう思った」

「このまま、まっすぐ帰っちゃおう？」

そう聞くと、坂本は考える顔になった。

「本当に、私を誘おうと思ってくれてるの？」

「坂本さんさえ嫌じゃなきゃね。お茶は飲んだばかりだから、そ  
れ以外がいいなあ」

「私、つままないですよ？」

「つままないかどうかは、俺が決める。俺がつままないかどうかは、坂本さんが決めて」

ちよつと勝手な言い分だね、坂本が他人の感情ばかり気にしてるの知ってる。だけどそうしないといつまでもこのまま、俺は坂本を知りたいような知りたくないようになって、中途半端な気分で落ち着かない。

「ワカリマシタ。行き先はお任せします」

「・・・ラブホ？」

「それはパスで」

寒いから外をウロウロつてわけにも行かず、結局適当なファッションビルの中の喫茶店に入った。

「見たいお店、あればつきあうよ？」

「特に欲しいものはないんです」

「眼鏡とか。金縁教育ママ眼鏡」

思い出して、言ってみた。

「ああ、そうですね。寝る前に本読みたい時とか、あると便利なんですよね」

じゃ、見るだけ見ようなんて、カジュアルな量販店に行くことにする。俺は目が悪くなったことはないのに、眼鏡屋がどんなもんがかよくわからない。

「赤いメタルなフレーム、とか言っていましたっけ」

「その通り。ちよつとかけてみて」

眼鏡に萌えるなんて趣味はないんだけど、明るい色のフレームは、坂本の顔に薄く残った憂鬱を緩和させるように見えた。

「あ、似合う。じゃ、次はこれ」

女の子の買物なんて、いやいや付き合ったことしかなくて、こんな風になんかを見立てるなんてはじめてだ。浮かれてるんだな、俺。

坂本がレンズの度数の検査している間も、ずっと隣に立っていた。

「彼氏さんも、どうぞその椅子を使ってください」

「あ、いや、彼氏じゃないんですけど」

なんだか本当に阿呆な顔で、注文書を記入する坂本を見ていた。

閑話休題 山口家・野口家結婚披露宴の後の津田家 (前書き)

どこに載せていいのか、わからないのでこちらにアップ。

シリーズ内の話なので、カンベンしてくださいませ。

主役の萩原が影も形も無いじゃん、なんてツッコミはナシで。

閑話休題 山口家・野口家結婚披露宴の後の津田家

「暁君、ただいまー」

「ぱぱ、たーいまー」

玄関まで迎えに出た子供を抱き上げ、慧太は居間に入って行った。

「おかえりー。どうだった？野口さん、綺麗だったでしょう？」

キッチンのカウンターから顔を覗かせた瑞穂が、話しかける。

「そりゃ、一生で一番綺麗な日じゃない？式場の花、昨日野口さんが全部活けたらしいよ」

「あー、言ってた言ってた。ブーケもブーツニアも自分でって。いよねえ、そういう趣味。お茶淹れるから、着替えといでよ」

ネクタイを外しながら、慧太は引き出物の袋をカウンターに置く。

「カトラリーみたい。あと、お菓子」

スウェットに着替えて居間に戻ると、瑞穂がバームクーヘンの箱を開けているところだった。

「暁君にも、少しあげるからねえ。慧太、カウンターの上にコーヒー。私のもね」

「はいはい、とサーバーからマグにコーヒーを注ぐ。」

「山口さん、モデルみたいだったよ。白いタキシードで」

「かつこいいもんね。写真、撮ってきた？見せて」

渡したデジカメの液晶を確認しながら、瑞穂は綺麗、かつこいい、を繰り返した。

「あの二人の子供なら、相当期待できるだろうなあ。暁君、負けちゃダメだよ」

薄く切り分けたバームクーヘンを子供に差し出して、瑞穂が笑う。

「あら、暁君の方が可愛いに決まってるじゃない」

「親バカ」

「親バカじゃなきゃ、子育てなんてやってられません」



「山口さんと野口さんってのは、想像もしなかったなあ」  
慧太が今更のように言う。

「似たもの同士ってところじゃない？あの組み合わせじゃなかったら、とつくにバレてたね」

「コーヒーをすすりながら、瑞穂が相槌をうった。

「相手なんかすぐに見つかりそうな人たちなのに、結婚遅いなあとか思ってたんだけど」

「え？私、山口さんは結婚できないと思ってたよ？」

「なんで？」

慧太は瑞穂の言葉に驚いて、問い返した。

「だって、あの人、本音見せないじゃない。賢いのかも知れないけど、私は慧太みたいに、わかりやすい方がいい」

「頭良くて、いいじゃん」

「それとは別問題」

子供の顔についたバームクーヘンをとりながら、慧太はふと思い出す。

あれを聞いたのは、瑞穂がまだ佐藤と付き合っていた頃だ。  
聞いたら、惜しいことしたとかって言うかな。

「山口さん、入社当時、瑞穂に気があったみたいだよ」

「知ってる」

けろりと返事が戻って、驚いたのは慧太だった。

「気がついてたの？それとも、山口さんに言われた？」

「言われなくなっちゃって気がつくわよ、女だもん。男の人って気がつかないフリしてると、勝手に純情だとか思ってくれちゃうし」

高校生みたいな外見で、初心そうで・・・そう言っていたような気がする。

山口さんともあろう人が、やっぱり騙されてたなんて。

「気がついてて、なんで・・・」

「言ったでしょ、好みじゃないの。あんな風に自分を売り込める人、好きじゃない」

慧太から見たらパーフェクトな山口は、瑞穂にはそう見える。

「でも瑞穂、普通に喋ってたよな」

耐え切れなくなったように、瑞穂は笑い出した。

「気がつかないフリしたんだから、意識しちゃダメじゃない。それくらいできるわよ、女だもん」

女だもんって、女ってみんな、そんなことができるわけ？

「・・・女って、怖っ」

「慧太がお腹に溜めて置けないだけじゃない。良かった、信頼できるダンナサマで」

笑いの止まらない瑞穂を横目で見ながら、慧太は腹の中で呟いた。

・・・俺って、修行足りねえ！

とりあえず、f i n .

閑話休題 山口家・野口家結婚披露宴の後の津田家 (後書き)

ストーリーに関係なくて、ごめんなさい！

楽しんでる？

「今日は、ありがとうございます。お茶もご馳走様」

改札口で頭を下げた坂本に手を振って、地下鉄の入り口まで歩く。いつも、あんな風だったらいいな。あんな風でいてくれたら、いろいろ聞きたいことがある。

寝る前に読む本は、どんな本？ロードバイクって、普通の自転車よりも乗りやすい？他には、何が好き？今日俺が選んだ眼鏡は、本当に気に入った？映画でも一緒に行こうか。カラオケなんかどうかな。・・・俺みたいなタイプは、話しにくい？

「あれ、坂本さんって目が悪かったっけ」

「はい、いつもはコンタクトなんですけど、ちょっと目の調子が悪くて」

津田さんと坂本の会話を聞く。その眼鏡は俺が選んだんだよ、なんて思いながら、キーボードを打つ。似合うだろ。

「津田さんの奥さんは可愛いから、競争率が高かったんじゃないですか？」

「ああ、あれは本当に見た目だけなの。キツイわ、可愛くないわ。俺、発注ミスしてファイルで叩かれてた」

「社内結婚だったんですか？」

「正確には、ちょっと違うけどね。ま、ここで終わりにしといて」  
まだ話したそうな坂本が、しょぼんとする。休みの日に会ったから、共通の話題ができたみたいで嬉しかったんだろうなあ。学校の先生と話したくて、順番待ちしてる小学生みたい。

俺じゃダメかな。

「坂本さん、その眼鏡似合うじゃない。どこで買ったの？」

そう声をかけてみた。あはは、と坂本が笑い、それに驚いて何人かがこちらを見た。声をあげて笑う坂本を、知っている人は少ない。「センスの良い人が、選んでくれたんです」

「そういう人とは、仲良くしたいほうがいいよ」

「そうですね、そうすればきっと楽しいでしょうね」

明るい口調で返事が戻ってくる。こんな風に、話したいんだよ。

「その人は、仲良くしたいらしいよ」

「光栄ですね」

だから、冗談じゃないんだって。今までの軽口を流し去ってしまいたい。

「飲みに行かない？」

「少しだけなら。遅くなると、家族が心配するので」

ああ、そりゃ心配するだろうな。警察に届けたんだったら、家族はある程度巻き込んだってことだ。

「遅くならないようにするから」

そんな風に誘って、一緒に会社を出ようとしたら、不思議そうな顔をされた。

「他の皆さんは、もう行かれたんですか？」

「他？いないけど」

「え？ふたりだけ？」

確かに人数言わなかったけどさ、あの誘い方は多人数じゃないだろ。

会社から少し離れた居酒屋にしたのは、誰かに会いたくないから会社で異端視されちゃってる坂本は常に申し訳なさそうで、そこからも開放したい。なるべくうるさくなくて、坂本が萎縮しないで話せる場所を選んだつもりだ。明るい話で引っ張って、笑わせる。

ねえ、本当に楽しんでる？

正直言うと、まったく自信はない。女の子と明るく軽く喋って、

ついでに楽しく遊んでを繰り返していたのに。

二時間もしないうち、坂本が帰ると言い出す。

「まだ、八時前なのに」

高校生だって、そんなに早くは帰らないだろう。やっぱりつまらなかつたのか、とがっかりした。

「母がね、私よりも神経質になってて。警察が事情聴取に来るまで、薄々気がついてても、知らなかつたから」

それもそうか。そうだな、ストーカー犯罪の新聞記事は、結構多い。

「じゃあ、友達ともあんまり会えないでしょ」

「どっちにしろ、会ってないの。ずうっと疎遠になっちゃってたから」

連絡を禁じられてたんだっけ。

「だから、萩原さんが声かけてくれて、本当に嬉しいんです。野口さんや三枝さんにも優しくしてもらって、申し訳なくて」

「いいんじゃない？次に何かあつた時に返せば」

辛気臭い話はしたくない。俺は坂本の笑った顔が見たい。

「萩原さんにもお礼とお詫びを・・・」

「じゃあさ、休みの日に遊んでよ。完全プライベートで」

「私と？本当に（と、力を籠めた）私と遊ぼうって」

「案外と疑り深いね。センスの良い人が仲良くしようって言うってんの」

坂本は俺の顔をしばらく見てから、ありがとう、と言った。

「誰かとちゃんと会話できるだけで、嬉しい。同情でも、嬉しい。

ありがとう」

同情じゃないんだけどね。

「・・・下心。本日これからでも」

「いえ、帰ります。パターン見えますね」

はつきり話すようになったな。こっちの方がいい。

「おまえね、朝礼の後の会議室での相談事が・・・」

「いや、だって津田さんは保育園に迎えに行く都合もあるから、帰りはわかんないし」

すっげー呆れた津田さんの顔に、思わず下を向く。

「女の子を誘う場所なんて、萩原の方が知ってんじゃないやねえ？俺はそういう意味では無芸よ」

そりゃ女の子が遊ぼうって待ち構えてる時なら、行き先だってあるさ。だけど今回は、心情的にはまるまる俺の持ち出しで、坂本が怖がったり寂しかったりしなきゃいいと思ってる。そうやって考えたら、普段の遊び場所は不似合いな気がした。

「あのさあ、マジに女の子誘ったこと、ないんじゃないか？」

ないかも。ない。津田さんはくくつと笑って、それは結構屈辱的だけれども、悪い気はしなかった。

「何でも適当にできる要領のいいヤツって、俺は羨ましかったんだけど。そんなにいいモンでもないらしいね、萩原見てたらそう思った」

ああ、努力型の津田さんには、返す言葉もございません。

「純情に免じて・・・って萩原には言いたくねえ言葉だな。ま、知ってることだけな」

どこにフラバのスイッチがあるのか見当がつかないうちに、人混みと刺激の強いところは危険。映画とか芝居とか、一見関係なさそうでも入り込んでしまうと激しく反応することがある。かといってそればかり気にすると本人自体が疲れきってしまうので、多少辛い顔をしてパニックさえ起こさなければ、大丈夫。嫌だということには、無理強い厳禁。私が悪いなんて言葉は言ったそばから否定、反論がある時はまず肯定してから、自分の考えを述べる。

結構面倒・・・

「難しくないよ、相手の顔見ればわかるから」

「で、どこに誘えばいいんでしょう？」

「知らない。俺はそんな経験ないもん。知識として知ってるだけ  
あれ？経験者かと思っただけだな。」

「最初、植物園に連れてったわ。俺は女の子がどんなところ好きか、  
知らないしな」

場所の選択が津田さんらしいや。カラオケや映画と違って、妙に  
健康的だ。

「ヘトヘトになってたから、繁華街なんか連れまわしたくなかった  
し」

そこまで言いかけて、津田さんは口をつぐんだ。

「ま、健闘を祈る。言いふらしたりはしないから、当たって砕け  
ろ」

唐突に、津田さんの顔そのものが報告書だったことを思い出す。  
自分で提供するネタを作った気が、すごくする。



## スイッチ

注意事項を思い出し、しかし冬に植物園つてのもどうかかなーなんて考え出すとキリがない。ああ、身体を動かすのは好きだって言うてたな。しかし二人でボウリングつてのも間抜けだし。

「江戸東京博物館、結構楽しいよ。美術館なんかも捨てがたいわねえ」

ふーん、江戸博ねえ。行ったことない・・・ん？

「なんですか、いきなり！」

「あら？悩める後輩にアドバイス。なかなか純情君だったわねー」  
こっそり外出しようとする津田さんに、石を投げたくなった。面白がった顔のまま席について、野口さんのツツコミに正直に答えたに違いない。なんでこう、面白がりばかり揃ってんだよ、この部署は！

「ご期待に応えてやろうじゃないの。誘って玉砕したら責任を追究してやるから、酒の一杯も奢れよ、先輩方。」

会社でひとりだけにこっそりと声をかけるのは、意外なほど難しい。給湯室に入っていく坂本の後ろから・・・なんて、まるでストーカーだ。

「あ、コーヒーですか？」

サーバーを持ち上げた坂本が、微笑んでみせる。ありがとう、と紙コップを受け取る。えい！くそ！

「まだ何か？あ、ミルク？」

「じゃなくって。坂本さん、今週の土曜って空いてる？」

「おーっと、お邪魔。失礼」

無粋に割り込んでくる声を、思わず睨みつけた。わざとじゃないでしょうね、山口さん。

「睨むなよ、萩原。坂本さん、俺にもコーヒーくれる？・・・あ、サンキユ。はいはい、失礼。萩原が怖いからね」

絶対わざとの山口さんが、給湯室から出て行く。ちくしょうつ。気がそがれて、続けられなくなってしまった。かと言って給湯室から動く気にもならず、俺は立ったまんまだ。

「えっと、出入り口に立たれると、私が出られないんですけど」

上目遣いで俺の様子を見ながら、坂本が動こうとする。

「空いてます」

「え？」

「空いてます」

もう一度聞き返そうとしてから、脳味噌に届いた。

「どこかに誘ってくれようと、してるんですよね。私でも良いのなら、空いてます」

赤くなるな、俺！

何に興味があるか知らないから、時間だけを待ち合わせた。社内メールで携帯電話の番号とアドレスを送り、折り返して自分の携帯に「登録しました」と坂本からメールが入る。今日は木曜日、明日中に段取りを組まなくちゃ。

帰宅してから張り切ってPCを立ち上げ、デート情報を検索した。夜の情報は、要らないや。いくつかピックアップして、会ってからお茶を飲みながら決めよう。すっかり気がついてしまったのだが、坂本は「自己主張が苦手」なんじゃなくて「自己主張することが怖い」なんだ。

だから、ゆっくり話をしよう。今まで遊んできた女の子たちの話を、ちゃんと聞いたことなんてなかったけど、それは高い高い棚の上だ。

今の時期だと、本当は夜にイルミネーションなんか見られると、

盛り上がるんだけどなあ。まだ家族が心配してるって言うし、でも夕方くらいから少しなら、いいかなあ。

東京駅で待ち合わせて、江戸博なんて言ったら下町の話になり、何故か浅草に行くことになった。

「俺、下町ってあんまり行ったことないんだけど」

「気が向きませんか？」

心配そうに覗き込む坂本に、笑ってみせる。

「坂本さんの知っていること、教えてくれればいいや」

仕事用のパンツスタイルと休みの日のジーンズは、あまりイメー  
ジが変わらない。

おのぼりさんコースで浅草寺参りして、賑やかな通りをウロウロする。知らない街をウロウロするのはそれなりに面白くて、明るい顔つきの坂本も嬉しくて、つい「日本のお土産」なんかを見たりする。坂本は「どこに行きたい」なんて言うてくれないし、俺は場所がまったくわからないから、どこを歩いているのやら。

立派な石碑が・・・と見ると「こち亀」で、指をさして笑う。鳩を蹴散らして、颯唼をかう。ガキみたいな遊び方をして、酒もカラオケも何にもナシで、もちろんラブホなんてかすりもしない。

そして、スイッチを一つ見つけた。

人力車を見掛けて、粹だね、なんて言った時のこと。

「人力車夫って正式には、短い股引だったと思う」

そんな坂本の言葉に、軽く返事を戻した。

「いいんじゃない？そんなこと、誰も知らないし」

普通だろ？だから、そんなことに反応するなんて思わなかった。

「誰もじゃないわ。私は知ってるもの。覚えなければ、ずっと知らないままよ」

強い言葉に反射的に反発しそうになって、顔を見下ろす。俯いてるから表情はわからないけど、シヨルダーバッグの肩紐を握りしめ

るのが見えた。

ムキになるようなことかよ、こんなこと。今まで楽しく・・・と、坂本の手が力の入れすぎで白くなっていることに気がつく。その手に触れようとした瞬間、坂本の身体はびくつと跳ねた。

「怖く、ないよ。知らないことを指摘されても、怒らないよ」  
スイッチだ。怖くないことを確認するために口に出して、自分の言葉に過剰反応するんだ。同じようなことが、仕事にもあったな。「他の人に知らないって言われるの、怖い？」

強張った薄い肩に、腕を回した。聞こえてるのかどうか、全然わからないけど。

「知らないことを教えてもらっても、怒ったりしないよ。怖がることなんかしてないよ」

声が届いていなくても、ここで怯えてしまっている坂本を、置いて帰るわけにはいかない。コート越しにすら細い肩は、しばらくの間、動きもなかった。

「ごめんなさい。帰ります」

落ち着かせようと入ったファーストフード店で、差し出したコーラに手もつけずに、坂本は下を向いた。

「抑えられてると思うたのに、こんな迷惑」

「大したこと、ないでしょ」

「でも、不愉快だったでしょう？」

事実、大したことじゃない。怯えた坂本は、何回目かの俺の声に、顔をあげたんだから。

「泣き喚いたわけでもないし、俺に殴りかかったんでもない。無茶な言いがかりをつけてもない。迷惑だっと言えば、酔っ払って吐くヤツの方が、よっぽど迷惑」

「でも」

「ま、いいから。落ち着いてちよーだい」

軽く聞こえるかな、軽く聞こえたほうが続けやすいんだけど。

「ここで帰られちゃうと、女の子に途中で帰られちゃうような、つまらない男だつて言われてるみたいで、超迷惑」

どうせ軽いヤツに見えるんだから、深く考えないで俺で遊んでくれよ。

「坂本さんの耳って小さいから、声を吹き込むのには都合がいいし。ただし、次はベッドの中でね」

「それは考えさせて」

「考えた結果、パスしても怒らないから」

坂本の顔にゆっくりと赤みが戻ってくる。ほら、もう大丈夫。

「まだ、帰らないで。ちゃんと夜までに帰すから、もう少し遊ぼう？」

こくと頷く坂本に、机の下でガッツポーズ。

「行こうか」

立ち上がると、カウンターの隣から坂本が俺を見上げた。ゆっくりと、やわらかく咲く白い花。

「ありがとう。誘ってくれて、宥めてくれて。野口さんから頼まれたけどとしても、嬉しい」

はい？また何か誤解が。

「・・・野口さんから頼まれてなんか、いないんだけど。俺が自主的に誘ってんの」

「え！なんで！」

男に誘われたことがないんだろうか？微笑が驚きの表情に変わってる。

「坂本さんのことを知りたいから」

まさかファーストフード店で、高校生の告白まがいを口にするとは思わなかった。

「私なんか知ったって、つまんないばかりですよ」

なんでこう、卑屈な言葉がポンポン出るのかな。

「そんなの、話してみなくちゃわかんないもん。面倒じゃなきゃ、もうちよっと付き合ってよ」

「私は楽しいけど、なんか申し訳なくて」

「楽しいと思うんなら、一緒に遊ぼう。女の子、大好き」

軽く軽く、坂本が考え込まないように、バカになれ。まだ「本来の坂本」と会ってないんだから。

## 庇ってやりたい

>今日は、とても楽しかったです。ありがとうございました。

坂本

>楽しかったです。また遊びに行こうね。萩原

なんだか他人行儀なメールのやりとりだね、仕方ないけど。坂本は最後までなんとなく寂しそうで、残念だけど俺にはどうしてやる事もできなかった。

暗くなってから銀座まで出て、クリスマスのイルミネーションを見ながら歩いた。夕食は家で、と言うので、キムラヤのアンパンを並んで買って、無理矢理一つ食べさせてしまった。

「坂本さん、痩せ過ぎ。胸なんかぺったんこじゃん」

「こんなの食べたら、夕食が入らない」

「そんなちっちゃい胃袋じゃ、胸が育たない」

「放っておいてください。私の胸なんだから」

「いや、そこは男のロマンだから、育ててもらわないと」

「やつすいロマンだね」

言葉のはしつこに、知らない坂本が顔を出した。

次の月曜日に出社した坂本は、ちょっとだけ晴れやかな顔で挨拶をした。

「浅草なんて、しばらくぶりで楽しかったな」

「じゃ、またどこか行こうか」

それだけの会話なのに、すごく親密な気がする。通路で話していると、津田さんが見ないフリして興味津々な顔で通り過ぎて行った。

あ・・・顔面報告書が。

一日の終わりに坂本からメールが来るようになったのは、そのす

ぐ後だった。読んでいる本とか今日のランチとか、ごくごくたわいな日常のこと。そんなことを話す相手すら、限られてたんだな。夜なんて、俺もテレビ見るくらいしか用事がないから、メールのやりとりは結構嬉しい。暇つぶしの雑談の延長なんだけど、その相手が俺だっただけで、なんだか好意を抱かれている気分になる。

いや、実際好意だろ？坂本が俺に向ける顔に、警戒心を感じなくて嬉しい。現段階で坂本が俺って人間を、どう受け止めてるかはおかんないけど。

ちよつと夕飯食べて行こうか、なんて仕事帰りに何人かで中華料理店に行く。いつもより帰りが遅くなつて、電車の中で坂本のメールを受けた。

> 今、帰りの電車の中。ちよつと飲んだ。

そう返信したら、電車を降りる頃に携帯が震えた。

> いいな。私も、行きたい。

えーっと、遅くなると親が心配するんじゃないかな。いいのかな。

> じゃ、次は一緒に行こうか。

> 私が行つても、喜んでくれる人はいないもの。

確かに今、会社で坂本と言葉を交わしているのは少数だ。自分の意思でなくても、結果的に異端視されている原因は自分だし、自覚があるから余計に話しかけられない。不安定な時の（特にカウンセリングの後、らしい）感情の振れ幅は、確かに絡みにくい。会社の中での人間関係は、相手の性格云々よりも自分が不愉快にならずに業務を遂行できれば良いので、絡みにくい相手とは、できることから関わりあいたくないからね。

> 今度、野口さんに声かけてみる。

自分から仲間に入れて欲しいと意思表示できないんだから、誰かが引つ張ってやらなきゃ、いつまで経つても中には入れない。辛い



思いをしたんだから、それ以上にならないように、庇ってやりたい。坂本がちゃんと笑うようになったら、あの伸びやかなアルトの声で、どんな話をするんだらう。俺がそれを引き出せたら、なんて思う。

坂本にのめりこんでいく自分の感情を、止めることができない。

> ありがとう。

返信が来て、自分が坂本に頼りにされてる気がして、嬉しくなった。ああ、誰かを守りたいって、こんな感情なんだな。悪くないじゃないか。

暮れも押し迫って、社内全体の帰り時間が遅くなった頃、坂本に「今度」と言ったことが、ようやく実現できた。ごくごく身近な人ばかりで、経理部の女の子と津田さんと俺、それに隣の部署の営業が一人。それでも坂本は充分に嬉しそうで、自分から話題を出すことはなくても、終始にこにこしていた。八時を過ぎると「家に電話してくる」と席を立ち、戻ってこっそり俺に「心配しないように言った」と言う。それでも九時を回るとそわそわしはじめ、相槌が上の空になった。

背広の裾がきゅっと引つ張られ、横を向くと坂本の上目があった。「時間……」

ああ、一人で席を立ちにくいのか。頷いて、残る面子に「そろそろ帰る」と告げた。じゃあお開きにしようって話になって、三々五々帰り支度をはじめ。翌日に仕事が控えているので、そんなに遅くまで飲んではいられない。

地下鉄の駅までぞろぞろと歩きながら、坂本のスイッチが入っていないかどうか顔を窺う。今日は、大丈夫。

後ろからくつついてくる津田さんに、別れ際にぼそつと言われた言葉は、気に留めなくてはならない類のことだろうか。

「構い過ぎんなよ。一方的に保護者になると、結果的に両方辛いぞ」

営業先から会社に戻ったら、女の子何人かが帰るところだった。珍しく坂本も一緒に、ちょっとほっとした気分になる。

「どこか行くの？」

手近な女の子に話しかけると、「お茶して帰る」なんて返事が戻ってきた。

「萩原君も一緒にしたい？」

「そんな女ばつかのとこ、怖くて行けませんよ」

坂本と目が合う。ちよつと不安そうな顔に頷いてみせると、ぱつと表情が明るくなった。可愛いじゃないか。俺が頼りにされてるみたい。

家に帰ってレトルトカレーの夕食をとっていたら、坂本からメールがあった。誰と誰とお喋りした、楽しかった、なんて子供みみたいな報告。そんなに楽しかったのか、良かったなって、坂本の嬉しそうな顔を想像して、俺も嬉しい気分になる。友達に連絡も取れなかった坂本が、俺にはちよつとだけ警戒を解いてくれる。ただそれだけのことなのに、俺が坂本を守ってやれる気になっちゃう。

一方的に保護者になると、両方辛い？津田さんが言ってたけど、今まで誰にも頼れなかったんだから、それを解消する期間くらいは、いいじゃん。

年内にもう一回くらい坂本を誘いたいなーなんて思いながら、年の瀬ギリギリになってしまった。今週を外すと、冬休みになっちゃうって時期。

> 日曜日、遊びに行こうよ。

メールにはすぐに返信が来た。

> 絵本カフェに行ってみよう。

・・・絵本カフェ？なんだそりゃ。

> 行きたいところに行こう。

返信しながら、坂本が自分の行きたいところを主張したことに気がつく。顔が見えはじめているんだろうか。

俺は、坂本からどう見えてるんだろう？少なくとも、友達には見えてるんだよな。恋愛に持ち込める可能性はあるのか。そもそも俺は坂本に、恋愛感情なんて抱いているのか。何かしちやいたいか俺を楽しませて欲しいとか、そんなことを考えられない相手に、ここまでかわりあいたい俺は、今までの自分も知らない俺だ。

## 壊れてる部分

絵本カフェとやらに行つた日、坂本の様子はまた少し変だった。

「カウンセリングに行きたくないの。辛い」

カウンセリングに行くと、揺り戻しがあるのは前から気がついていたんだけど、その後はすぐに楽になるものだと思っていた。投薬のない治療法で、とにかく自分の記憶を吐き出して、整理していると言う。そこで、自分は間違っていなかったのだと自分に認めさせるつてのが趣旨らしいが、一つの記憶から連鎖で思い出すらしく、それが苦しいという。

「そんなことしたら、モト君だけが悪い人になりそうな気がする」  
びっくりぎょーてん。女を殴つて壊したヤツが、悪いヤツじゃないって言うわけ？ワケわかんねーし、悪いヤツだから別れたんじゃないの？

「坂本さんは、自分が悪いから殴られたって思ってるわけ？」

「そうじゃなくてね、モトくんも辛かったの。いつも泣きながら謝つてた。本当は優しいのよ」

口先で謝るのなんて、簡単じゃないか。そういえば、雨の中で土下座してたっけ。

「あんなに怪我させられても、優しいの？」

「報道番組で戦場の子供たちの映像を見て、涙を流すような人なのよ」

同じ人間か、それ？黙つて聞いているしかないじゃないか。

「私は自分が怖いからって好きだった人を、犯罪者にしたの。あんなに寂しがつて苦しんだのに」

整理させてくれよ、ちよっと。俺が混乱してるのに、坂本は淡々と続けちゃうのだ。

「世界中に迷惑かけても、救ってあげられれば良かった。怖くて怖くて、逃げ出したのよ」

「なんだか、殴られて言うこと聞かされて、自分の価値観を無駄にされたって怨みとは、ずいぶんイメージが違う。」

「なんだか、殺されても良かったって言ってるみたい」

「それが怖くて、見捨てたんだわ。好きなら最後まで付き合っただらいいのに」

「すっごく異常な言葉を聞いた気がする。プレイじゃなくて、それが真剣な言葉なのだとしたら、この感覚はどこがおかしい。気持ち悪い。」

「こんな話して、ごめんなさい。だけど、萩原さんなら聞いてくれるかと思って」

「いや、俺も別に聞きたくはなかったんですけど。」

「王様の耳はロバの耳。でも、カウンセリングは続けた方がいいよ。坂本さんの無用な罪悪感のために」

「無用なの？」

「百人中百人、そう言うと思う。俺も正直、わかんないし」

「しばらく沈黙して、坂本は俯いたまま頭を振った。」

「そうね、誰にもわからない」

「誰にもわからない。わかりっこない。好きな人を犯罪者にしたって、自分がされたことが犯罪行為じゃないか。」

「逃げ出すのだって当然だ。何故それに罪悪感が伴わなくてはならないのか。殴られても最後まで付き合っただらいいよ？そんなの、どう考えたって異常だ。」

「虐待されてる子供が、何故親を憎むんだと思う？」

「ひどいことをされてるから」

「でも、自分からは虐待されてるって言わないよね」

「認めたくないのと、恥ずかしいのと・・・あ・・・」

「そういうこと。表裏一体なんだよ、愛されたいから憎むの」

津田さん、パパの視点丸出しです。でも、言ってる意味はなんとなく理解できる。坂本は、あの男とちゃんとした関係を築きたかったんだ。

「ありがちな感情だけどさ、坂本さんは自分の力で、彼氏を変えられるか思ってたんじゃないか？それ以前に、そう思わないと自分の選択が間違ってたって認めなくちゃならないから、そこを正当化したいよね。そうしたら、すっごく好きだったことにしないと辻褃合わなくない？」

「まあ、そうですね」

「で、すっごく好きだったことにすると、逃げ出したことに対して辻褃が合わない。そこで、自分が悪いことにすれば、彼女なりに筋が通る」

津田さんの酒は、減ってない。

「カウンセリングでどこまで遡ってるかだよな。まわりには何もできないんだよ。自分で考えて、自分で立ち直るしかないの」

「でも」  
「感情を代わってやることなんてできないんだから、できるのは悪くないって言ってることだけだよ」

津田さんは言い切ってから、目の前の梅割りを一気に半分くらい飲み込んだ。

「庇いすぎると、庇われなきゃ何もできないって思い込ませるぞ」  
津田さんが何をどう見てるのは知らないけど、坂本は多分そんなに強くない。せめてちゃんと笑えるまで、あれ以上辛くないようにしてやりたいってのは、間違いだろうか。津田さんの物言いたげな視線に否定されるみたいで、口答えできなかつた。

帰宅する頃、坂本からメールが入った。

> 眠れないの。

スーツを吊るしながら返信して、シャワーを浴びている最中に、またメールがある。

> 誰かの声が聞きたい。

電話でもいいよと返信しても、電話は来ない。

> 夜中にごめんね。おやすみなさい。

こちらから電話した方がいいのかなと思っていろいろうちに、日付が変わったので寝ることにする。気になって仕方が無い。

坂本はまだ、あの男に未練を残しているんだろうか？ 俺に送ってくる頼りないメールは、少なくとも俺に何かを求めてるってことだろ？俺も何か見返りを期待していいんだろうか。

会社の通路や給湯室で坂本に会うたびに、スイッチは入っていないか揺り戻しはないかと表情を確認しているうちに、正月休みに入った。簡単な掃除をして、一日だけ友達と遊びに行った後、実家に帰る。学生の頃は帰らないでアルバイトしてたりしたけど、社会人になったら学生時代の友達は何故か、判で押したように、年末に実家に帰るようになった。その代り、普段の連休には帰らないけどね。電車で二時間程度のところだから、帰ろうと思えばいつでも帰れるんだけど、一日か二日しかない休みには、行きたくない。生活ベースがすっかり実家じゃなくなってるってことだな。

大晦日に坂本からメールがあり、ロードバイクのメンテをしたという。ピカピカの写真が添付されている。

> 来年は、これで走り出そうと思います。

年が明けたら、あけおめメールを出そう。どんな顔でロードバイクを磨いていたんだか、明るい顔だったらいいな。俺も、バイク買おうかな。そうすれば、ツーリングにも付き合えるし。

近所の神社のお焚き上げに家族揃って行き（知り合いに会うと、

妙に気恥ずかしい）元旦はだらだらと寝坊して（親父に蹴られて起きた）去年早々に所帯を持った兄貴（地元就職した）が奥さんと一緒に顔を見せた。平和な正月の午後だ。メールをチェックしたら、何件もあけおめメールが入っていた。どうでもいいヤツにはまとめ返信。

津田さんからは、子供と奥さんの写真添付・・・うーむ。他人の奥さん見たってなあ。

アパートに届くアナログな紙の年賀状は、ほぼダイレクトメールだから、気にしない。そして、坂本。

>あけましておめでとございます。昨年中はありがとうございました。今年は元気な私です。

本当に今年は元気だといいな。

>あけましておめでと。元気になる手伝い、したいな。

送ってから、あまりの恥ずかしさに身悶えしたが、後の祭りだ。坂本の細っこい手首が、あれ以上細くならないようにしてやりたいんだ。津田さんにまた「構い過ぎんな」って言われるかな。あんなに頼りないんだから、構いたくなるじゃないか。俺一人くらい、構ってやりたいと思ったっていいよな。



## 俺も変わってる

「あけまして、おめでとうございます」

年始から坂本の表情は憂鬱だった。メールでは元気そうだったんだけどな。

「今日は挨拶回りで名刺置いてくるだけだから、一緒に帰る」

そんなことを言うのにいちいち周りを窺うのが、社内の悲しさだよな。こくと頷く坂本は心細そうで、正月の間に何かあったのかと心配になる。

部内全員で神社にお参りをした後、それぞれに謹賀新年スタンプ付の名刺を配りに歩く。って言うっても、大抵向こうも同じ行動をしてるから、担当者に会うことは少ない。会社に戻ると、自分が行った先の担当者の名刺があったりする。フォレストハウスの女顔の担当は、外に出ないで会社の中にいたけど。

「おめでとうございます。最近現場をマメに回っていただいているみたいで、引渡しの確認がしやすくなりました。ありがとうございます」

小柄で童顔だから気がつかなかったけど、物腰から察するところ、どうも歳上だ。本当に見てなかったんだな、俺。津田さんの忠告は、ずいぶんと身についたらしい。

日報を書いていたら、自前の方の携帯が振動した。社内メールでもいいのに、わざわざ携帯にメールってところが、派遣社員としての堅さなのかも知れない。地下鉄の近くのファーストフード店で待ち合わせることにして、慌てて帰り仕度をした。

「萩原君、なんだかいそいそしてるわねえ」

野口さんの視線を避けて、とっとと会社を出る。坂本が待っているとと思うと、気が気じゃない。

坂本は店に入らず、外で待っていた。俺の顔を見て、ほっとしたように表情に余裕ができた坂本は、正月の間何を考えていたんだろう。オーダーに時間のかかる坂本がファーストフード店に一人で入れないと気がついたのは、その後だ。

「坂本さんって、そんなに優柔不断なのにバイクなんか乗るの？」

「自分だけのことを判断するのは、平気。相手がいたり伝えなくちゃならないことがあると・・・ちよつと苦手になっちゃって」

なっちゃって、って。それは、以前できてたってことか。俺は今この今まで坂本のことを、判断するのが苦手なヤツだと思ってたぞ。ちよつと苦手、どころじゃないじゃないか。

「お正月、何してた？」

「ちよつとバイクで走って、後は家に居たの。上手く暇つぶしができなくて」

ファーストフード店の小さいテーブル越しに、坂本は小さくまつまっていた。

「俺も実家でヒマだった。正月休みって、意外に友達と会ったりしないんだよな」

「やけに文学少女になっちゃったわ」

「俺、テレビ見てたらだら」

内容のない世間話でも、坂本の顔が晴れてくるのがわかる。そうか、誰かと話したかったのか。

「お正月番組見てたの？あつたま悪そう」

そんなことを言われて、思わず顔を見返す。意外に小気味の良いセリフだったからなんだが、坂本ははっとした顔になり、下を向いて小さな声で謝った。

「私、調子に乗りましたね」

「なんで？普通に喋ってたよ？坂本さんって俺が思ってるより面白

い人ももって思ってた」

顔が上がった。怒ってないよ、大丈夫だよって頷いて見せる。ほっとした顔が小さい子みたいで、可愛い。面倒臭いのに、何かしちやうなんて想像もできないのに、その顔が嬉しくて頬が緩む。我ながら阿呆だ。野口さんも三枝さんも、最近坂本を特別に気にかけてる風でもないしな、寂しいんだろうなあ。

「今度、いつ遊びに行こうか」

翌日の残業中、モニタとにらめっこしてる野口さんに、話しかけた。

「最近、坂本さんと一緒に居ませんよね」

「え？ああ。あたしにできることは、もうないもん。彼女が自分で考えて、動かなくちゃいけない段階だし」

まだ、あんなに辛そうなの？

「彼女の派遣期間、年度末までだよ。他の会社に行ったら、自分で人間関係作らないとならないから、大変だろうね」

野口さんはモニタに視線を戻し、キーボードを叩きはじめた。

「萩原君、今月の竣工予定なかった？」

「あ、あります」

「じゃ、そっちの管理表が先。イロコイの話はあと」

イロコイの話のつもりじゃなかったんだけどな。野口さんはもう、坂本に手を貸すつもりはないみたいだ。

久しぶりに合コンのお誘いがあり、いそいそと出掛けた土曜日。学生時代の友達何人かと、その中の一人の会社の女の子たち。開放的な会社なんだか、女の子たちはノリが良く華やかで、ちょっと不思議な気分になる。綺麗で陽気な女の子たちと楽しく遊んでいるのに、持ち帰りたい女がない。見た目がタイプの子もいるし、さっきから隣ではしゃいでる彼女は隙だらけなのに、全然その気にならない。

「萩原、なんかノリ悪くない？女の子多いのに」

「いや、普通でしょ。俺だって女の子と遊ぶばかりじゃ・・・」

「遊んでんじゃん。要領よく口の上手さで抜け駆け」

人聞き悪い。合コンイコール女の子持ち帰りみたいじゃん。ま、ちよつと他のヤツより大目、かも知れないけど。

「萩原君って楽しい。メアド交換しよう」

隣の席の子にメアドもらって、多分こっちからメールすることはないなーなんて思ってたなら、家に到着してすぐメールがあった。

> 今度、二人で会わない？

彼女は結構可愛かったし、陽気だった。友達と同じ会社の子だから身分的には保証されてるし、向こうからの申し出なんてラッキー、なんて少し前なら思っていたはずだ。

ねえ、よく知らない男に迂闊に声かけない方がいいよ。女の子なんて、寝る相手だとしか思ってないかも知れないよ。

誰に向かって呟いたんだか。返信しないで、携帯をベッドの上に放り投げた。

「同窓会があるの。昨日メールが回ってきて、来週の金曜に」

坂本がそう言ったのは、次の週だった。

「楽しみだね」

普通にそう答えただけ、坂本は迷っている風だ。

「行かないの？」

「行きたいような気はするんだけど、怖い」

何が怖いんだか、よくわからない。

「同窓会の最中に、ヘンなこと言い出しちゃったらどうしようってみんな、萩原さんみたいにはしてくれないもの」

「高校生の頃の友達に会えば、高校生に戻れるんじゃない？大丈夫だよ」

不安そうな坂本の顔を見て、どう言ってもやればいいのかわからない。

「どこで同窓会やるの？」

「渋谷なの。友達には会いたいな」

その不安は、俺には解決してやれない。でも、時間が決まってい  
て逃げ込める先があれば、坂本も少しは気が楽なんじゃないだろう  
か。

「終わる頃見計らって、迎えに行こうか？そうしたら、ちょっと辛  
くてもそれくらいの時間は大丈夫じゃない？」

「いいの？わかってる人が近くに来てくれるだけで、すごく安心す  
る」

目を輝かせて言ったあと、やっぱり止めると言う。

「行きなよ。たまには楽しむ事だけ考えればいいじゃん」

「だって、やっぱり迷惑」

「全然。どうせヒマだし」

## 頼りたい

やっぱり申し訳ないからと固辞する坂本に、大丈夫だと念を押し  
た。

「本当に来てくれるの？私、行けなくても我慢できるのに。自分で  
蒔いた種なんだから」

「いいよ、どうせ休みの日の夜なんてヒマなんだから。近くで遊ん  
でるから、辛くなったら電話すればいいよ」

ちよつと押し付けがましいかなと思っただけど、坂本は行きた  
いのに不安だと言っただし、俺は多少なりとも不安を解消してや  
ることが出来る。それならば、俺の遊びがてらの手間くらい、どう  
つてことないじゃないか。坂本が申し訳なさそうな、それでいて嬉  
しそうな顔で俺に頭を下げる。

「萩原さんがいてくれて、本当に良かった。私一人じゃ、何もでき  
ない」

有頂天になったのは、否定できない。この時点で津田さんの「構  
い過ぎるな」は頭の中から消えていた。坂本が感謝してくれたこと  
が本当に嬉しくて、なんだか坂本を救ってやれるのが俺だけのよう  
な気がしていた。坂本がひっそりした笑みじゃない、心の底から楽  
しそうな笑いで俺と会話するようになれば、それだけで報われるよ  
うな気さえした。俺の力でそうできるような。まったく、思い上が  
ったものだ。

一月のおしまいの週の坂本の同窓会は、大層楽しかったらしい。  
迎えに行った約束の場所で、坂本は頬を紅潮させて、その日の話題  
や仲の良かった友達との再会を報告した。

「大丈夫だったの。何かあったら萩原さんが来てくれると思ったら、  
落ち着けた。『知らない』って言葉も、ちゃんと我慢できたよ。あ

りがとう」

普段よりも速いテンポで喋る坂本の髪をくしゃつと撫でた。

「全部、萩原さんのおかげ。どんなに感謝しても足りない」

こんな嬉しそうに頼りにしてくれるんなら、俺の何時間かなくて、取るに足りないものじゃないか。そうだろ？今まで見た中で一番明るい顔の坂本が、頭を下げる。

「大したことしてないよ。楽しくて良かったね」

もっと、こんな顔が見たい。

待ち合わせたファーストフード店から駅への雑踏を歩き、交差点で立ち止まると坂本が俺を見上げた。

「何かお礼したい。大したことできないけど」

「じゃ、これからラブホ」

「冗談じゃなくって、何か私にできること、ないかなあ」

いや、あながち冗談でもないんだけど。信号待ちの混雑の中、坂本の肩を抱いて触れるだけのキスをした。逃げたり怒ったりしなかった坂本は、小さな声で「ごめんね」と言った。

「ずるいよね、私。頼るだけ頼ってて」

いくらでも頼りたいのに。

メールはいつの間にか定期便になり、時々とても不安定な坂本が泣きながら電話をかけてくる。聞いているだけだ、アドバイスなんてないし。「モト君を見捨てた」っていうのは、何回聞いても慣れない。慣れないけれども、何回も聞いているうちにそれが核の部分だと理解した。あの男に未練があるわけじゃない、黙って殴られてた理由が欲しいんだ。正直言うと結構重い話を聞いて、うんざりすることもある。でも俺が聞いてやらなくちゃ溜めておくしかない坂本を、どうにかしてやりたい。

決定打に至った暴力の話も、見当がついた。よく覚えていなかった

た部分（忘れたと言っていたけれど、脳がシャットアウトしていたらしい）も、カウンセリングで掘り起こしたらしい。

戸棚の角に頭を打ち付けて、意識を失った女の上に乗る男。

はつきりドン引きだったし、聞きたい話じゃない。聞いたのは二月二週目の会社の帰りで、朝から顔色の悪かった坂本を新橋駅まで歩いて送る最中だった。歩きながら喋らせて、整理するのを待つ。混乱気味くらいのレベルの時は、三十分も歩くと落ち着くことが多くなった。

「ありがとう。萩原さんがいなければ、多分仕事もできなくなってた」

開発営業部の会議の後、その流れで夕食なんて言ったら、営業推進室の筈の山口さんがしれっと混ざっていた。

「あ、後から三枝と坂本さんと、もう一人経理が来る。まだ残ってたから、女の子を差し入れ」

確かに、女の子は野口さんだけだね。会議後の夕食だけ飲み会だかわからなくなって、とりあえず真ん中に女の子を入れるなんて課長命令が出る。坂本は、俺の隣に座らせときたいんだけどな。

何かあったときフォローしてやらなくちゃ。

女の子たちが入ってきて、坂本が俺の顔を認めてほっとした表情をする。隣を詰めて合図しようとしたら、そこに野口さんが座ってしまう。

邪魔なんですけど。他人の奥さんとなんて、飲みたくないんですけど。

「心配性のお父さんみたいに、娘の行動を見張っちゃダメよ、萩原君。娘が自立しはくれるからね」

心配性のお父さんって、俺？坂本は不安そうに、山口さんの隣で小さくなっていた。



ちらちらと坂本の顔色を見ながら、梅割りなんか飲む。山口さんは坂本がシヨックを受けるようなことは、言わないと思うんだけどね。野口さんに視線を遮られて、話題がわからない。席の向かい側で津田さんが課長と話し込んでる。

九時近くになって、坂本がそろそろ帰りたいんじゃないかと気が気でなくなる。

立ち上がって声を掛けようと思ったところで、津田さんに逆手さかてをとられた。

「構い過ぎんなって言ったろうが」

「痛いっす！腕、折れるっ！」

「折れねえよ、これくらいで」

体育会系の津田さんと一緒にしないで欲しい。ジタバタしてたら、坂本が携帯電話で時間を確認しているのが見えた。キヨロキヨロと見回してから、俺の方を向く。津田さんから腕を取り戻したら、今度は野口さんの邪魔だ。

「萩原君、カシスとグレフルの追加がまだか聞いてきてえ」

「自分で聞いて」

「何？あたしの言うことが聞けないって言うの？」

これは聞かないと、余計にうるさいことになる。

背中であつた坂本を気にしながら、十五分が経過していた。困った顔になつている坂本の隣に辿りつけない。俺が連れ出してやらないと、親の心配を気にしながら、ずっと帰れないじゃないか。

「萩原君、大根サラダとシシヤモ追加して」

「こんな時間に食べると、太りますよ」

「なんですつてえ？」

あ・・・失言。ああ、野口さんと津田さんで俺を妨害してるわけだ。そんなに構い過ぎてるように見えるのかな。だって手を貸してやらないと、ほら、向こうで困ったままじゃないか。

「あれ？そう？じゃ、気をつけてね」

唐突に山口さんの陽気な声が聞こえて、コートを抱えた坂本が立ち上がった。

「お先に失礼します」小さな声で挨拶して、場を抜けようとしている。すつごく緊張した顔で、だけどパニックを起こしていないことは見て取れた。

座敷の前で靴を履く坂本に近寄って、声をかける。

「大丈夫？一人で帰れる？」

振り向いた坂本は、とても晴れやかな顔だ。

「ねえ、自分で帰るって言えたよ。緊張したけど、頑張った」

小学生みたいな報告に、頬が緩んだ。思わず頭を撫でそうになって、いかんいかんと手を引っ込める。

「まだそんなに遅くないから、大丈夫。お先に」

気が抜けて席に戻ると、津田さんと野口さんがニヤニヤしていた。

## 間違ってた

「自分で解決できるところまで手出ししようとして。父親より始末悪い」

「判断までは、引き受けられないんだぞ」

身体のデカい津田さんと態度のデカい野口さんが一斉に言う。なんて反論しようかと思っっているうちに、山口さんが爽やかに「身の丈に合わないことするから」とヒトデナシ発言をして後ろを通り過ぎる。なんちゅうチームワークの良さ。

「打ち合わせ済ですか？」

「必要ないわよあ。子供の考えることなんて、バレバレ」

はあ、左様でございますか。

「ウチは、一人になるの怖がってなあ。半年近く、家の中でもトイレ以外はくっついて歩いて歩ってたわ」

津田さんのぼそりとした呟きに、野口さんが答える。

「あの沢城が？いつ？」

「そ、あの強気なヒトが。まあ、妊娠中だったし、ナーバスになるよな」

「マタニティ・ブルーの強いみたいなの？」

「まあね」

野口さんが納得したようなしないような顔で、でも踏み込まずに頷いた。

「俺が過保護にしちゃったんだよ。自分が遅いときは実家に居させたりしてね。そんなことしてたら、自分は解決できないって思いこんじゃうのに。ま、結果的にはあの人は遅いからね、自力で解決してただけ」

「だ、そうよ、萩原君。坂本さんの次の派遣先には、萩原君はついていけないのよ」

坂本の契約が切れるまで、まだ一か月以上あるのに。

解散して帰る頃、坂本からメールがあった。

>今日は良い日でした。ちょっとずつこうやって、頑張っていこうと思う。萩原さんにも迷惑かけないように。

あれくらいの意思表示で、そんなに自信がつくのか。

>迷惑じゃないから、大丈夫。無理することないよ。

返信してから、津田さんと野口さんの顔を思い出す。坂本だって自力で解決しようとしてるじゃんか。手助けくらいしたっていいだろ。

二月も終わりかけた頃、坂本はずいぶん喋るようになっていた。

意外な程テンポの良い受け答えに、驚きながらも楽しい。一緒に映画を見に行つて、ハリウッド超大作を「駄作」と言い切る。

「CGだらけで出来合いのアクションシーンを誤魔化して、ストーリー性なんて考えてないんじゃない？」

辛辣に評価する一方で、その後にお茶を飲みに行くと、メニューを見つめたままで固まったりする。相変わらず何かしちゃおうって感じにもならなくて、やけに中途半端な付き合い方が続いていた。

メールの定期便が当たり前になると、当然いろいろなことを知る。カウンセリングで掘り起こしたことを、何でもかんでも聞いちゃっていたので、俺の知識は「素の坂本」よりも「モト君のキレる瞬間」が増えたくらいだ。いや、そんなヤローのことなんて、聞きたくないんだけどね。

ただ、あの飲み会を境に、坂本の話の内容は少しずつ外を向くようになっていった。

メールも電話も来なかった日、一人で泣いてるんじゃないかと、つい俺から電話をした。

「今日はね、一人で頑張ってみようと思って。気にしてくれて、ありがとう」

俺好みの坂本の声が、耳元に聞こえる。泣きながらの電話じゃないのって、いいなあ。坂本の派遣はやっぱり継続にはならないらしくて、社内で顔を見るのはあと一ヶ月と少しだ。野口さんの言うとおり、俺は次の派遣先についていくことはできないから、顔色を窺い続けたりはできない。

俺は、何ができるんだろう？何がしたいのか。坂本を庇ってやる以外に。

何日か前から、坂本の調子が悪い。野口さんに聞いた話だと、また給湯室で紙コップを千切っていたらしい。決算前のドタバタで俺もなかなか時間が取れず、一緒に歩いて整理させてやれなくて、硬くなった表情を気にしながら、どうしてやる事もできない。

自分が疲れてくると、夜中の電話とメールが苦痛になってくる。楽しくない話は疲れるから、受け答えが取り繕えなくて、ぞんざいになる。悪いとは思っただけど、どうしようもない。俺だって愚痴を言いたいことはあるし、他人の話を聞く余裕のないトラブルを抱えたりもする。

一方的に保護者になると、結果的にお互い辛いぞ。  
よくわかりました、津田さん。

夕方、営業先から会社に戻る途中で、坂本からのメールを受け取る。結構俺には大きな物件なのだが、メーカーの生産遅れで、施工請負と建築会社の両方に頭を下げるため、津田さんにも同行してもらっていた。

「今日、このまま帰って・・・」

「バカ言っつな、これから流通管理にメーカーと交渉してもらうのに。おまえの物件だろ」

「そうでした」

津田さんは俺のプライベート用の携帯に目をとめて、溜息をついた。

「自分でどうにかしようと思わなくなったのは、おまえの責任。ちやんと責任とれよ？無責任に構いまくったんだから。人間ってのはね、楽な状況に慣れるのはおっそろしく早い。おまえって器用な分、楽しかしてなかっただろうから知らないだろうけど」

反論のしようは無く項垂れて、坂本にまだ仕事が残っているとだけ返信した。

くしゃくしゃするので、前に合コンで知り合った子と連絡を取ってみた。女の子と頭を使わない話をするのは楽しいし、やわらかくて良い匂いの髪は気持ちいい。気分良く酔わせてホテルに連れ込んで、じゃうのもお手の物で、そして。

つまんなかった。

相手の女の子にはものすごく失礼だけど、向こうも遊びなんだから、どうってことないよな。ちゃんと興奮して快感はあって、相手のカラダにだって不足があったわけじゃない。にもかかわらず、終わった途端にしらけてしまって、余計にどうしようもない気分になった。これが楽しいと思っていたのに。

また連絡して、なんて言葉に手を振って、電車の中でアドレスを消去した。悪いとは思わなかった。

そこそこ可愛い子だし、俺と同じような男はこれからもいるだろ。

その晩の坂本のメールにも、返信はしなかった。

ごめん。どうしてやっていいんだか、わかんねえや。俺が庇ってやれるのは、顔が見られて自分に余裕がある時だけだ。津田さんが責任とれって言ったけど、坂本が何に救われるのか、俺には見当がつかない。それが三月はじめの日曜日の話だ。

月曜日に会社に来た坂本は、ひどく顔色が悪くぼんやりしていた。

昨日メールの返信をしなかったのが、後ろめたいくらいだ。

「今日も、忙しい？」

泣きそうな顔で言うから、断れなくなった。津田さんに手を合わせて図面のチェックをしてもらい、会社から近い航空会社の名を冠したホテルの中庭で待ち合わせる。居酒屋やファーストフード店では、パニックを起こしかねない、それくらい後戻りして見えた。

街灯はあるから暗くない。桜祭りにはまだ一月早い桜坂に、人はいない。冷たい風の中で細い坂本はとても寒そうだけれど、一駅分歩かせようと思った。

「ごめんね。私ばかり寄りかかっているから、萩原さんもうんざりしてるんだよね。だから頑張ろうと思ってたのに、一人じゃいられなくて」

ひどく切羽詰った声で、なんと答えていいのかわからない。

ずいぶん前に、朝の新橋駅で待ち伏せした。あの時、坂本はまだ怯えていて、それでも自分を取り戻すのだと力強い表情をしていた。その顔はとても綺麗だった。

今、気がついた。坂本を弱くしちゃったのは、俺だ。取り戻すはずのものを、先回りして俺が手渡しちゃっていたから、坂本はそのトレーニングができなくなってる。

「ごめん」

人通りの少ないその坂の途中で、坂本を抱きしめた。

「ごめん。間違ってた」

## 依存させない

坂本が腕の中でしゃくりあげていたのは、ずいぶん長い時間に思えたけれども、ほんの五分程度だ。

「萩原さんが優しくしてくれるから、調子に乗っちゃって。考えてみれば、嫌われてうんざりされるようなことばかりしてるくせに、だからもう、相手にしてくれないのかと」

「好きだから」

自分でも驚くような感情に押し流されて、口を衝いて出た。

「坂本さんの話を聞いたり、遊びに誘ったりしてるのは、好きだからだよ」

自分でも、これが正しい言葉なのかどうかはわからない。だけど、それ以外坂本が知りたいっていう感情に、説明はつかない。俯いた顔を両手で挟んで上向かせ、涙の残る目蓋にキスした。

「優しくしたんじゃない、俺がいい気になってたんだ」

今度は間違えないで「優しく」しよう。頼られてるのが嬉しくて、何か勘違いしてた。野口さんは坂本に手を貸さなくなったんじゃない。必要以上に手出ししなかっただけだ。坂本が自分で動けるようになるために、それが必要なことだったから。もう一度、坂本を胸に抱えなおした。

「私なんか、そんなこと言ってくれなくても」

「なんか、じゃないんだ。説明できないけど」

細い坂本が、ますます小さくなったような気がする。そのまま消えてしまわないように、坂本が自分の存在を自分で肯定できるように。

「私、まだ自分がどうなってるのか、わからない。でも、萩原さんには感謝してるの」



感謝されるようなことは、してないんだ。余計なことをしただけ。「坂本さんはゆっくり、自信をつけていけばいい。その後になんかどうなるのか、俺もわかんない」

結局一駅どころか二駅分歩いて、坂本は泣いて浮腫んだ目のまま電車に乗った。

「待つてもらおう価値はないのかも知れない。でも、私も私自身で考える。ありがとう」

無理に笑った顔は痛々しかったけれども、久しぶりの決意を持った喋り方だった。

相手の状態にどこまで気を遣うか、と見極めるのは、意外に苦行だと知った。泣きながら電話をかけてきた時に、中途半端な慰めを言いながらならだと話を聞いたほうが楽だ。情性で泣き言を言っている時は、電話をさっさと切る。辛そうな顔をしていても、助けを求めた時しか相手にしない。

気になって気になって仕方ないけど、坂本が自分でどうにかできると思っている間は、こちらから手助けしちゃいけない。

我慢しすぎた坂本が何かに反応して、またパニックを起こす。その時は俺は外出だったので後から聞いたのだが、咄嗟に気がついた同じ経理の子が、その場から引き剥がしたらしい。日中で社内には内勤しかいなくて、大した騒ぎにはならなかったと野口さんに聞いた。その晩に俺から送信したメールへの返信で、坂本自体ものすごい努力をしているのだと感じた。

>今日は何も整理ができそうもありません。明日落ち着いたら、手助けしてもらっていいですか。

他人行儀になったようでちょっと寂しく感じる反面、これが普通なんだとも思う。他人に聞かせて良いことと良くないことは、誰に

でもある筈だ。そんなことは、俺にだってある。

二週目の土曜日に、一緒に美術館に出掛けた。俺は絵なんて全然わからないし、はつきり言うけど、ルネッサンスだかロココだかの違いはどうでもいい。

「好きか嫌いかだけで良いのよ。色が好き、なんていうので」

そんな風にさばさばと言う坂本は、ずいぶん調子が良さそうだ。ちよつと遅めにランチして、まだ頼りなげな表情でも、美術館の展示物について解説してくれたりする。

もつと、好きなことを教えて欲しい。

「今日ね、本当はバイクで来ようかと思ったんだけど、萩原さんを驚かせちゃいけないと思って」

「そんな長距離、自転車で走るわけ？」

「ロードバイクって、そんなに疲れないのよ」

得意げな顔が珍しくて、嬉しい。

「俺も乗ってみようかな。今度見せてくれる？」

頷く坂本の仕草が子供っぽくて、微笑ましい。こんな風に話したい。坂本だって、今までよりもずっと楽しそうじゃないか。改めて、ごめん。庇うことばかり考えて、この顔を封じ込めていたのは俺だ。

坂本の状態は一進一退で、他人に委ねなくてはならない部分と自分の判断が必要な部分の区別が難しいらしい。最近はカウンセリングで遊ったことが、ようやくと効果を生み始めたみたいだ。

「傲慢だったのかも。精神科医にもできないことを、やろうとしちゃったんだね」

自分の力では彼氏を救えなかったのだと、そんな風に納得し始めた。俺も、同じになっただけだ。坂本が俺に対して振り上げたのが拳でなかっただけで、「共存」についても、少し勉強した。依

存を促すことと過剰に支えようとすることは、紙一重だ。俺はただ、壊れていない坂本に会いたかっただけなのに、他の何かをしようとしていた。

メールの定期便は変わらないが、通話の方は、いきなり泣きながらの打ち明け話が減る。不安定な日に、電話してきても大丈夫だよと言うと、梅の花みたいな微笑みが返って来た。

「ありがとう。どうしても不安になったら、お願いする」

一人で立ち向かってるみたいで心配になって、こちらから連絡したくなるのを我慢する。俺は坂本の心も人生も、変わって引き受けてやる事はできない。そう割り切ってしまうことで、逆に自分の受け入れ態勢に余裕ができたのは驚きだった。

全部受け止めようと思うと、細かなことまで身を入れて聞いて、一緒に混乱してしまうのだが、一歩下がって聞くだけに徹すると、意外に練り言が多い。そこは頭から抜いておけるから、こっちもイライラしなくなった。遠回りしちゃったからからといって、駆け足になるわけにも行かず、亀の歩みのように少しずつ手を離さなくてはならない。

もうじき、社内からいなくなってしまう。せめて次の派遣先で同僚と寄り道するときくらい、自分の好きな飲み物をオーダーできるようになって欲しい。

子供の自立を見守るお父さんって、こんな気分かも。尤も、お父さんは下世話な期待はしないだろうけど。

そうなのだ。問題は俺の「下世話な期待」なのだ。好きだと言ってしまっただけからこっち、抑えが利かなりつつある。今現在の坂本を押し倒しちゃうのは、多分簡単だ。ただし、それで自己嫌悪しないかと考えると、絶対するって結論に達する。弱みに付け込んだ気分になるのは間違いない。

ジレンマに苦しんでいるにもかかわらず、坂本は俺の目の前で無防備に信頼しちゃってるのだ。高校生の時に理解できなかった、光源氏の紫の上に対する気持ち、わかるような気がする。

## 任期終了でも

派遣期間は残り二週間を切ったけれども、社内で話し相手の少ない坂本に、送別会なんて開かれない。それでも野口さんとか三枝さんとかが少しずつ連れ出しているようで、楽しそうなメールもちらほら来る。そして本人も気が付いていないことの報告を、野口さんから聞く。

到来物のお菓子を「女の子だけね」と配るのは、よくある話だ。

大抵の場合「残ったものがあればいただきます」のスタンスだった坂本が、箱に手を伸ばしたという。

「パウンドケーキなら、オレンジピールが好きです。でも、他にこれが欲しい人がいれば」

「大丈夫、早いもの順だから」

野口さんの言葉に、とても悪戯っぽい顔をしたらしい。

「坂本さんって、もしかしたら活発な人なのかも」

野口さんが言う。

活発なのは、時折見える顔で予測がついていた。ロードバイクのサークルも、自転車店に紹介された場所に一人で行ったらしい。同じ趣味の友達がいたわけではなく、自分の興味があることなら自分で動くタイプなんだな。そこに「爽やかなスポーツマン」の筈の「モト君」が入会したところから、坂本はああなっちゃったわけだ。

話が合って、二人で行動することが多くなって、二人だけの方が楽しいと、一緒に脱会するまでは異常じゃなかったって聞いた。交通事故のようなものだけど、まわりの人間に、それは見えない。そして俺の予測だけど、それまでの活発さを思えば、殴られてるなんて予測する人はいないだろう。

もしかしたら、俺の周りで坂本の他にも、居たのかもしれないな。人間が壊れるのって、案外とあっけない。

三月終わりの日曜日に、坂本自慢のロードバイクを見せてもらう。「あれ？体の線丸出しのジャージじゃないの？結構楽しみにしてたのに」

「あの格好で街を歩けっつて言うの？それは、いくらなんでも・・・」身体を動かすと気持ちも動くのか、坂本の顔はとても晴れやかだ。週の半ばには、社内には居なくなってしまう坂本は、今度こそ事情を知る人間が誰もいない場所に、一人で行かなくてはならない。

「また、誰かに迷惑をかけたら、どうしよう」

「そしたら、電話して。で、泣くのは週末まで待つてて」

「待つてるの？」

「そ。じゃないと、弱みにつけこめないから」

ロードバイクを貸してもらって、自分も走ってみる。

「俺も、乗ってみたいかも」

「結構値が張るものだから、ちゃんと乗ってあげないと勿体ないよ」

「初心者用に考えてくれる？」

嬉しそくに頷く坂本は、会社が変わっても俺と、続けて会ったりするつもりなんだろうか。できれば、週末ごとに。

ものすごくあっさりと坂本の派遣終了の日が来る。朝礼で一応の挨拶をして深々と頭を下げていたが、誰かが特に反応したというワケでもなく、つまり派遣社員が任期を終えただけだ。

最終日の定時に、俺は現場に居た。最後に「お疲れさま」の一言くらい言ってやりたかったが、結局メールしただけ。翌日には次の派遣先の面接があるとのことだ。

「今度は大丈夫。何かあっても土曜日まで頑張る」

「頑張りすぎるなよ。疲れちゃったら、連絡するんだぞ」

そんな会話が あつたのは、おしまいの日に新橋駅から歩いて一緒に出勤した時だ。会社の特定の女の子なんて、何かあつたら逃げられなくなると思つていたのに、我ながら大した変化だ。そちらの面倒よりも、時間が惜しいが先に立った。どんなに不安定でも、これからは俺が先に気付いてやる事はできないのだ。

「同窓会から、高校時代の友達と連絡取り始めたの。いいね、気楽なお喋りって」

気楽なお喋りの内容に、興味はある。俺も坂本と、もつとそんな話が見たい。そう思いながらしみじみと顔を見てしまった。

「何を見てるの？」

「いや、可愛いなと思つて」

朝っぱらから何言つてんだ、俺は。津田さんが忠告してくれた時に気が付いていれば、この時期にはもう、バカ話ができていたかも知れない。

会社が近くなり、朝礼の挨拶のために、坂本の顔が少しだけ緊張する。

「大丈夫。挨拶するだけなら、怖いことなんてないから」

> 明日から、私を知っている人がいない。怖い。

メールはいつも通りの時間で来たんだけど、追いかけるように電話が来た。

「どうしよう。緊張のあまりパニック起しちゃったら」

「起こさない。もし起しちゃったら、あいつのせいにしちやえ」

「そうだね。私は悪くなかった」

自分じゃないモノを責めることは、坂本にはまだ難しい。電話じゃ、頭を撫でるわけにもいかない。

「土曜日、花見しようか」

桜の盛りには何日か早い千鳥が淵を、ぶらぶら歩いた。坂本は面

接の後に次の派遣先が決まり、翌々の月曜から出勤するという。

「今度も、いい人がいるといいなあ。エア・トラッドでは、みんなにお世話になったのに、お礼もできなかった」

実際に坂本に関わったのはほんの数人で、大抵の人間は無関心だった。それでも数人が親身になったことで、坂本はずいぶん救われたんだろう。

「大丈夫かなあ、私」

「逆にさ、誰も知らないんだから、キャラ作っちゃえばいいじゃん。ドSな女王とか」

「それ、素でできるかも」

「・・・げ」

薄いコートになった坂本の肩はやっぱり細くて、時折揺れる視線はまだ不安定だ。

「千鳥が淵の桜、はじめて。満開になったらすごいだろうね」

「そう言えば、桜坂でも今週はイベントだ」

坂本がちよっと上向いて、俺の顔を確認する。

「行こうかな。行っていい？ 帰りに待ち合わせてくれる？」

坂本からの誘いの言葉ははじめてで、ちよっと面食らった。頼りなくても、ちゃんと自己主張してるじゃないか。

「うん。仕事終わってから、おいでよ。待ってるから」

俺だけでいいかどうかなんて、確認しなかった。誰かを誘って欲しいなんて主張は、聞きたくない。

春の淡い日差しの中で、坂本がアルトの声で静かに話す。押し倒すのは、もつと後でいいや。梅の花みたいに控えめな微笑みじゃなくて、大きな口をあけて笑えるようになってからで。

でも、その細い指くらい、握ってみてもバチはあたんないよな。ポケットに突っ込んでた手を出して、坂本の手を探った。

おそろおそろ握った手は、ひんやりとしていたけれど、やわらか



か  
っ  
た。

## 回復方向と下心

ホテルの中庭は、桜まつりを楽しむ人で混雑していた。オープンカフェ形式になった場所で軽いアルコールを楽しむ人や、野外で演奏される音楽に耳を傾ける人も居る桜並木はライトアップされ、普段静かな坂が、この時ばかりは賑やかになる。

待ち合わせた階段にひっそりと立った坂本が、俺の顔を認めてゆっくりと顔の緊張をほぐす。新しい派遣先で、気を張り詰めているのかも知れない。

「何か食べる？」

「そこに、キツシユとグラスシャンパンがあるの」

はつきりと主張してる。これで、今日の状態は理解できる。悪くない。

小さなテーブルを陣取って、フルートグラスを持ち上げようとした時、後ろから聞きたくない声を聞く。

「あつらー、萩原君。グラスは足を持たないと、お酒が温くなるわよー」

何かのイヤガラセですか、山口夫妻（入籍後）。

「萩原とここで会うとは思わなかったなあ。おまえって繁華街にしかないもんだと」

「・・・常に浮かれてるみたいじゃないですか」

同じテーブルにつく気はないらしく、山口さんの目は、場所を探している。坂本が場所を詰めようとする、野口さんが否定の手つきをした。

「ご一緒すると、萩原に視線で刺されそうな気がする。またね、坂本さん」

「あたしたちも一応、新婚なわけ。水入らずにしとくわ」

掻き混ぜといて去っていく山口夫妻を、坂本が振り返って見送る。

「お似合いですよね。ふたりとも賢くて、見た目もステキだし」

「いや、なんか、ヒットポイント倍増っていうか・・・」

坂本がふふつと笑う。

「本当に嫌な人なら、見ない振りして翌日に会社で話題にしますよ。尾鱈つけて」

ああ、尾鱈つけて話題にすることは、確かにしない人たちだな。

津田さんの家のことだって、知らないらしいけど余計な聞き出し方はしてない。

キツシユとシャンパンだけで、男の腹が満足するわけはなく、坂を下りながら食事場所を考えようと立ち上がった。

「私、そんなに食べられませんよ」

「だから、もう少し太って。せめて胸だけでも」

「男のロマンのため？」

「そう。女の胸は、やわらかくあって欲しいね」

だって、触る予定は俺の中では決定事項なんだから。ライトアツプされた桜に、上空から風が吹きつけたらしい。瞬間、花びらが舞う。声を上げて見上げた坂本の横顔に、つい見惚れた。

こんな風に関情を見せてくれる坂本に会うまで、ずいぶん時間は掛かったけれども。

>アットホームな会社で、派遣の私にも歓迎会を開いてくれるそうです。頑張ってください。

おいおい、歓迎会で頑張ってください。メールを見ながら、苦笑する。

>頑張らなくていいから、楽しんでおいで。

今度の会社では、可愛がってもらえているらしい。そうだよな、前に野口さんが「他人に気の遣えるいい子」だって言ってたし、仕事が正確なのは俺も知ってる。ウチの会社にだって、あんなに不安

定でなければ、長く居られた筈だ。

坂本の後に入った派遣のおねえちゃんは、結婚相手の下見にでも来てるみたいで、独身の男にだけ親しげな喋り方をする。去年の俺なら、可愛い子が入ってラッキー、なんて給湯室で軽口オンパレードだった筈だ。

給湯室で、野口さんと新人さんが楽しげに話している。

「あ。女の子の匂いのする所には、萩原君。可愛い子が入って嬉しいでしょ」

「そりゃ、女の子はいい匂いだもん。コーヒーください」

新人さんがサーバーを持ち上げた。

「私の前の人って、彼氏に殴られておかしくなっちゃったんですって？見る目がなかったんですね」

野口さんがあつという顔をしたのと、俺の顔色が変わったのは多分同時だと思う。彼女は無邪気に普通の話題として、出したに過ぎないだろう。一般的な知識ってのは、そんなもんだ。

黙って殴られてたんだから、自分にも悪いところがあったんだろうってね。

「下田さん」

俺は新人さんの名前を呼んだ。

「今晚ヒマ？飲みに行かない？」

野口さんがハラハラした顔をしていたけれど、続けてしまう。下田さんは気が付かなくて、愛想の良い顔で返事を保留してた。

「で、楽しくホテルにでも行ってさ、俺が突然殴りかかったら、やっぱり自分の見る目がなかったと思う？」

「萩原さんはそんなこと、しませんよね」

冗談にしようと下田さんが無理に笑う。もちろん俺も冗談にするつもりだけどね。

「萩原君、来月度の販売目標立てた？」

野口さんがその場から、ベリつと俺を引っぺがした。野口さんの後ろについて、開発営業部の島に向かう途中、後姿のまま声をかけられた。

「いきなり怒鳴るんじゃないかってハラハラしたわ。オトナになっただね、萩原君」

そのまま席について、向かい側の席でニヤリと笑う。

「来月から、売掛残の管理だけしたげようか？」

「工程管理もお願ひします」

「小商いから抜けられたらね。コーヒーなんか飲んでないで、稼いでおいで」

はい、やっぱり頭は上がりません。

「やっぱり、ダメかも」

ベンチで隣に座った坂本が俯く。

「半月頑張ったじゃん。大丈夫、社内でパニック起したりしてないんだろ」

「うん。でも、絶対顔に出てる」

「不機嫌が顔に出るヤツなんて、フツーだろ。気にするほどのものじゃない」

二週連続の土曜日、前の週安定していた坂本が、妙に落ち込んでいる。代々木公園の、葉っぱが出始めた木の下で。

肩、抱いちゃってもいいかな。宥めるために何度か肩に腕を回したことはあるんだけど。そっちに頭が行っているため、坂本の声が妙に遠い。

「私と一緒に居ても、こんな風じゃつまんないよね。私ばかり萩原さんに頼って甘えて、絶対イヤになってる」

「大丈夫、見返り期待してるから」

「いや、腕回しちゃえ。」

「・・・やっぱり細すぎ。肉つけようよ。」

「困りません。」

「俺が困るの。抱き心地が良くないと。」

ほら、憂鬱なことばかり考えてないで、ちょっとは俺のことも考えようよ。

心持ち上がった顔を引き寄せた。今日は感謝に付け込んだり泣いてる目蓋だつたりじゃないぞ。

「目くらい瞑って協力してくれない？」

「え？ちよつと。」

「慌ててごまかしたって、ダメ。下心があるから、頼られると嬉しいの。わかる？」

「わからなくもない・・・んだけど。」

「ごちゃごちゃ聞いてても仕方ないし、逃げる気配はないし、なんせこの態勢になっちゃったんだから、キスしちやあつと。大丈夫、野外でそれ以上に及ぶ気はないからね。」

「これだけの見返りで、ここまで付き合ってくれてるの？」

「いや、今にもっと大きい見返りの期待付き。気が向いたらでいいよ。」

坂本はうーん、と考える顔をする。じっくり考えてくれて構わないんだけどね。

「胸が無くてもいいわけ？」

「それまでに育てといて。」

## 微妙な近さ

日常的に顔を見なくなった坂本を、社内の人たちはすぐに忘れた。派遣社員なんて珍しくもないし、比較的長期だったとは言え、付き合いのある人は少なかったし、積極的に絡みたい相手でもなかったとは確かだ。坂本の代わりに来た経理の下田さんは、独身同士のネットワークにするりと入り込んで、飲み会の席には必ずいるけれども、俺には寄って来ない。

寄って来ないほうがいいけどね。

坂本は、新しい職場に馴染みつつあるらしい。仕事帰りにお茶を飲んだ、なんてメールが来る。

> 同じものを頼んだら、巨大なアップルパイにアイスクリームまで乗っていて、つつきまわしている内に悲惨なものになりました。

自分の意見が言葉に出せないことを、そうやって笑えるようになってきているのだ。

> ベイクドのチーズケーキにしときたかったな。今度はそう言おう。甘いものの写真より、坂本本人の写真を添付してくれればいいのに。

大体、同僚でもない友達と、いつまでも「坂本さん・萩原さん」と呼び合うのは、どう考えてもおかしい。かと言って、「葉月」と呼びたいわけじゃない。

俺が坂本の名を認識したのは、あの男がそう呼んでいたからだ。不愉快なことを思い出す。改名しろなんてわけにもいかず、坂本の個人名称がそれなんだから、気にしても仕方ないんだけど。

名前呼びで、自分のものだと主張したい気がないでもないんだ。山口さんが部署が変わる前に野口さんを「亜佑美」と呼んだのは、それまでプライベートの顔を見せなかった二人が、実はすごく近い

ことを周りに認識させるのに充分だった。そして、全開丸わかりの筈の謎の人・津田さんは、ものつすごくナチュラルに自分の奥さんの名を連呼する。

いいなあ、とか思うわけさ。俺も公用じゃない呼び方をしたいなあって。

そして、坂本がこれから先に俺とどう向き合ってくれるのか、まだ見当はつかない。

キスはしたけど、そんなもんは高校生でもするだろ。頼ってくれてるのはわかるけど、ここから先は発展させる気があるわけ？ 正常な判断があやふやな状態で押し倒して、ますます壊しちゃったら、それは希望するところではない。

じゃあ、正常な判断を下してるって、誰が理解できる？」「ここで治りました」って言える材料のあるもんじゃないんだぞ。

ああ、悶々。

休みの日の坂本は、ちよつとずつロードバイクで流しているらしい。

「たまにはロングで行きたいなあ。体力無いから、途中で低血糖とか起こすと怖いんだけど」

「俺も行く。自転車選ぶの、アドバイスしてよ」

坂本が小首を傾げて俺を見る。

「一揃えすると結構な散財になるから、ちゃんと乗らないと勿体ないよ」

坂本と一緒に出てくれるんなら、ちゃんと乗るつもりなんだけど、自主性ないかな？

「でも、ツーリングのパートナーは嬉しい。お財布、大丈夫？」

「・・・夏のボーナス一括か、ローンで」

ちよつと情けない。



坂本の本カレが告訴されたって聞いたのは、野口さんからだった。最近あの男の話はめつきり減っていたし、坂本も笑顔の出ることが多くなっていたので、そんな情報が入っているとも思わなかった。

「萩原君に言うのと、悪いとか思ったんじゃない？本カレの話はしない程度に気を使えるくらい、回復してるんだよ」

俺のむっとした顔に、野口さんが笑う。

「坂本さんの次の被害者が、腕だかなんだか折られたらしいよ。坂本さんも被害届は出してたから、警察で事情聴取があったみたい。今度こそ、犯罪者」

「どんな風に連絡があったんですか」

なんか面白くないぞ。泣いてたら、俺が真っ先に知りたいのに。

「ん？泣いてたよ。モト君が可哀想だった」

あ、それ聞いたらもっと面白くないかも。早く忘れちゃえばいいのに。野口さんが人の顔を見ながら、ニヤニヤ笑う。

「なーんてね、意外にさばさばしてた。可哀想な人だって言ったのは本当だけど、犯罪は犯罪だった」

俺の表情で遊ぶの、やめていただけませんか野口さん。

ってというか坂本と会ってるなんて、俺は言っていないんですけど、どの程度知ってるんですか。

「優しくて甘えさせるのが上手、なんて誰の話なんでしょうねえ。

合コンの鬼が」

「合コンなんて最近行ってないですって」

女同士の話って怖い。

坂本を部屋に入れたのは、ゴールデンウィーク間近だった。俺の住んでいる場所の隣の駅に、ちょっと話題性のあるビルがあって、そこに行ってみたいなんて話になったからだ。30キロ以内なら自転車で移動するという坂本が、ジャージから着替えたいと言ったの

が発端だったのだが。

「うわ、せめて洗濯物は皺くらい伸ばして干そうよ」

「着ちゃえば伸びるから、いいの。シャツはクリーニングに出して  
るし」

「足の裏、汚れそう」

「一応、これでも昨夜掃除したんだけど」

「どこが！」

自転車に乗った後は、坂本は大概気分が安定している。そして安定している限り、喋りのテンポは速くて陽気だ。

行ってみたいと言った雑居ビルは、どこかの国のバザールみたいに色々な店がごちゃごちゃと入っていて、相手の趣味を知るにはもってこいの場所だった。坂本は東南アジア風の妙な店に居座って、肩掛けバッグやら変な柄のスカーフやらサンダルやらを買った後に「あつ」と声を上げた。

「私、今日バイクだったんだ。リュックに入りきららない」

慌てた顔がおかしくて、吹き出してしまった。

「次に会うときに持ってたげよ。俺の家に置いてけば？」

「いいの？怒らない？」

ここで「怒る」って単語が出てくるのが、ちょっと引っかかりのある部分だな。

「なんで怒るの？巨大な重い荷物じゃなくて、紙袋一つでしょ」

「何にも考えないで買い物して、自分の楽しみだけで迷惑」

「迷惑になんかならない。ただ、俺の部屋で行方不明になる惧れはあるかも」

何か欲しくなっちゃって後先考えないで買い物しちゃう、なんてよくある話なのに、そんなことでも文句言われてたのか。

「はーちゃんは、衝動買いが得意です。忘れてました」

「はーちゃん？」

「うん。葉月のはーちゃん。葉月って発音にくいでしょ？家では、はーちゃん。学生時代は、はっきー」  
そうか、はーちゃんか。

「衝動買いでできるようになって良かったね、はーちゃん」

「うん。欲しいものが決められるって、楽しいことだったね」

本当に嬉しそうな坂本と手を繋いだ。

「俺の名前、知ってる？」

「知ってるよ、慎ちゃん」

何かを、やっと手に入れたような気がした。

## 先に進もう

ワンルームロフト付き、なんてアパートで着替える場所は、狭いバスルームしかない。

「水垢だらけ」

「いいのっ！俺しか使わないんだから！」

調子が良い時の坂本は、結構はつきりとモノを言う女だ。来た時と同じように、自転車に乗るとき邪魔にならないジャージになった坂本の足は意外に筋肉質で、思わずまじまじと見てしまった。

「女の足をじろじろ見ないでくださいな」

「来週はどうする？」

「そんなに律儀に誘ってくれなくても、萩原さんの都合だって」

リュックを背負い、ヘルメットを抱えた坂本が言う。坂本のため会ってるんじゃないんだけどな。

「会えないと寂しいとか言って欲しくないの？」

ヘルメットとリュックが邪魔だから、首に手をまわす。逃げないでくれよ、頼むから。

「言ってるいいの？私がそう言っても、いいの？」

最後まで言わせないで、唇を塞いだ。深いキスになんか持ち込めない、だけど何かを伝えたい。

「ごめんなさい。もう少し」

もう少し待ってて、なんだか、もう少しで結論が出るっていうんだか、とにかく「ごめんなさい」なのだ。拒まれてはいないのに、受け入れてもらっているのかどうかはわからない。十分にしんどい思いをした坂本を、これ以上追い詰める気はない。だから軽くて明るい言葉で、坂本が深刻にならないように待つのが俺の役目だ。

「ま、焦らないでいきましょ。はーちゃんの都合優先で」

何か言いたげな坂本の表情に、笑顔を返してやるくらい、なんでもない。今まで心にもない表情を、女の子に見せ続けてきたじゃないか。

「はーちゃんと呼んでもらうと、ちょっと嬉しい」

照れくさそうな笑顔を見せた坂本を、本当は抱きしめてしまいたかった。

坂本から出てくる言葉に「今度」と「次は」が増えたと気がついたのは、古いメールを整理して削除していた時だ。はじめの頃は本当にぐちゃぐちゃで、わけのわからない泣き言と決意表明みたいな文章が並んでいる。それが少しずつ、お茶を飲みに行ったの誰だかがこんな話をしたのって他人の話題も混ざりはじめ、最近では「こんなことをしたい」なんて前向きなものがある。

出会いまで遡った段階でカウンセリングはひとまず終わり、どう思いついても失敗は「出会ったこと」だったのだと坂本が納得しはじめた頃、やっとモトカレの話が坂本の口から聞いた。

「刑事告訴されたみたい。罰を受けて変わるとは思えないけど、彼にとっても良いことだと思う」

DV加害者は、育った家庭環境がそうなのだと調べて知った後だ。ただ、その環境で育っても、そうならない人間だって確かに居て、暴力の正当化にはならない。何らかの治療や「育ち直し」が必要だとしても、爆発した感情を受け止める側が怯えて言う事を聞いてしまえば、ヤツの中で怒りと暴力は肯定される。抑えるのは自分しかないのだと、他人が納得させることは難しい。

>今日は助けてもらっていい？

残業中に受け取ったメールで、坂本を待たせていた桜坂に向かう。

少し遅い時間で、帰り時間は大丈夫かと気にしながら、ホテルの内庭で坂本と会った。

「ごめんね、忙しいのに」

「何かあった？」

坂本はずいぶんと疲れた表情で、俺の顔を見上げた。

「あのね、モト君から詫び状が来たの」

「詫び状？」

「どこが間違ってたんだろう、なんで駄目だったんだろうってずっと考えてて、彼はすごく苦しそうなを知ってたから」

石のベンチに導いて、並んで腰を下ろした。

「モト君で、本当に優しい人だったの。だから、いつか変わるだろうって思い続けてた。でも、今回の刑事告訴の話を聞いて、ほっとしたの。私だけが変わってあげられなかったんじゃないって。私の力が足りないんじゃないかって自分なりに納得したのに」

絞り出すような声で、坂本が話す。

「葉月に辛い思いをさせてごめんって。逃げてくれて良かったって私と一緒に壊れてあげれば、彼は救われたのかな」

「俺は、はーちゃんが完全に壊れる前に逃げてくれて、嬉しい」

ホテルの内庭は明るくて人が通るけど、いいや。肩を引き寄せ、坂本を懐に抱えた。

「はーちゃんのはーちゃんの事を大事にしているんだ。あいつだって、はーちゃんが好きだったら、完全に壊す前で良かったと思うって思う」

「自分が救われるより？」

「そう思ったから詫び状が来たんだろ。自分のために傷ついて欲しくない」

ああ、ガラじゃないこと言ってる。本当は告訴に関する裏があるのかも知れないけど、それを言っても仕方がない。

女の子に「部屋に泊めて」なんて言われて断るのは、ものっすく理性が必要だと改めて知った。

まして、どうにかしたいと思っっている当の本人にだ。

「やだね」

ああ勿体ない。勿体ないけど、絶対にこれは何か違う。

「どうして？期待していた見返りって、そうじゃなかったの？」

「それは、はーちゃんが俺とそうなりたかって思ったときでしょー？そんなヤケクソみたいなの、やだね。俺にだってプライドあるもん」

なけなしの理性を振り絞るだけで、坂本の表情なんて見る余裕ないんだ、ごめん。でも後悔するために俺を使われるのだけは、承知できない。

傷ついてる坂本に、恥をかかせたかったわけじゃない。桜坂のはずれの小さな階段で、坂本は下を向いたまま立ち止まった。

「卑怯なこと、言ったね。断られると思ってなかった。萩原さんなら、きつと言っこと聞いてくれると」

「見縊んな。そこまでがつついてねえ」

意外に強い声が出てしまい、自分で慌てた。坂本の肩がびくりと怯えるのが見えたが、ここで撤回するわけには行かない。

「役に立てなくて申し訳ないけど、俺は協力できない。それ以上自分を追い込むの手伝いなんて、御免蒙る」

「ごめんなさい」

顔を覆った坂本の肩が細い。

「考えたくなかったの。一人じゃ頭から追い出すこともできなくて、なんて言っってやって良いのかわからなくて、ただ背中に腕を回した。細くて頼りなくて、やっと立っているような坂本が、声を殺して泣く。」

「大丈夫だから。ここまで取り戻したじゃないか。だから、もう少し自分を大事にしてよ」

もっと自分を大事にできるようになれば、俺の会いたい坂本に会えるのに。腕に力を籠めてみる。坂本とそうなるんなら、もっと幸せな気持ちで坂本に触れたい。

「俺は好きだから。だから、それ以上辛くなんてなつて欲しくない」  
途方に暮れた気分で、坂本の髪を撫でた。

どこが好きとか、どの部分が気に入っているとか、そういうわけじゃない。はつきり言うと、坂本に惹かれる要素なんてないんだ。それでも俺は坂本に笑って欲しいし、痩せぎすの身体に重い荷物なんて担いで欲しくない。

つまり、これが好きだつてことだろ。

坂本が見ているものを一緒に見てやることはできないんだ。もどかしいけど、坂本自身が解決するのを待つしかない。

ゴールデンウィーク何日か前なのに、坂本は泣きながらの電話が復活し、俺はそれを聞くしかなかった。そして連休後半になった途端、「憑き物が落ちたように」坂本は元気になった。

腑に落ちない変化に戸惑ったけれど、坂本なりに整理がついたらしい。ぼつりぼつりと聞いた話は、ちょっとぎよつとするものだった。

「私みたいな人間は死んじゃつてもつて思ったときにね、エア・トラッドに居た時のことを思い出したの。パニック起こして迷惑かけて、ストーカー騒動になつても、何人もの人が私を守ってくれた。死んじゃつても良いんなら、あの時死んじゃうことも出来たのに、私はそんなことしなかった。今死んじゃつたら、あの時のことが全部無駄になつちゃう」

俺の慌てた顔を見て、坂本がいつもの微笑を作る。

「大丈夫、そう思ったら開き直れたの。底まで見ちゃったのに、浮



上途中でリタイヤなんてしてられない」

「慎ちゃん」

名前で呼ばれるってのは、なんていうかちょっと照れくさいね。

「元気になった私を一番見て欲しいのは、慎ちゃんだから」

本当にはつきりと話すようになったな。聞き取りやすいアルトの  
声が、まっすぐに俺の耳に届く。

「バイク、選ぶの手伝わせてくれる？それとも、もう興味ないかな。  
私にもバイクにも」

「試すようなこと言わないでくれる？まだ見返りを受け取ってない  
んだから」

軽やかに笑った坂本の顔は、今度こそと思えるものだった。

その勘を頼りに、先に進もうと思う。もう必要以上に気を遣うの  
をやめる。坂本が坂本である以上、記憶はどうしたってついてくる  
んだから、生活はその上に置くしかないのだ。

薄暗くて、怯えた顔をしていた坂本が、俺の目の前で笑う。これ  
からまだ、フラッシュバックしたり苦しんだりすることはあるのか  
も知れない。その時には、坂本が必要以上に自分を責めたりしない  
ように、俺が思い出させてやる。

坂本は何も悪くなかった。最初から最後まで全部聞いた俺は、ち  
やんと知っているから。

## あしたの君と

「本当は連休中にバイク買ってね、軽く走ろうかなって思ってた。でも自分でシヨップに行くより、はーちゃんに見てもらいたかったし」

「ごめんなさい。予定壊しちゃったね」

「俺だけが勝手に組んでた予定だもん。ちゃんとのんびりしたし、友達とも飲みに行ったし、それなりに連休楽しんだから、いいの」

坂本が不安そうに俺の顔を窺う。バカの一つ覚えの代々木公園で、珍しくパンツスタイルじゃない坂本が、鳩にフライドポテトを投げている。

「これから、シヨップに見に行ってみる？」

遠慮深い口調で、坂本が言う。うん、異存はないんだけどさ、せつかく薄着になったんだし、スカートだし。細いとは思ってたんだけど、骨が細いんだな。痩せぎすかと思ったら、意外に柔らかさそう。

「ちよつとだけ、そつちの木の後ろに行かない？」

「その言い方、なんかいかがわしい」

いいじゃん、ちよつとキスしたいだけ。

「移動してくれないと、ここで抱きついちゃうけど、文句言わない？」

「・・・言っ」

植え込みの影に隠れて、抱きしめてキスした。遠慮がちに俺の背にまわった指は細くて、唇は柔らかい。薄着の胸を感じて、中学生みたいにドキドキする。こんなに近くにいて、そう思っただけで、なんだか舞い上がりそうだ。こうしていてくれるってことは、坂本もこうしたいと思ってくれてるって考えていいんだよな。肩に触れる坂本の吐息が暖かい。

「見返りにならないな。私の方が方がいい」  
笑いを含んだ言葉の意味は、そのままに受け取っていいんだろうか。

自転車を見に行こうと、芝生の上を歩きだす。

「ワザとかどうかわからないから、聞いてちょう」

坂本が悪戯っぽい顔をする。ああ、こんな顔をするようになったんだな。可愛いじゃないか、畜生。

「最近、一緒に帰ろうとかラブホとかって言わなくなったね」

そうだ、言えなくなった。女の子に求めるものが、それじゃなくなったから。

坂本の爽やかな薄い緑（チェレステカラーと言って！だそうだな）なバイクと、俺の赤いバイクを縦に並べて、チェーンロックを二台に渡す。あのジャージはちょっと恥ずかしいので、チェーン側だけジーンズを膝まで折る。

「ロングで乗ったら、そんなこと言えなくなるよ。夏までに慣れてね」

坂本の家と俺のアパートの真ん中あたりがちょうど代々木公園で、乗り慣れなくて姿勢が悪いらしい俺には、手頃な距離だ。

陽気が良い時期、ベンチの上に長くなって背中を伸ばす。横に座っている坂本の膝枕を期待したんだが、俺が背を倒した途端、端に避けやがったのだ。

今度の会社はアットホームな分なあなあで仕事をするから、月末月初は確認仕事に追われるなんて話を、朗らかにしてる。ああ、平和だ。俺の好きな声が心地良くて、目を閉じて聞く。

初夏の風がベンチの上に吹き、一瞬眠ったらしい。

寝ちゃった、と慌てて目を開けると、坂本と視線が絡んだ。

「俺、寝てた？」

「何分かね。気持ち良さそうな顔してたよ」

起き上がったって、頭を掻く。女の子を放っておいて寝ちゃうなんて。風が気持ち良いもの。思い煩うこともなくって、幸せ」

胸を張って風を受け止めた坂本が、満足げな溜息をつく。

「こうなるまでに、慎ちゃんにたくさん手を借りたね。今度は、私の番。私は何をしたら良い？」

何をして欲しいんだろう？坂本に何をして貰えば、俺は報われた気になるんだろう。一晩つきあって、お互いに楽しく遊びましたね、なんてのじゃない。

俺が欲しいものは。

梅の花じゃなくて、真夏の花が開いたように坂本が笑う。俺が欲しいものは、この表情だったんだ。遠慮がちなビクビクした顔じゃなくて、自分の感情を乗せた表情。

「何も、いらないや。はーちゃんがはーちゃんなら」

「そんなわけには・・・」

何か言いかけたので、肩に腕を回した。

「言ったでしょ？構いたくなるのは下心。はーちゃんがその気になる期待付き」

「じゃ、近いうちに達成」

「近いうち？」

びっくりして聞き返すと、坂本の目が笑っていた。

「うん。お部屋のお掃除、ちゃんとしとくのよ。シーツもお洗濯して、皺を伸ばして」

何度も聞き返したくなるのを、喉の奥に飲み込んだ。

「掃除、するっ！明日も一日中するー！」

「いや、そんなに張り切らないで。期待するようなものじゃないから」

「張り切って期待する！」

笑いながら、坂本が立ち上がる。細い肩から伸びた腕を上には伸ばしながら。

「この前、家に泊めて欲しいと言って断られてから、慎ちゃんを本気で好きになったの。嫌な役割を押し付けたのに、慎ちゃんは私のことを考えてくれた。だから自分で立たなきゃと思ったの」

座ったままの俺を見下ろして、坂本が言う。視線をまつすぐに俺に向けて。

ああ、坂本は綺麗だ。俺が欲しかったのは、こんな坂本だ。

初のロング・ツーリングの計画をして、宿泊するホテルに着替え一式を送ったら、坂本からメールがあった。

> めいっばい楽しんで走ろう！ワクワクが止まりません。

うん、俺もワクワクする。楽しむことだけを考えて、一緒に走ろう。顔いっばいに満足を浮かべた坂本に会う。

> 一緒に楽しもう。海沿いの道、風が気持ち良いだろうな。

あした、笑顔だらけの坂本に会う。どれだけ一生懸命立ち直ったか俺はよく知っているから、その笑顔の価値も知ってる。

一生懸命とか必死とかウザいなんて思ったままなら、俺はそれに出会うこともできなかった。これからは大切に走り出そう。

あしたの君と。

f i n .

あしたの君と（後書き）

最後までおつきあいいただき、ありがとうございました。  
もっと掘り下げられたのではないかと、反省する点は多々ございます。

それでも、もし私の書くものを気に入っていただけましたら、また  
お会いしたく存じます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4750r/>

---

あしたの君と

2011年6月28日00時50分発行